

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第29冊

鹿田遺跡 8

— 第14次調査 —

(岡山大学病院病棟新営に伴う発掘調査)

2014年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

今回報告するのは、2003年（平成15年）におよそ5カ月をかけて実施された調査の成果で、位置は現在の入院棟の東寄りの部分にあたります。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての水田にかかわる遺構や、11世紀後半から15世紀後半にかけて、屋敷地を含む集落の跡が発掘されました。

中世への動きが活発化しはじめた11世紀後半ごろ、この調査地点でも2カ所に井戸が掘られています。そのうちの井戸1からは、井戸廃絶後に残ったくぼみのなかから多量の椀や皿が出土しました。直径15センチメートル、深さ6センチメートルほどの椀と、やや深めの皿に小皿という3点セットが食膳で用いられていたのでしょうか。なかには椀を裏返し高台の部分に墨を入れて使っていたものもあります。地元の土師質土器だけでなく、淀川沿いに位置する楠葉の瓦器椀もあり、旭川河口部に近い交流の拠点として鹿田遺跡が大きな役割を果たし始めたことを物語っているものと思われます。

井戸3から出土した「呪符木簡」も興味深い資料です。幅6センチメートル弱で、元々の長さは40センチメートルをこえるものだったのでしょうか。北斗七星を表わす「天崗星」の文字に始まり、星座や、歌舞伎の隈取を思わせる顔の表現のほか、「木火金水」という陰陽五行にかかわる文字もあり、全体におどろおどろしい雰囲気^{くまどり}をただよわせています。下を尖らせて土にさして使ったものと思われます。井戸3は11世紀末から12世紀初頭に埋められており、この時期のくまじないの実態を知る手がかりになる資料です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事）

副センター長（大学院社会文化科学研究科 教授）

門 岡 裕 一

新 納 泉

目 次

第1章 歴史的・地理的環境	1
第1節 遺跡の位置と周辺遺跡	1
第2節 鹿田遺跡	3
1. 構内座標の設定	3
2. 鹿田遺跡（岡山大学鹿田キャンパス）の調査概要	5
第2章 調査の記録	9
第1節 調査に至る経緯と経過	9
第2節 調査の概要	10
第3章 調査の記録	15
第1節 調査地点の位置と層序	15
第2節 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物	19
a. 溝	19
b. 高まり	22
第3節 平安時代後半～戦国時代の遺構・遺物	23
a. 井戸	24
b. 土坑	37
c. 柱穴	39
d. 溝	40
第4節 江戸時代の遺構・遺物	58
a. 土坑	58
b. 溝	65
c. ため池状遺構	66
d. 畦畔	69
第5節 その他の遺物	70
第4章 自然科学的分析	71
1. 鹿田遺跡第14次調査出土木製品の樹種	71
2. 鹿田遺跡第14次調査出土木製品 漆塗膜分析	73
3. 鹿田遺跡第14次調査出土動物骨遺存体	74
4. 鹿田遺跡第14次調査における植物珪酸体分析	75
5. 鹿田遺跡第14次調査における花粉分析	79
第5章 結語	83

挿図目次

第1章		図40 溝11・出土遺物	43
図1 周辺遺跡分布図	2	図41 溝12・出土遺物	44
図2 発掘調査地点と構内座標	4	図42 溝13	44
第2章		図43 溝14・出土遺物	45
図3 調査風景	10	図44 溝15完掘状況	45
図4 検出遺構全体図	11	図45 溝15	46
第3章		図46 溝15土層堆積状況	47
図5 調査地点の位置	15	図47 溝15出土遺物1	48
図6 土層断面図1	16	図48 溝15出土遺物2	49
図7 土層断面図2	17	図49 溝15出土遺物3	50
図8 土層断面	18	図50 溝15出土遺物4	51
図9 弥生～古墳時代検出遺構全体図	19	図51 溝16	52
図10 8層出土遺物	19	図52 溝16出土遺物1	53
図11 溝1～3	20	図53 溝16出土遺物2	54
図12 溝4～7	21	図54 溝17	55
図13 高まり1～4断面	22	図55 溝17出土遺物	56
図14 平安～戦国時代検出遺構全体図	23	図56 溝18・19・出土遺物	56
図15 井戸1	24	図57 溝20・21	57
図16 井戸1出土遺物1	25	図58 江戸時代検出遺構全体図	58
図17 井戸1出土遺物2	26	図59 土坑7・出土遺物	59
図18 井戸1出土遺物3	27	図60 土坑8	59
図19 井戸2・出土遺物	28	図61 土坑8出土遺物	60
図20 井戸3・出土遺物	29	図62 土坑9・10・出土遺物	60
図21 井戸3	30	図63 土坑11	61
図22 井戸4・出土遺物	31	図64 土坑12	62
図23 井戸5	32	図65 土坑13・出土遺物	62
図24 井戸5出土遺物	33	図66 土坑14	63
図25 井戸6・出土遺物	33	図67 土坑15	63
図26 井戸6	34	図68 土坑16	64
図27 井戸7	34	図69 土坑17	64
図28 井戸8・出土遺物	35	図70 土坑18	65
図29 井戸9・出土遺物	36	図71 溝22・23	65
図30 井戸10	37	図72 溝24	65
図31 土坑1	37	図73 溝25	66
図32 土坑2	38	図74 ため池状遺構平面図	66
図33 土坑3	38	図75 ため池状遺構断面図	67
図34 土坑4～6	39	図76 ため池状遺構出土遺物	68
図35 ビット・出土遺物	40	図77 畦畔	69
図36 溝8・出土遺物	40	図78 包含層出土遺物	70
図37 溝9	41	第4章	
図38 溝10	41	図79 鹿田遺跡第14次調査木製品の樹種	72
図39 溝10・出土遺物	42	図80 第14次調査出土木製品の漆塗膜	73

図81	鹿田遺跡14次調査出土動物遺存体	74	図86	鹿田遺跡第14次調査、3区南壁地点における植物珪酸体分析結果	77
図82	ウシ下顎骨出土状況	74	図87	鹿田遺跡第14次調査、1区西壁における花粉ダイアグラム	81
図83	採取地点の位置	75	図88	鹿田遺跡第14次調査、3区南壁における花粉ダイアグラム	81
図84	植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真	76	図89	花粉・胞子の顕微鏡写真	82
図85	岡山大学鹿田遺跡第14次調査、1区西壁地点における植物珪酸体分析結果	77			

表 目 次

表1	検出遺構一覧	12	表5	動物遺存体一覧	74
表2	各區別ピット数	39	表6	岡山大学鹿田遺跡第14次調査における植物珪酸体分析結果	76
表3	木製品の樹種	71	表7	鹿田遺跡第14次調査における花粉分析結果	80
表4	塗膜断面の観察結果	73			

図 版 目 次

図版1	平安時代後半の土器（井戸1）	図版4	平安～江戸時代の陶磁器
図版2	平安～鎌倉時代の土器（土師質土器椀・杯・皿）	図版5	土製品・石製品・金属器
図版3	平安～鎌倉時代の土器 （瓦器・白磁・土師質鍋・須恵質甕）	図版6	木製品

例言

1. 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学病院病棟新営に伴って実施した鹿田遺跡第14次調査の発掘調査報告書である。調査地点は、岡山市北区鹿田町二丁目5番1号に所在する。
発掘調査地点は鹿田地区構内座標CD～CM・12～20区に位置し、期間は2003年7月13日～12月17日、調査面積は1,331㎡である。
2. 発掘調査は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても同委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げます。
3. 本書作成にあたっては、木材の樹種同定を能城修一氏（森林総合研究所）に依頼した。同定報告については岡山大学構内遺跡発掘報告第28冊「鹿田遺跡7」に掲載している。石器の同定は鈴木茂之氏（岡山大学大学院自然科学研究科）に、近世陶磁器に関して乗岡実氏（岡山市教育委員会）に、中世土器について福田正継氏（岡山理科大学）に、木簡に関して久野修義・今津勝紀両氏（岡山大学社会文化科学研究科）に、出土獣骨について富岡直人氏（岡山理科大学）に、郷原漆器について高山雅之氏（郷原漆器生産会会長）にそれぞれ教示いただいた。記して感謝申し上げます。
4. 調査時の遺構実測・写真撮影は、岩崎志保・高田浩司・野崎貴博・横田美香・福井優・本堂春生が行った。
5. 報告書作成にあたっての担当は以下の通りである。
〈遺物〉土器・土製品の実測・浄写・観察表：岩崎・西本尚美・山本悦世
石器の実測・浄写・観察表：岩崎・西本・南健太郎
遺物写真：南
〈遺構〉浄写：井上佐智・岩崎・西本
6. 本書の執筆は岩崎が担当し、第4章については表題の次に示した。
7. 編集は新納泉副センター長・山本悦世室長の指導のもとに、岩崎が担当した。
8. 調査の概要は『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003』において一部報告しているが、本書をもって正式報告とする。
9. 本書に掲載した調査の記録・出土遺物はすべて当センターで保管している。

凡例

1. 本書で用いる高度値は海拔標高であり、方位は国土座標第V座標系（世界測地系）の座標北である。
2. 遺物番号は、遺構別に付す。ただし土製品にはT、石器にはS、木製品にはW、金属製品にはMをつけて全体で通し番号とする。
3. 遺物に関するデータは観察表にまとめ、実測図と組み合わせて掲載している。拓本は内外面を掲載する場合には、左側に外面、右側に内面を置く。片面の場合は外面を基本とした。観察表の表記基準は以下の通りである。①内外面の色調を表記する場合は、「内面／外面」の順に表示する。②胎土は、微砂：砂粒径0.5mm未満、細砂：同0.5～1mm未満、粗砂：同1～2mm未満、細礫：同2mm以上を基準とする。③法量の単位は「cm」である。復元値には（ ）を付した。
4. 遺構は挿図などで以下のように記号で種類を表記する場合がある。井戸：SE、土坑：SK、溝：SD、柱穴：P
5. 土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnと表記した。
6. 巻末図版の遺物番号は本文中の遺物番号に一致する。
7. 本文中の時期表記は平安時代中頃～戦国時代を中世、江戸時代（1600年以降）を近世と表していることがある。

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は岡山市街地南部に所在する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のほぼ全域と、その周辺に広がりをもつ縄文時代～近世の複合遺跡である。

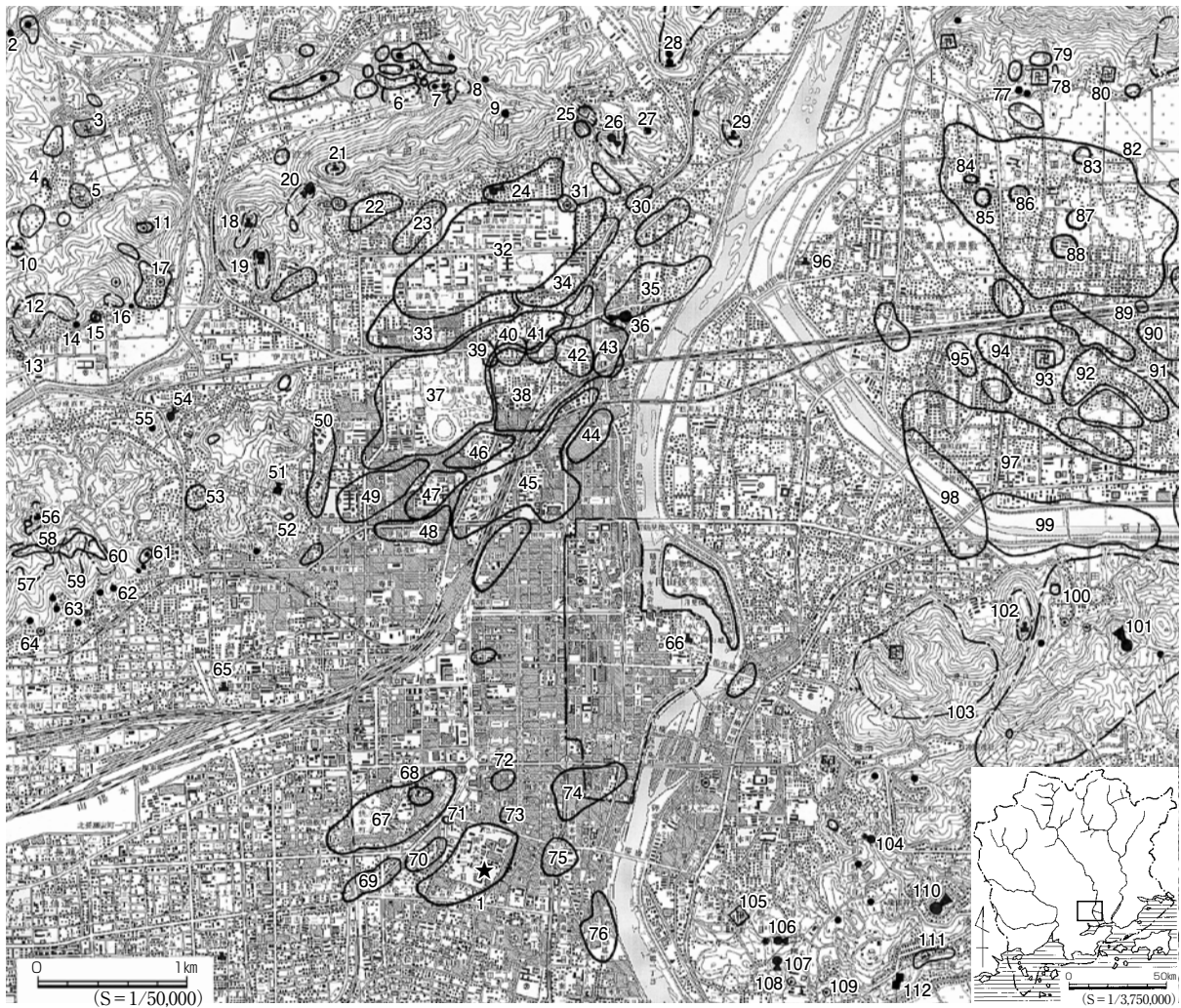
旭川は中国山地を開析しながら、狭い河谷を抜けて南流する。丘陵から平野へと遷る岡山市北区三野付近から流れは幾筋もの小河川となり、その間に自然堤防と後背湿地が点在する複雑な地形を形成した。本遺跡が位置する岡山平野は、旭川の堆積作用によって形成された沖積平野である。平野の周囲は半田山、龍ノ口山、操山など、標高150～250m前後の山塊によって囲われ、南は児島湾に面する。近世以降の大規模な干拓により、平野は南へと拡大し、さらに現在では急速な市街地化も相俟って平野の古地形を窺いしることは難しい。本遺跡は旭川の西岸約1km、児島湾からは北へ約7kmの位置にあるが、近世の干拓以前には瀬戸内海とは至近の位置にあった。

本遺跡の周辺で確認されている人間活動の痕跡は旧石器時代までさかのぼるが、現在のところ、その証はわずかで、操山山塊でナイフ形石器や細石器が採集されているのみである⁽¹⁾。最終氷期が終わり、気候が温暖化に転じると、氷河の溶融に伴う海進が始まる。海進のピークは縄文時代前期頃であり、現在の岡山平野の広い範囲が水没したと考えられる。この時期に、半田山の裾部には朝寝鼻貝塚が⁽²⁾、そして中期中頃には津島岡大遺跡において遺構・遺物が確認される。続いて後期には津島岡大遺跡⁽³⁾、百間川沢田遺跡⁽⁴⁾などで住居址や貯蔵穴などの居住痕跡が認められる。いずれも半田山や操山の山裾部に近い微高地に限られた立地である。そうした中で鹿田遺跡では中期前半～晩期の土器がわずかに確認されており⁽⁵⁾、旭川河口付近に形成された砂州状の高まりが点在していたことを窺わせる。

縄文時代の終わり頃、北部九州で受容された水稲農耕が列島各地へ伝えられるなか、瀬戸内地域では比較的早い段階に水稲農耕を受容したとみられる。岡山平野における水田遺構として、旭川西岸では弥生時代早期にさかのぼる可能性が指摘されている津島江道遺跡⁽⁶⁾、弥生時代前期の津島岡大遺跡⁽⁷⁾から津島遺跡⁽⁸⁾一帯の遺跡群⁽⁹⁾、旭川東岸では百間川遺跡群⁽¹⁰⁾などがある。これらの調査成果から、前期にはかなり広範囲に水田が営まれていたことが明らかとなってきている。

旭川西岸域では中期を代表する南方遺跡群⁽¹¹⁾や絵図遺跡⁽¹²⁾・上伊福遺跡⁽¹³⁾、後期になると、伊福定国前遺跡⁽¹⁴⁾・天瀬遺跡⁽¹⁵⁾などの集落遺跡を挙げることができる。鹿田遺跡では中期後半から集落が確認される⁽¹⁶⁾。一方水田は、鹿田遺跡⁽¹⁷⁾や天瀬遺跡・大供中道遺跡⁽¹⁸⁾で水田畦畔が検出されており、臨海性の集落でも、水稲農耕も含めた複合的な生産活動を行っていたことがわかってきた。

弥生時代末～古墳時代前期には、岡山平野を囲む山塊に弥生墳丘墓や前方後円（方）墳が数多く築かれ、複数の首長墓系譜を読み取ることができる。旭川西岸では半田山山塊上に都月坂2号墳丘墓⁽¹⁹⁾、都月坂1号墳⁽²⁰⁾、七つ坑古墳群⁽²¹⁾が、旭川東岸では北側の龍ノ口山塊上に備前車塚古墳⁽²²⁾が、南側の操山山塊上に操山109号墳⁽²³⁾、網浜茶臼山古墳⁽²⁴⁾が築かれる。これらの首長墓の系譜は平野内に点在する集落を営んだ集団に対応すると考えられており、鹿田遺跡を営んだ集団との関連が考えられているのは操山109号墳、網浜茶臼山古墳である⁽²⁵⁾。岡山平野における大型前方後円墳の築造は古墳時代前期後半から中期初頭に最盛期をむかえるが、中期の造墓活動は低調で縮小傾向にある。後期に入ると、周辺の山塊に横穴式石室を有する中小の円墳が多数築かれる。旭川西岸では平野西部の京山・矢坂山山塊に、東岸では龍ノ口山塊、操山山塊に築造される中小の横穴式石室墳が見られる。中には沢田大塚古墳のような大型の横穴式石室をもつものや、唐人塚古墳⁽²⁶⁾のような切石造りの石室を有する有力な古墳が認められる。



- | | | | |
|---------------------------|----------------------------|------------------------------|---------------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (弥生～近世) | 31. 朝寝鼻貝塚 (縄文前～後期) | 60. 正野田古墳群 (古墳後期) | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群 (弥生～室町) |
| 2. 富原西奥古墳 (古墳) | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世) | 61. 関西高校裏山古墳群 | 89. 雄町遺跡 (弥生～古墳) |
| 3. 荒神廃寺 (飛鳥～平安) | 33. 津島新野遺跡 (弥生) | 62. 若宮古墳 (古墳後期) | 90. 乙多見遺跡 (弥生) |
| 4. 上の段窯跡 (奈良) | 34. 津島江道遺跡 (縄文～近世) | 63. 乞食谷古墳 (古墳後期) | 91. 関遺跡 (弥生) |
| 5. 矢望城廃寺 (奈良) | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世) | 64. 貝塚 (不明) | 92. 赤田東遺跡・関遺跡 (弥生～室町) |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期) | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期) | 65. 高柳城跡 (室町?) | 93. 幡多廃寺 (飛鳥～平安) |
| 7. 播鉢池古墳群 (古墳後期) | 37. 津市遺跡 (弥生～近世) | 66. 岡山城跡 (室町～近世) | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町) |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期) | 38. 北方上沼遺跡 他 (弥生～近世) | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世) | 95. 原尾島遺跡 (弥生～室町) |
| 9. タイミ山古墳 (古墳中期?) | 39. 北方下沼遺跡 (弥生～室町) | 68. 大供東浦遺跡 (弥生～室町?) | 96. 中島城跡 (室町) |
| 10. 蜂矢城 (室町) | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町) | 69. 鹿田本町遺跡 (仮称) | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世) |
| 11. 坊主山遺跡 (古墳～室町) | 41. 北方中溝遺跡 (弥生～室町) | 70. 鹿田遺跡 (県立岡山病院) | 98. 百間川原尾島遺跡 (縄文中期末～近世) |
| 12. 中橋津古墳群 (古墳後期) | 42. 北方地藏遺跡 (弥生～近世) | 71. 散布地 (旧名: 大供遺跡) (弥生) | 99. 百間川沢田遺跡 (縄文中期～近世) |
| 13. 貝塚 (不明) | 43. 北方藪ノ内遺跡 (弥生～近世) | 72. 大供中道遺跡 (弥生～室町) | 100. 操山219号遺跡 (旧石器) |
| 14. 若宮八幡裏古墳 (古墳) | 44. 広瀬遺跡 (弥生) | 73. 散布地 (弥生他) | 101. 金蔵山古墳 (古墳中期) |
| 15. 東橋津貝塚 (不明) | 45. 南方遺跡他 (弥生～近世) | 74. 天瀬遺跡 (弥生～近世) | 102. 妙禪寺城跡 (戦国) |
| 16. 東橋津1号・2号墳 (古墳後期) | 46. 絵園遺跡 (弥生～平安) | 75. 新道遺跡 (奈良～近世) | 103. 操山古墳群 (古墳後期) |
| 17. 首部 (白山神社) 首塚 (鎌倉～室町?) | 47. 上伊福遺跡 (弥生・古墳) | 76. 二日市遺跡 (弥生～近世) | 104. 操山103号墳 (古墳前期) |
| 18. 鳥山城 (笹ヶ迫城) 跡 (室町) | 48. 上伊福 (立花) 遺跡 (弥生～室町) | 77. 唐人塚古墳 (古墳後期) | 105. 網浜廃寺 (飛鳥～平安) |
| 19. 七つ塊墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 49. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡 (弥生～近世) | 78. 賞田廃寺 (飛鳥～室町) | 106. 網浜茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 20. 都月坂墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 (弥生～平安) | 79. 賞田廃寺窯跡 (奈良) | 107. 操山109号墳 (古墳前期) |
| 21. 半田山城 (戦国) | 51. 津倉古墳 (古墳前期) | 80. 浄土寺 (奈良～室町) | 108. 操山202号遺跡 (平安～奈良) |
| 22. 津島福居遺跡 (古墳～室町) | 52. 妙林寺遺跡 (弥生) | 81. 湯迫古墳群 (古墳前期) | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?) |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期) | 53. 石井廃寺 (奈良?～室町) | 82. 備前国府関連遺跡 | 110. 湊茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町) | 54. 青陵古墳 (古墳前期) | 83. 北口遺跡 (弥生～室町) | 111. 湊荒神遺跡 (奈良～室町) |
| 25. 津島3丁目第1地点 (弥生・古墳) | 55. 十二本木塚古墳 | 84. 備前国庁跡 (奈良～平安) | 112. 大塚山経塚 (鎌倉～室町) |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期) | 56. 富山城跡 (室町～江戸) | 85. 備前国府推定地 (南国長) 遺跡 (弥生～鎌倉) | |
| 27. 不動堂古墳 | 57. 矢坂山西古墳群 (古墳後期) | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安) | |
| 28. 宿古墳群 (古墳前期・後期) | 58. 矢坂山山頂遺跡 (弥生) | 87. ハガ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) | |
| 29. 杵見山城跡 (戦国) | 59. 矢坂山東古墳群 (古墳後期) | | |
| 30. 釜田遺跡 (弥生他) | | | |

図1 周辺遺跡分布図

遺跡名と内容は「改訂岡山県遺跡地図〈第6分冊岡山地区〉」2003岡山県教育委員会に準拠し一部加筆した。

古墳時代の集落の消長をみると、初頭の集落は弥生時代から継続するものが多く、本遺跡のほか、旭川西岸では津島遺跡²⁷⁾、伊福定国前遺跡²⁸⁾、旭川東岸では百間川遺跡群²⁹⁾などがある。これらの集落は前期から中期に縮小もしくは断絶が見られる傾向がある。中期後半～後期にかけては、旭川東岸では百間川原尾島遺跡³⁰⁾、旭川西岸では津島遺跡³¹⁾、津島岡大遺跡³²⁾・伊福定国前遺跡³³⁾などで集落が確認される。

飛鳥・奈良時代には官衙や寺院などの拠点的な施設が造営され、領域の管理を目的とする条里制が施行されるが、これらから同時期の地方支配の一面をうかがうことができる。旭川西岸では明確な寺院は確認されていない³⁴⁾が、旭川東岸では飛鳥時代に創建され、平城宮式瓦が出土した賞田廃寺³⁵⁾のほか、幡多廃寺³⁶⁾、網浜廃寺など5カ寺が知られている。官衙とみられる遺跡や寺院の発掘調査では、特に備前国府に関連する官衙とみられるハガ遺跡³⁷⁾、総柱建物や「市」の墨書がある土器を出土した百間川米田遺跡³⁸⁾などで成果がある。一方旭川西岸では本遺跡³⁹⁾で集落が確認されるほか、新道遺跡⁴⁰⁾で8世紀頃の火葬遺構を含む遺構が確認された。飛鳥・奈良時代の寺院については、旭川の両岸において、数の不均等な状態にあることも指摘されている。また旭川河口周辺では網浜廃寺を含め、特殊な遺構・遺物の受容がみられることから、後の鹿田荘の成立を考えるうえで注目される。

平安時代～室町時代には、岡山平野の南半部においては鹿田荘をはじめとするいくつかの荘園が成立したことが知られる。鹿田荘は藤原摂関家殿下渡領の一つとして藤原氏長者が代々領してきた荘園である。その所在については歴史地理学研究成果から岡山市北区鹿田町周辺が有力な比定地とされてきた。鹿田遺跡⁴¹⁾に加え、周辺の新道遺跡、大供本町遺跡⁴²⁾での調査事例が増し、当該期の資料が蓄積されてきている。旭川河口西岸の二日市遺跡⁴³⁾でも、井戸や柱穴が確認されている。このように考古学的に鹿田荘の領域や内容を明らかにするための資料的基盤が整いつつある。一方、旭川東岸では百間川遺跡群において当該期の集落遺跡が知られており、大形の橋や区画された屋敷地などの調査が進んできている。戦国期には鹿田遺跡第20次調査地点⁴⁴⁾では区画溝で囲まれた屋敷地が確認されており、大供本町遺跡でも同時期の屋敷地の並びが確認されている⁴⁵⁾。この時期の集落についても具体的な様相が明らかになりつつある。

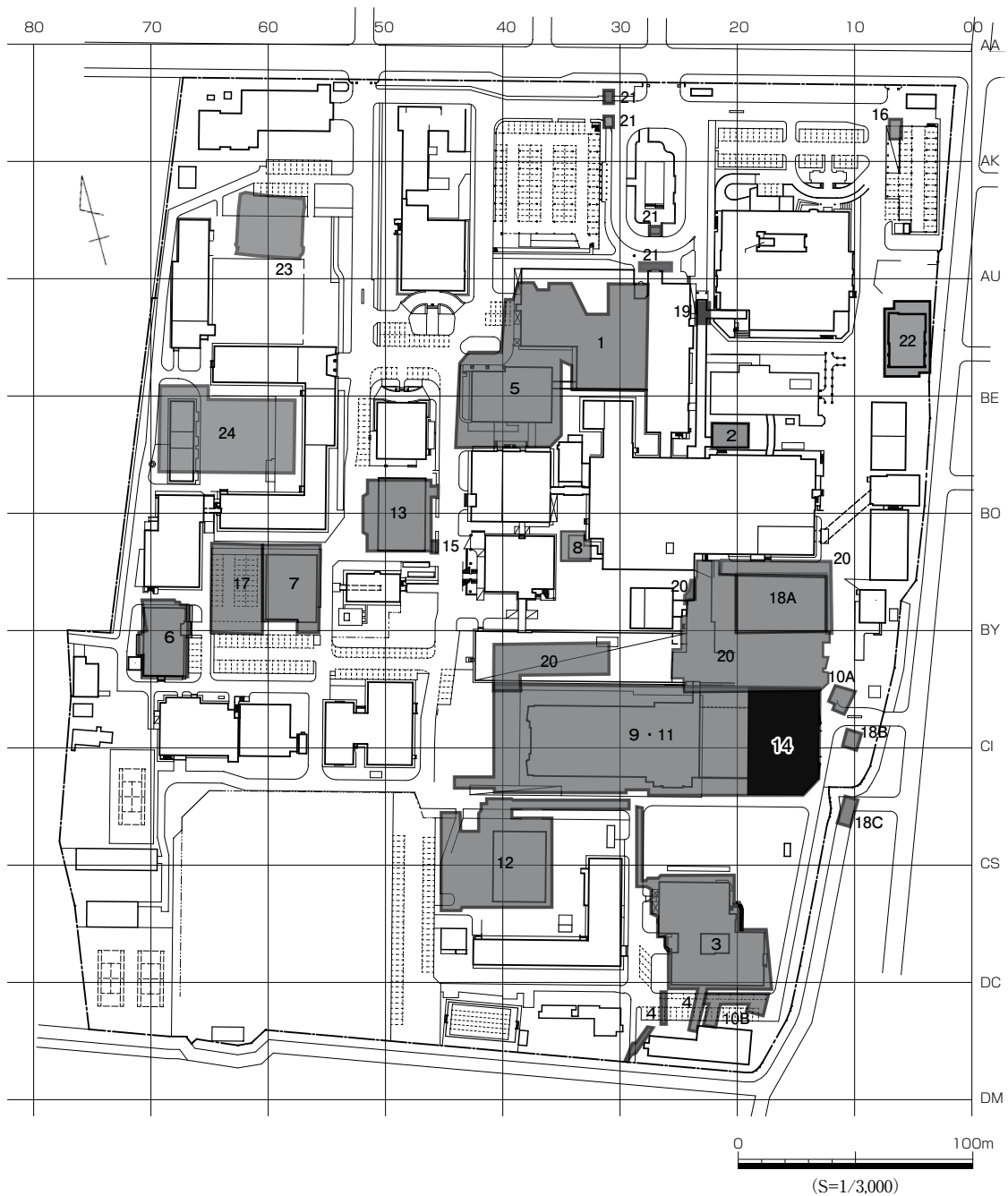
江戸時代以降、岡山城や城下町の整備が進められた。新道遺跡では、遺構・遺物の内容から絵図に記載された城下町の南端部にあたる屋敷地であることが判明した⁴⁶⁾。南方遺跡（裁判所地点）で検出された遺構も絵図との対照により近世後期の武家屋敷であることが明らかになる⁴⁷⁾など、城下町の姿を示す調査成果が蓄積されている。城下町の整備とともに旭川の治水と城下町の防衛をになう堀や用水の開削がなされ、江戸時代前期には城下町の西縁を南流する西川が整備される。西川は防衛・生活用水の供給・下流域の灌漑・水運などの機能を有しており、西川から分岐し、鹿田地区東辺を南流する枝川もそうした機能をになうものであったと考えられる。本遺跡では枝川周辺に位置する調査地点⁴⁸⁾で、船着き場など水運に関わる遺構が検出されている。平野のより南部では大規模な干拓が進められ、海岸線は大きく南に後退した。そうしたなか、城下町外縁にあたる鹿田遺跡周辺では農村景観へと変化がみられる。

第2節 鹿田遺跡

1. 構内座標の設定

本センターでは、鹿田遺跡の所在する岡山大学鹿田地区構内の調査にあたり、周辺の市街地街区および構内の建物主軸に合致させた局地座標として、鹿田地区構内座標を設定している（図2）。鹿田遺跡の調査における位置関係の記録は、すべてこの構内座標系に基づくものである。

1983年から2002年度までの構内座標は、国土座標第Ⅴ座標系（日本測地系）の（X=-149,800m、Y=-37,400



- | | | |
|------------------------|------------------------|-------------------------|
| 1. 第1次調査：外来診療棟 | 9. 第9次調査：病棟 | 17. 第17次調査：基礎研究棟 |
| 2. 第2次調査：NMR-CT室 | 10. 第10次調査：共同溝関連 | 18. 第18次調査：中央診療棟 |
| 3. 第3次調査：医療技術短期大学部【校舎】 | 11. 第11次調査：病棟 | 19. 第19次調査：渡り廊下 |
| 4. 第4次調査：医療技術短期大学部【配管】 | 12. 第12次調査：エネルギーセンター | 20. 第20次調査：中央診療棟関連 |
| 5. 第5次調査：管理棟 | 13. 第13次調査：総合教育研究棟 | 21. 第21次調査：外来診療棟周辺他環境整備 |
| 6. 第6次調査：アイソトープセンター | 14. 第14次調査：病棟（本調査地点） | 22. 第22次調査：地域医療総合支援センター |
| 7. 第7次調査：基礎研究棟 | 15. 第15次調査：総合教育研究棟【外溝】 | 23. 第23次調査：Jホール |
| 8. 第8次調査：RI治療室 | 16. 第16次調査：立体駐車場エレベーター | 24. 第24次調査：医歯薬融合棟 |

※建物名称は調査次の呼称による。

※AA00は、日本測地系によるX=-149,800,000m、Y=-37,400,000mの交点を原点として設定したものである。
2003年から世界測地系による座標に移したため、現在の表記となっている。

図2 発掘調査地点と構内座標

m)を原点とし、同座標軸の北を東へ15度回転させた座標軸を基軸とする局地座標であった。2002年4月1日の改正測量法施行にともない、本センターでも2003年度以降に刊行する報告書からは世界測地系を採用することとしたが、日本測地系によって設定した構内座標系を踏襲したまま、日本測地系に基づく座標値のみを世界測地系へと変換することとした⁴⁹⁾。すなわち、地図上に投影される局地座標系の相対的位置関係を保持したまま、座標値のみを世界測地系へと置き換えることとしたのである。その結果、構内座標原点の座標は(X=-149,456.3718 m、Y=-37,646.7700m)と変換された。ただし、日本測地系と世界測地系では、基準となる楕円体や測地座標系が異なるため、両者の座標軸は平行とはならない。したがって、日本測地系に基づいて設定した局地座標を用いる本構内座標の北は日本測地系に基づく座標北であり、世界測地系の座標北ではない。

構内座標は、原点から5m間隔で座標軸に平行するグリッドラインを設定して細分する。ライン名については、東西ラインでは2文字のアルファベットの組み合わせ、南北ラインは2桁のアラビア数字で表記している。すなわち、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとにAB、AC、…、AZ、BA、BB、…、BZとし、原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとに01、02、…、79、80とする。これらのラインの交差によって形成される5m四方の区画は、その北東角で交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区、AC02区、…、と呼称する。

2. 鹿田遺跡（岡山大学鹿田キャンパス）の調査概要

鹿田遺跡の範囲は『岡山県遺跡地図（第6冊、岡山地域）』（岡山県2003）⁵⁰⁾によれば、岡山大学鹿田地区を中心に県立病院地点（岡山県古代吉備文化財センターによる調査；図1-70）⁵¹⁾、NTTドコモ中国ビル地点（岡山市教育委員会による調査）⁵²⁾を含む。本センターでは岡山大学鹿田キャンパスにおいて2013年度までに24回の発掘調査を終了している。

鹿田キャンパスでは弥生時代中期後半～近世の遺構・遺物が確認される。特に第1次調査地点⁵³⁾を中心とした微高地一帯に居住域の広がりや密度が確認されている。微高地の北端については、第1次調査地点の北側で確認された東西方向に走る河道により区切られる⁵⁴⁾。弥生時代中期～古墳時代初頭では1・19・22次調査地点⁵⁵⁾（構内座標のAU～BEライン間）に東西に広がるように居住域が展開する。これらの居住域が展開する微高地間には低位部が入り込み、第12・13・18～20次調査地点（図2）では古墳時代初頭に大規模な土器だまりが形成されている⁵⁶⁾。一方居住域の南側にある第9・11・14次調査地点（CD～CMライン間；図2）では弥生時代後期～古墳時代初頭の畦畔が確認され、水田のひろがりやが認められる⁵⁷⁾。古墳時代に入ると、集落は中断期を迎え、飛鳥時代には第1次調査地点周辺に小規模な集落として姿を現すが、継続性は弱く、次に集落域のひろがりが見られるのは奈良時代末～平安時代前半を中心とする時期である。第1・2・24次⁵⁸⁾調査地点（図2）で掘立柱建物群、井戸が確認されている。こうした地点では大型の井戸の周囲に大小の掘立柱建物群が軸を揃えて立ち並ぶ状況が復元されることや、墨書土器、硯、木簡などの遺物が出土していることが特に注意される。また、同地点から約250m南の第3・4次調査地点（DCライン付近；図2）では東西方向に流れる大規模な河道で橋脚や杭が確認されている⁵⁹⁾。橋脚を構成する柱は径約30cm程度で、その配列から架け替えも想定される。橋脚の存在は通行量の多さをうかがい知る手がかりとなる。

鹿田遺跡一帯は古くから藤原摂関家の殿下渡領の一つである鹿田荘の比定地とされてきたが、これらの遺構・遺物は鹿田荘との関連を物語るものと考えられる。鹿田荘の成立した時期は不明だが、現在知られている史料⁶⁰⁾から、少なくとも平安時代のはじめから藤原氏の支配下にあったとみられる。第1・2次調査地点で確認された建物群と大型井戸は、およそ8世紀後半から9世紀代と考えられる。また第24次調査地点では8世紀後半の井戸が確認され、中に納められた二枚の絵馬の出土とともに注目されており⁶¹⁾、これらは鹿田荘揺籃期の遺構の可

能性が考えられる。

平安時代後半、10世紀代～11世紀前半には遺構は少なくなるが、本遺跡の西側に位置する県立病院地点では該期の遺構密度が高まり、集落が移動した可能性が指摘されている⁶²。12世紀には構内のほぼ全域で溝によって区画する屋敷地が出現する。こうした区画の方向は、正方位からおよそ15度傾く現在の地割にほぼ一致しており、古くから「鹿田荘」の位置を考える際に注目されるものである。13世紀～14世紀代には第6次・7次・14次・17次・20次調査地点⁶³等で区画溝の大型化が見られ、屋敷地の再編が窺われる。そのほか、第7次調査地点出土の猿形木製品や、第18次調査B地点⁶³出土の猫形木製品といった特殊な遺物の存在から、平安時代末～鎌倉時代に本遺跡一帯に人や物資が集中する賑わいのある集落状況が想定される。また「荒野庄絵図」⁶⁴はそうした状況を裏付ける史料である。

戦国時代には第18・20次調査B地点（BT～BDライン間）において濠に囲まれた屋敷地が確認されている⁶⁵。屋敷地内の井戸から猿形水滴が出土⁶⁶しており、農村よりは武家的な性格をうかがえる資料である。その後、江戸時代に入ると、本遺跡でも野壺や畦畔が認められる。岡山城下町の整備が進められるなかで、その南西に位置する本遺跡一帯は農村へと姿を替える。近年の調査では、第18次・20次調査地点において近世後半の居住域の様相が、第18次調査B地点では、入り江状遺構が確認されており、該期の集落の状況が明らかになりつつある。

註

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』
- (2) 富岡直人 1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊
b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊
c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊
- (4) a 二宮治夫編 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
b 平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5) 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- (6) a 高畑知功 1988「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18
b 草原孝典 1999「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度』
- (7) 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊
- (8) a 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
b 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
c 島崎 東ほか 1999『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
d 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
e 島崎 東ほか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
f 岡本泰典ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
- (9) a 前掲註(3)a 文献
b 岡田 博編 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地藏遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
c 高田恭一郎編 2000『北方地藏遺跡2 北方藪ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
d 柳瀬昭彦 1988「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会
e 柳瀬昭彦 1988「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会
- (10) a 宇垣匡雅編 1999『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
b 平井 勝編 1995「百間川原尾島遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (11) a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』
b 岡山市遺跡調査団 1981『南方（国立病院）遺跡発掘調査概報』
c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
- (12) 内藤善史編 1996『絵図遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (13) a 中野雅美 1984「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14
b 中野雅美・根木 修 1986「上伊福九坪遺跡」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会
- (14) a 杉山一雄編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
b 金田善敬編 2005『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
c 亀山行雄編 2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- (15) 出宮徳尚 1986「天瀬遺跡」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会
- (16) 前掲註(5)文献
- (17) a 小林青樹 2000「鹿田遺跡第9次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』16 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
b 喜田 敏・岩崎志保 2000「鹿田遺跡第9次調査追加」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (18) 河田健司 2000『大供中道遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- (19) 近藤義郎 1986「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会
- (20) 近藤義郎 1986「都月坂一号墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会
- (21) 七つ坵古墳群発掘調査団 1987『七つ坵古墳群』

- 22) 近藤義郎 1986「備前車塚古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会
- 23) 宇垣巨雅 1990「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査—古備の前期古墳Ⅲ—」『古代吉備』第12集
- 24) a 前掲註(22)文献
b 神谷正義・安川 満2007『神宮寺山古墳 網浜茶臼山古墳』岡山市教育委員会
- 25) 松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- 26) 伊藤 晃 1986「唐人塚古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会
- 27) 前掲註(8)文献
- 28) 前掲註(14)文献
- 29) a 江見正巳ほか 1980『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
b 正岡陸夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
c 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
d 高田恭一郎編 2008『百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
- 30) 前掲註(29)b、c、d文献
- 31) 前掲註(8)文献
- 32) 山本悦世・岩崎志保編 2003『津島岡大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊
- 33) 前掲註(14)文献
- 34) 石井庵寺がその可能性を残す。
- 35) 高橋伸二 2005『史跡賞田庵寺跡』岡山市教育委員会
- 36) 出宮徳尚ほか 1975『幡多庵寺発掘調査報告』岡山市遺跡発掘調査団
- 37) 草原孝典 2004「ハガ遺跡」岡山市教育委員会
- 38) a 岡山県教育委員会 1981『百間川長谷遺跡 当麻遺跡Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46
b 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
c 岡山県古代吉備文化財センター 1989『百間川米田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
- 39) 前掲註(5)文献
- 40) 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- 41) a 亀山行雄ほか 2007『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告207
b 河合 忍ほか 2007『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
- 42) 岡山市教育委員会 2006『大供本町遺跡発掘調査現地説明会資料』
- 43) 出宮徳尚 1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35
- 44) 山本悦世ほか 2011「鹿田遺跡第20次発掘調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』
- 45) 前掲註(41)文献
- 46) 前掲註(40)文献
- 47) 氏平昭則編 2012『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告234
- 48) 光本 順 2013「第18次調査B・C地点」『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡調査報告第28冊
- 49) 光本 順 2004「日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』
- 50) 古代吉備文化財センター 2003『改定 岡山県遺跡地図(第6分冊 岡山地区)』
- 51) 前掲註(43)文献
- 52) 神谷正義 2007『鹿田遺跡—ドコモ中国東古松ビル新築工事に伴う発掘調査—』岡山市教育委員会
- 53) 前掲註(5)文献
- 54) 光本 順 2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- 55) 前掲註(5)文献
a 野崎貴博 2010「鹿田遺跡第19次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』
b 岩崎志保 2012「鹿田遺跡第22次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』
- 56) 光本 順編 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊
山本悦世 2001「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』18 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山本悦世ほか 2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
- 前掲註(55)a文献
同(44)文献
- 57) 前掲註(17)文献
- 58) a 前掲註(5)文献
b 南健太郎 2013「鹿田遺跡第24次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2012』
- 59) 山本悦世編 1990『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
- 60) 「鹿田」の初出は817(弘仁4)年、興福寺南円堂で行なわれた法華会の料米72石を「鹿田地子」であてたとする記事、「鹿田庄」の初出は900(昌泰3)年、鹿田庄の地子を興福寺長講会料にあてたとする記事にみられるもので、いずれも『興福寺縁起』による。
鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』岡山市教育委員会
- 61) 前掲註(58)b文献
- 62) 河合 忍 2007「総括」『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
- 63) a 松木武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
b 光本 順 2008「鹿田遺跡第17次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』
c 前掲註(48)文献
d 山本悦世 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘報告第23冊
- 64) 鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』
- 65) a 前掲註(56)文献
b 前掲註(44)文献
- 66) 前掲註(44)文献

第2章 調査の記録

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

1998年度に岡山大学医学部附属病院（現岡山大学病院）病棟の建て替えが計画され、建設工事は予定地の総面積約3,850㎡を二期に分けて実施することとなった。対象地西側のⅠ期分に関しては、1998～1999年度に発掘調査を実施した（鹿田遺跡第9・11次調査）。同調査では弥生時代後期～古墳時代初頭の水田・溝、平安時代～近世にかけての井戸や溝などの遺構を検出した⁽¹⁾。

Ⅰ期の建築工事が完了した後、2003年度にⅡ期分の計画が進むこととなり、Ⅰ期の調査成果を基に約1,330㎡の範囲を第14次調査として実施することとなった。調査員3名が担当し、調査期間は約5か月を予定した。

註 (1) 小林青樹2000「鹿田遺跡第9次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』16 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
喜田敏・岩崎志保2001「鹿田遺跡第9次調査・第11次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

2. 調査と報告書の体制

調査主体	岡山大学	学 長	河野 伊一郎
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稲田 孝司
調査研究員・調査主任	〃	助 手	岩崎 志保（7-12月）
調査研究員	〃	〃	高田 浩司（7-12月）
調査研究員	〃	〃	横田 美香（7-11月）
調査研究員	〃	〃	野崎 貴博（11-12月）

運営委員会委員【発掘調査：2003年度】

文学部教授・埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司
文学部教授	新納 泉
文学部教授	久野 修義
大学院医歯学総合研究科教授	村上 宅郎
環境理工学部教授	名合 宏之
環境理工学部教授（調査研究専門員）	沖 陽子
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫
文学部助教授（調査研究室長）	山本 悦世
施設部長	斉藤 健次

【報告書刊行：2013年度】

センター長	門岡 裕一
副センター長	新納 泉
大学院社会文化科学研究科教授	久野 修義
大学院医歯学総合研究科教授	大塚 愛二
大学院自然科学研究科教授	鈴木 茂之
大学院環境学研究科教授	沖 陽子
	（調査研究専門委員）
大学院社会文化科学研究科教授	松木 武彦
埋蔵文化財調査研究センター教授	山本 悦世
	（調査研究室長）
事務局施設企画部長	須崎 茂弘

3. 調査の経過

表土掘削は2003年7月より開始した。調査対象地には既存の施設や旧建物の基礎は比較的少なく、その多くは造成土と同時に撤去することとした。ただし既設の共同溝のように規模が大きく深いものについては、撤去に伴い包含層への影響が及ぶことが予想されたため、調査終了後に撤去し、下面を確認することとした。

発掘調査は7月30日より開始した。調査区は対象地内の北寄りに東西方向に位置する共同溝を境に北を1区、南を2・3区に区分し、遺物の取り上げや記録を行うこととした。調査開始時の状況は、後世の攪乱の影響で近代・近世層の残り具合が場所によって異なっていた。1区では非常に薄く、部分的であったため、中世層上面に、2・3区では近世層上面に合わせて、調査開始状況の写真撮影を8月11日に実施した。

近世の土坑・溝・ため池状遺構の調査終了後、9月26日に検出遺構の全体写真を撮影した。

近世層を除去した後、中世面4～6層の各層上面で、南北方向の区画溝を初めとする多数の溝や、柱穴群・井戸・土坑を検出した。そのうち1・2区にまたがる南北方向の溝数条については、両区間に残した共同溝の影響で、遺構の関係確認に困難を極めた。11月14日に中世遺構全景の写真撮影を終えた。

次いで古墳時代層では、溝群の調査を行い、12月1日に写真撮影を実施、さらに下層へと調査を進めた。下層の遺構・遺物は希薄であり、8層上面で溝、9層上面で高まりを検出し、すべての調査は12月17日に終了した。

なお、調査中の10月18日に現地説明会を開催した。当日は既調査地点の出土遺物の展示も併設して行い、200名の参加者を得た。また同日より10月24日までの一週間、病棟内のスペースを使用してパネル展示会を開催した。一週間の開催期間中の来場者は370名に及んだ。その他、8月には博物館実習の学生を3組計38名を3日間、また11月に中学生職場体験の生徒、2校5名を受け入れた。



a. ため池状遺構（西から）
b. 中学生職場体験（西から）
c. 現地説明会の様子（東から）

図3 調査風景

第2節 調査の概要

本調査においては弥生時代後期～古墳時代初頭、平安時代中頃～戦国時代、江戸時代の遺構を検出した。それぞれの概要をまとめよう。

①弥生時代後期～古墳時代初頭（図4①）

本調査地点は弥生時代後期～古墳時代初頭にかけて耕作地として利用されていた。8層上面では溝3条と高まり3ヶ所を検出した。溝の方向は南西～北東方向の1条と、北西～南東方向の2条があり、前者が古い。後者の2条は並行するように走行する。これらの溝群の時期は弥生時代後期である。弥生時代後期の中で溝の方向が変

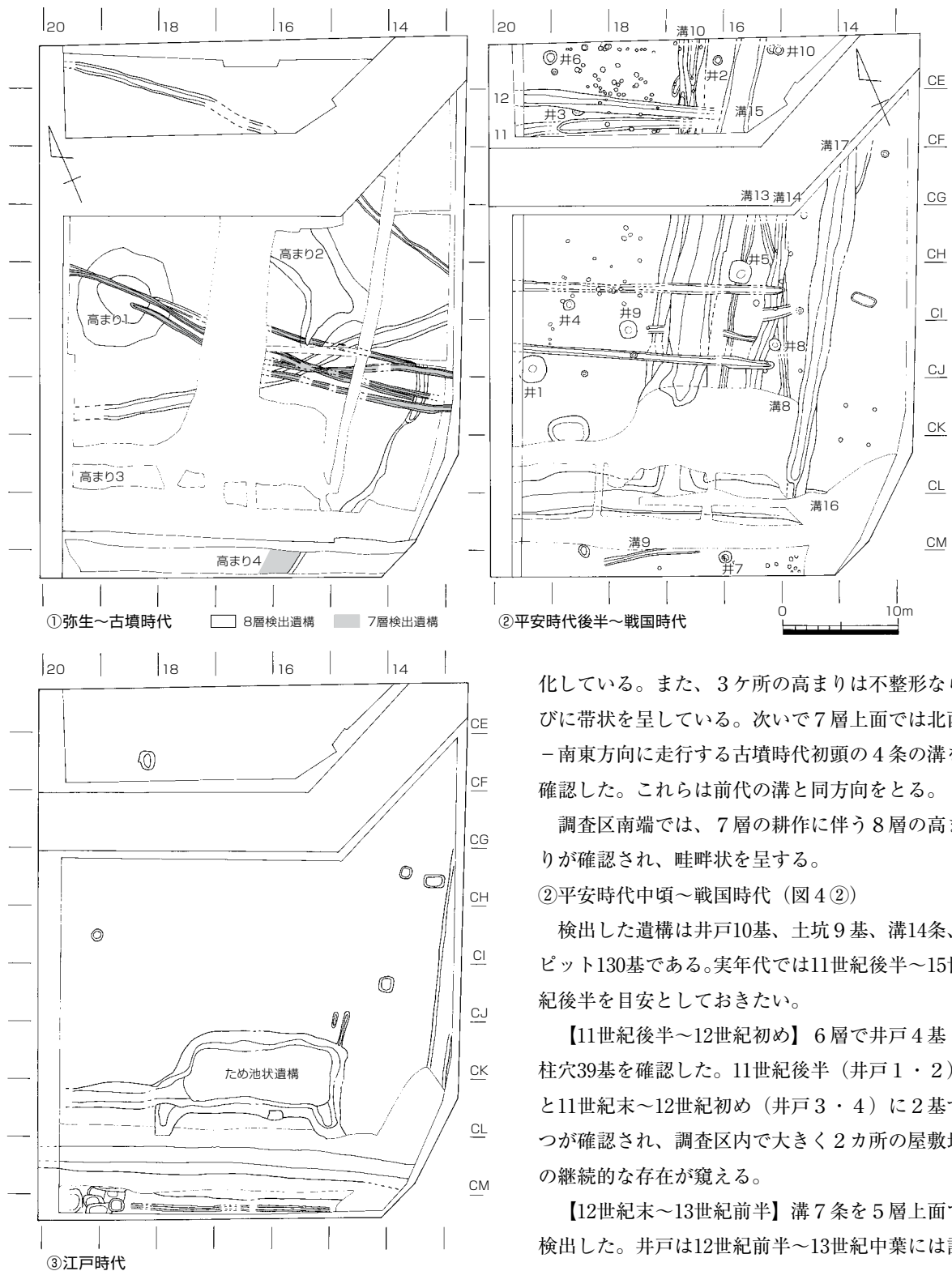


図4 検出遺構全体図

形成している。溝の方向は、鹿田条里に比較的合うものと、正方位に近いものがある。後者（溝8・9）は12世紀代となる可能性がある。12世紀末～13世紀初めでは、溝10～14がつくられる。南北方向の溝は調査区中央、

化している。また、3ヶ所の高まりは不整形ならびに帯状を呈している。次いで7層上面では北西-南東方向に走行する古墳時代初頭の4条の溝を確認した。これらは前代の溝と同方向をとる。

調査区南端では、7層の耕作に伴う8層の高まりが確認され、畦畔状を呈する。

②平安時代中頃～戦国時代（図4②）

検出した遺構は井戸10基、土坑9基、溝14条、ピット130基である。実年代では11世紀後半～15世紀後半を目安としておきたい。

【11世紀後半～12世紀初め】6層で井戸4基・柱穴39基を確認した。11世紀後半（井戸1・2）と11世紀末～12世紀初め（井戸3・4）に2基ずつが確認され、調査区内で大きく2カ所の屋敷地の継続的な存在が窺える。

【12世紀末～13世紀前半】溝7条を5層上面で検出した。井戸は12世紀前半～13世紀中葉には認められない。溝は南北方向（溝8・10・13・14）と東西方向（溝9・11・12）とがあり、区画溝を

16ラインの西に沿う位置に南北方向の溝10と、15ライン付近を南北方向に2条が並行する溝13・14がある。溝11・12は東西方向である。出土遺物から溝10・11は12世紀末～13世紀初頭に埋没したものであり、それ以外の溝は検出面から12世紀前半～13世紀前半の範疇と考えられる。

【13世紀後半～15世紀後半】5層で検出した井戸1基・柱穴55基、4b層で検出した溝7条と井戸5基・土坑6基・柱穴14基がある。13世紀後半～14世紀初頭には井戸1基と溝2条が認められる。溝は、南北方向には16ライン付近の溝15、これとT字状に接続する東西方向の溝16である。それまでの溝とは幅・深さなど規模の点で大型化がみられる。柱穴もこの時期の可能性が考えられる。

井戸8は15世紀後半に比定されるもので、溝17の西側に位置する。14世紀後半～15世紀前半に埋没する南北方向の溝17は、前代より東に位置をかえる。このほかに井戸4基・土坑6基・溝4条があり、井戸については13世紀末～15世紀後半の範疇と考えられる。土坑も同時期幅で考えたい。また東西方向の小型の溝（溝18～21）がCH～CJ間に認められる。このうち溝18・19は2条が東西方向に並行する。

③江戸時代（図4③）

土坑12基、溝5条、ため池状遺構が確認された。井戸は確認されず、集落から耕作地への変化が窺える。

土坑は7基が南西端部に集中する。この他に調査区東側で3基、北側に2基が散在する。南部に位置する土坑の東側では、東西方向の畦畔が確認されている。畦畔や野壺の集中から、このCLライン付近に境界の存在が窺える。

溝は、南北方向1条（溝25）、東西方向1条（溝24）がある。前者は、調査区東端の13ライン付近を走行し、前代よりも東へ位置を変えるが、後者の位置は前代までの位置に重複する。またこの東西方向の溝にとりつくようにため池状遺構がつけられる。そのほか北東側に2条の小規模な溝（溝23・24）がある。近世の東西溝は、近代に入っても踏襲される。

表1 検出遺構一覧

a. 井戸

報告番号	検出層位	時期	上面形	長辺/短辺(m)【復元値】	底面高(標高)	深さ(m)【復元値】	断面形
井戸1	6	平安時代(11世紀後半)	隅丸方形	(2.5)/2.45	-0.60	1.65	Y字形
井戸2	6	平安時代(11世紀後半)	円形	0.8/[0.8]	-0.37	1.7	筒状
井戸3	6	平安時代(11世紀末～12世紀初頭)	円形	1.0/1.0	-0.50	1.56	逆台形
井戸4	6	平安時代(11世紀末～12世紀初頭)	円形	0.94/0.89	-0.55	1.51	筒状
井戸5	5 or 4b	鎌倉時代(13世紀後半)	隅丸方形	1.97/1.9	-1.05	2.05	筒状
井戸6	4b	鎌倉時代(13世紀末～14世紀初頭)	円形	1.2/[1.2]	0.40	0.88	逆台形
井戸7	4b	鎌倉時代(13世紀末～14世紀初頭)	楕円形	1.05/1.0	-1.00	1.8	筒状
井戸8	4b	戦国時代(15世紀後半)	円形	1.5/1.42	-1.10	1.93	逆台形
井戸9	4b	鎌倉時代(13世紀末～14世紀初頭)	円形	1.0/1.0	-0.65	2.22	逆台形
井戸10	4b	鎌倉時代(13世紀末～14世紀初頭)	円形	[0.7/0.7]	-0.20	1.1	逆台形

b. 土坑

報告番号	検出層位	時期	上面形	長辺/短辺 (m)	底面高 (標高)	深さ (m)	断面形
土坑1	4b	13世紀後半～15世紀後半	長楕円形	1.9/0.83	0.69	0.22	皿状
土坑2	4b	13世紀後半～15世紀後半	楕円?	0.62/(0.5)	0.02	0.27	皿状
土坑3	4b	13世紀後半～15世紀後半	楕円形	1.1/0.86	0.57	0.23	皿状
土坑4	4b	13世紀後半～15世紀後半	楕円形	0.82/(0.5)	0.34	0.26	逆台形
土坑5	4b	13世紀後半～15世紀後半	楕円?	(0.72/0.58)	0.94	0.48	U字形?
土坑6	4b	13世紀後半～15世紀後半	長楕円形	3.45/(1.5)	0.62	0.15	皿状
土坑7	3	江戸時代 (17世紀前半)	隅丸方形	1.3/0.8	0.58	0.45	U字形
土坑8	3	江戸時代 (17世紀前半)	隅丸方形	1.7/1.5	0.45	0.85	皿状
土坑9	3	江戸時代 (17世紀後半)	長楕円形	1.6/1.52	0.96	0.54	箱形
土坑10	3	江戸時代 (17世紀後半)	隅丸方形	2.8/0.7	1.25	0.28	箱形
土坑11	3	江戸時代 (18世紀前半)	円形	1.9/(0.95)	0.50	0.2	箱形
土坑12	3	江戸時代 (18世紀前半)	楕円形	2.85/0.35	0.65	0.5	皿状
土坑13	3	江戸時代 (18世紀)	隅丸方形	1.30/1.14	0.70	0.6	箱形
土坑14	3	江戸時代 (17世紀)	楕円形	1.7/1.4	0.75	0.57	U字形
土坑15	3	江戸時代 (17世紀)	楕円形	0.94/0.83	1.15	0.1	皿状
土坑16	3	江戸時代 (17世紀)	隅丸長方形	1.80/1.2	0.70	0.7	箱形
土坑17	3	江戸時代 (17世紀)	隅丸方形	1.26/1.18	0.80	0.8	逆台形
土坑18	3	江戸時代 (17世紀後半)	方形	1.01/0.99	0.70	0.5	逆台形
ため池状	4a	江戸時代 (17世紀後半)	長方形	14.0/7.5	-0.60	1.5	逆台形

c. 溝

番号	検出層位	時期	幅 (m)	底面高 (標高m)	深さ (m)	断面形	方向
溝1	8	弥生時代後期	1.1	0.7(西) 0.67(東)	0.15～0.2	皿状	SW-NE
溝2	8	弥生時代後期	0.8	0.67(西) 0.667(東)	0.25～0.05	逆台形	NW-SE
溝3	8	弥生時代後期	0.31～0.44	0.6	0.24～0.07	逆台形	NW-SE
溝4	7	古墳時代初頭	0.33～0.63	0.95(西) 0.857(東)	0.1～0.2	逆台形	NW-SE
溝5	7	古墳時代初頭	0.3～0.4	0.85(西) 0.75(東)	0.1	皿状	NW-SE
溝6	7	古墳時代初頭	0.35	0.8	0.1	皿状	NW-SE
溝7	7	古墳時代初頭	0.3～0.4	0.85(西) 0.75(東)	0.1	皿状	NW-SE
溝8	5	平安時代 (12世紀前半～13世紀前半)	0.6～1.2	0.9(北) 0.83(南)	0.2～0.32	皿状	N-S
溝9	5	平安時代 (12世紀前半～13世紀前半)	0.5	0.71	0.24	箱形	E-5°-N
溝10	5	平安時代 (12世紀末～13世紀初め)	2.4	0.4(北) 0.15(南)	0.7～0.9	逆台形	N-S
溝11	5	平安時代 (12世紀末～13世紀初め)	2.0	0.8	0.5～0.6	U字形～皿状	W-E
溝12	5	鎌倉時代 (13世紀前半)	1.1～1.8	0.78(西) 0.82(東)	0.3～0.5	皿状	W-E
溝13	5	鎌倉時代 (12世紀前半～13世紀前半)	0.6	0.91	0.15	皿状	N-S
溝14	5	鎌倉時代 (12世紀前半～13世紀前半)	1.6	1.04(北) 0.93(南)	0.12～0.26	皿状	N-S
溝15	4b	鎌倉時代 (13世紀末～14世紀初頭)	5.0	-0.3(北) -0.25(南)	1.6	逆台形	N-S
溝16	4b	鎌倉時代 (13世紀末～14世紀初頭)	3.6	-0.18	0.23	皿状	W-E
溝17	4b	室町時代 (14世紀後半～15世紀前半)	2.5～2.2	0.75～0.45	1.0	逆台形	N-S
溝18	4b	戦国時代 (15世紀後半)	0.65	1.15	0.1	皿状	W-E
溝19	4b	戦国時代 (15世紀後半)	0.6～0.8	0.9	0.2	皿状	W-E
溝20	4b	戦国時代 (15世紀後半)	1.1	1.2	0.08	皿状	W-E
溝21	4b	戦国時代 (15世紀後半)	0.65	1.25	0.1	皿状	W-E
溝22	3	江戸時代 (17世紀前半)	0.3	0.9	0.2	皿状	N-S
溝23	3	江戸時代 (17世紀前半)	0.4	0.96	0.15	皿状	N-S
溝24	3	江戸時代 (18世紀後半～19世紀)	0.3	1.05	0.3	皿状	W-E
溝25	3	江戸時代 (18世紀後半～19世紀)	1.7	1.05	0.2	皿状	N-S

第3章 調査の記録

第1節 調査地点の位置と層序

1. 調査地点の位置

本調査地点は鹿田地区構内座標CD～CM・12～20区に位置する(図5)。

同地点は鹿田キャンパスの中では南東にあたる(図2)。既存施設との位置関係では、岡山大学病院病棟の東隣接地にあたり、北側には中央診療棟が位置する。また南側には医学部保健学科棟が位置している。

これらの施設の中で、保健学科棟とその周辺では1986年度に第3次調査、1987年度に第4次調査を実施しており、古代の河道・橋脚が確認されたほか、平安時代の集落の状況が判明している。そのほかに西側に隣接する病棟地点では1998～1999年度に第9・11次調査を、また北側の中央診療棟地点では2007・2009年度に第18・20次調査をそれぞれ実施しており、弥生時代～江戸時代の遺構・遺物が確認されている。

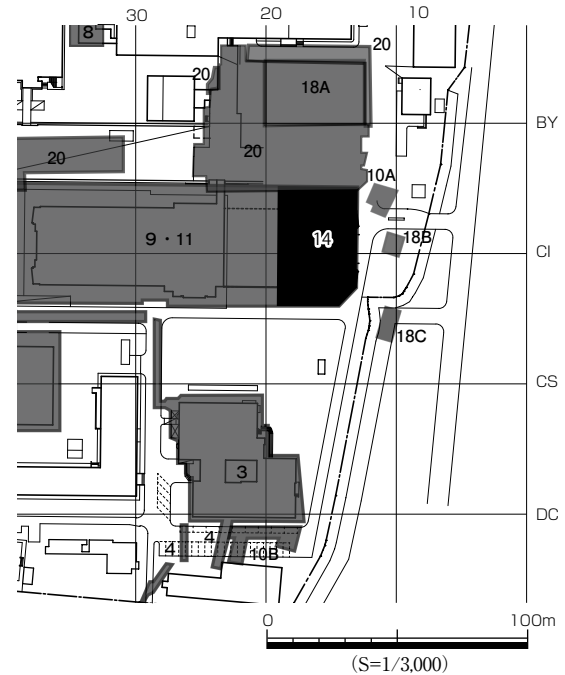


図5 調査地点の位置

2. 層序

調査区北壁・南壁および西壁・東壁の一部を示した(図6～8)。基本土層を以下に説明する。

1層：近代以降の造成土である。主に1922(大正11)年の岡山医科大学建設時の造成土からなる。上面は現地表面にあたり、標高2.5～2.7mを示す。土層の厚さは1.0～1.2mを測る。

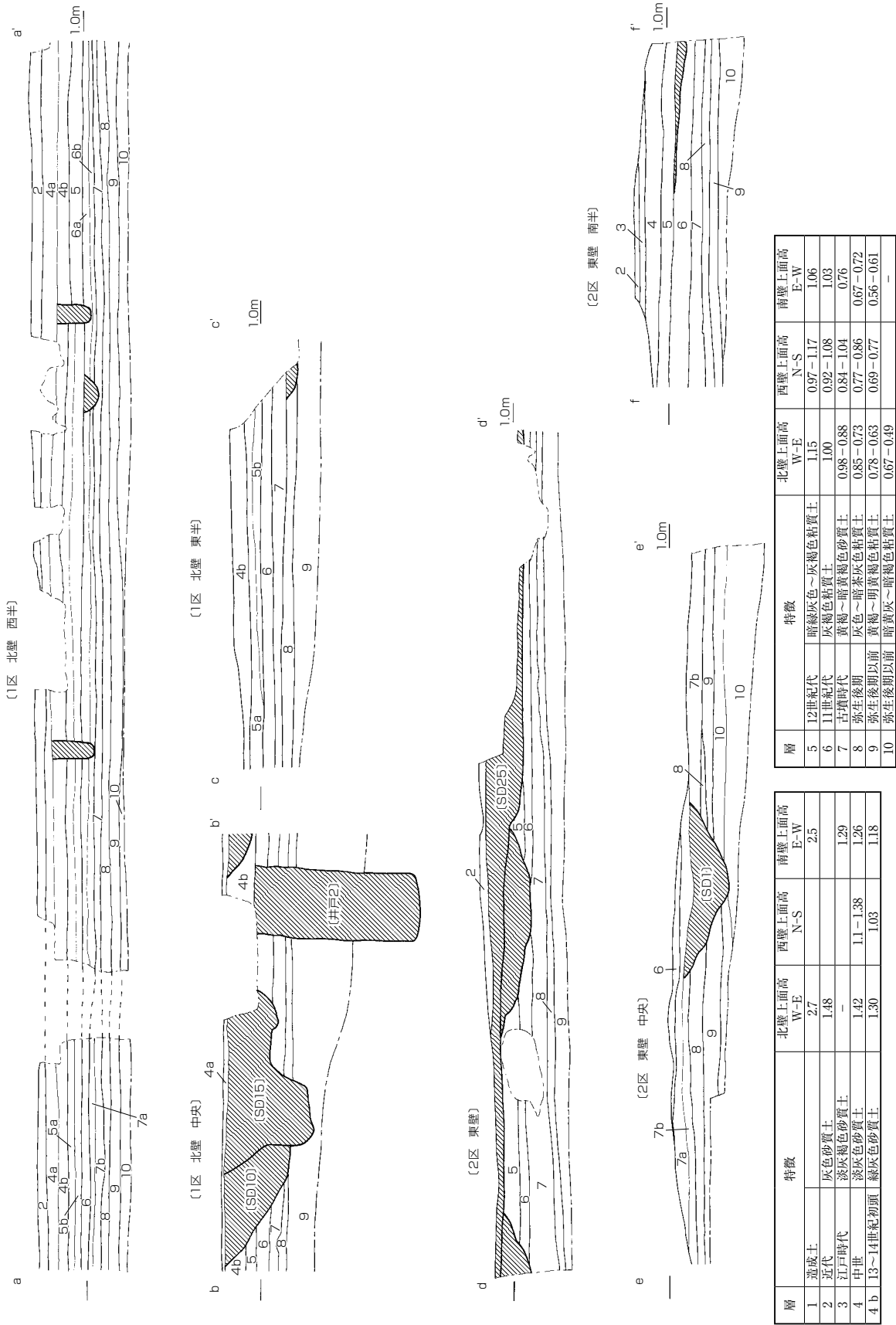
2層(近代)：灰色砂質土を主体とする。近代の耕作土層と考えられる。全体として残りが悪く、調査区北壁西側と、調査区南壁の一部でのみ確認された。土層の厚さは10～15cm程度である。上面の標高は標高1.48～1.52mと1.5m前後を測る。

3層(近世)：灰褐色系の砂質土であり、耕作土と考えられる。北半ではCLライン以北にあたる調査区の大部分で削平を受けている。一方CLライン以南では層厚10～25cm程度の厚みで確認される。上層は灰茶褐色を呈する弱砂質土、下層は暗灰茶色砂質土を主体とする。上面の標高は南壁で1.23～1.36mを測る。

上面では土坑や溝が検出された。遺物はコンテナ1箱程度が出土しており、17世紀初頭～前半の陶磁器、瓦が主体である。

4層：灰色系の砂質土層であり、色調や出土遺物等から4a・4b層に分層される。

4a層(戦国時代)：淡灰色砂質土で全体として鉄分の沈着がみられる。炭化物・小礫・土器などを含む。層厚は10cm程度である。CFライン以北の大半では1層による削平で本層は消失している。残存部での上面の標高は北東側で1.45m前後、南壁際で1.2m前後を測る。遺物はコンテナ3箱が出土した。15世紀末～16世紀の陶磁器が含まれており、本層の時期を示す。本層は4b層以前の集落から耕作地へと土地の利用形態が変化する際の造成土



層	特徴	北壁上面高		西壁上面高		南壁上面高	
		W-E	N-S	N-S	E-W		
5	12世紀代 暗緑灰色～灰褐色粘質土	1.15	0.97-1.17	1.03	1.06		
6	11世紀代 灰褐色粘質土	1.00	0.92-1.08	1.03	1.03		
7	古墳時代 黄褐色～暗黄褐色砂質土	0.98-0.88	0.84-1.04	0.76	0.76		
8	弥生後期 灰色～暗茶灰色粘質土	0.85-0.73	0.77-0.86	0.67-0.72	0.67-0.72		
9	弥生後期以前 黄褐色～明黄褐色粘質土	0.78-0.63	0.69-0.77	0.56-0.61	0.56-0.61		
10	弥生後期以前 暗黄灰～暗褐色粘質土	0.67-0.49	—	—	—		

層	特徴	北壁上面高		南壁上面高	
		W-E	N-S	E-W	N-S
1	造成土	2.7	—	2.5	—
2	近代 灰色砂質土	1.48	—	1.29	—
3	江戸時代 淡灰褐色砂質土	—	—	1.26	—
4	中世 淡灰色砂質土	1.42	1.1-1.38	1.26	—
4b	13-14世紀初頭 緑灰色砂質土	1.30	1.03	1.18	—

図6 土層断面図1

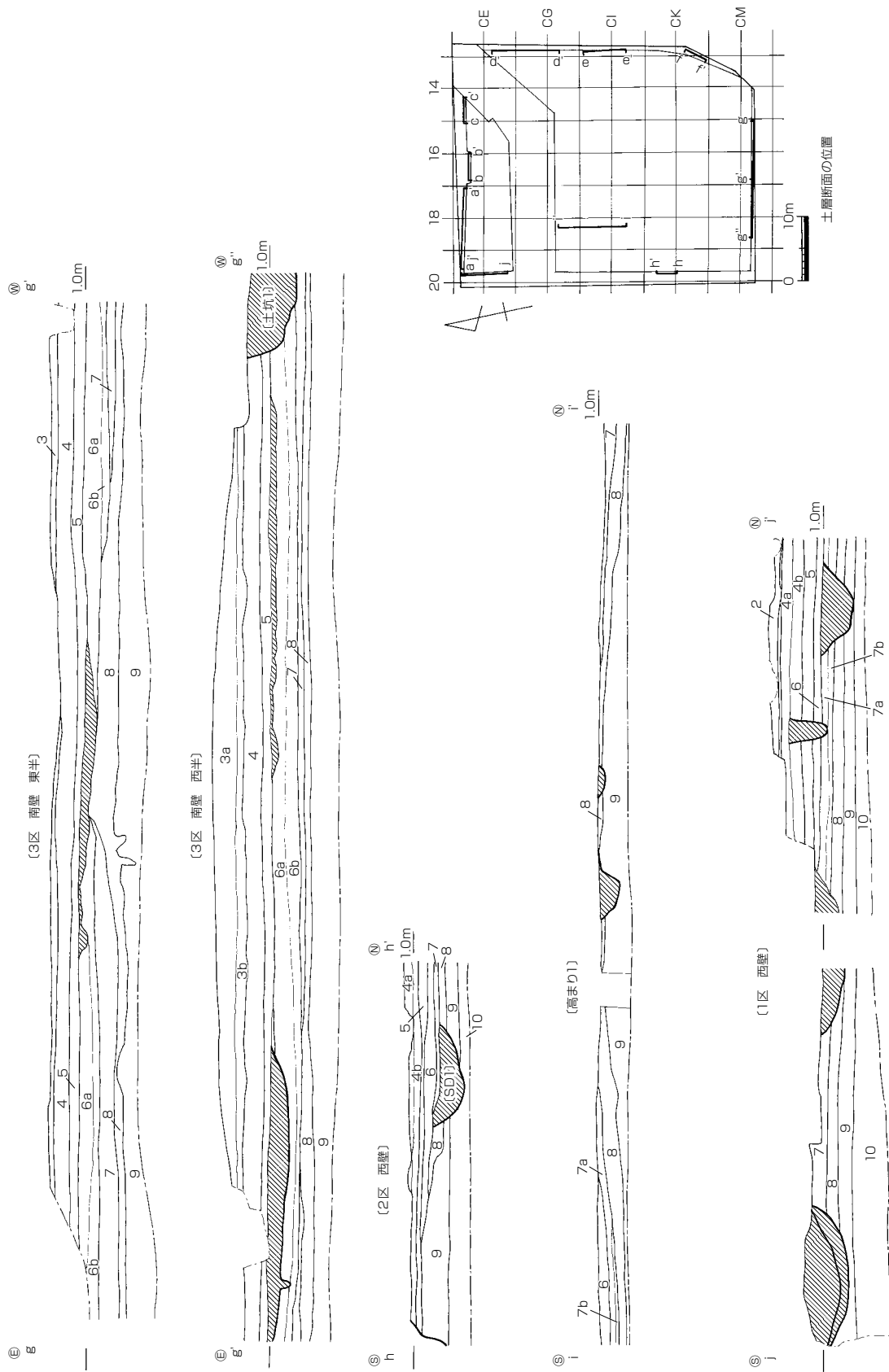


図7 土層断面図2

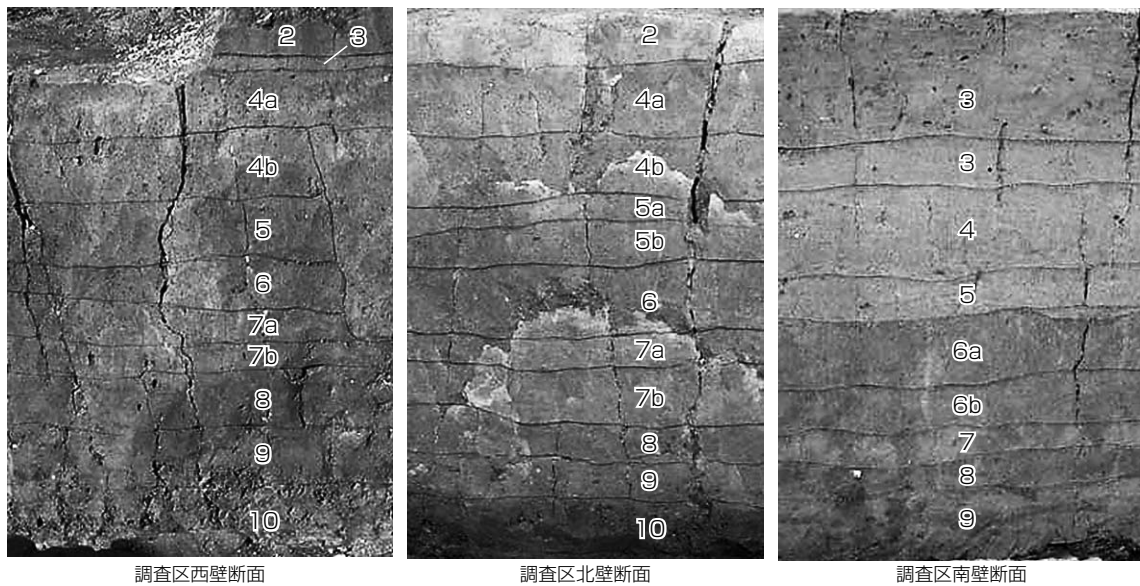


図8 土層断面

ととらえられる。

4 b層（鎌倉時代）：緑がかった灰色を呈する砂質土を主体とする。炭化物・土器などを多く含む。調査区のほぼ全域に堆積がみられる。調査区の北側CFライン以北では上面の標高1.31～1.36m、以南では1.05m前後と高低差が認められる。層厚は10cm程度である。本層上面では井戸・土坑・溝、多数のピットを検出した。遺物はコンテナ3箱が出土し、出土遺物と上面の遺構の内容から13世紀末～14世紀初頭の幅の中と考えている。

5層（平安時代）：暗緑灰色～灰褐色粘質土層である。調査区全域に堆積がみられる。上面の標高0.97～1.24mである。層厚は10～20cmを測るが、上面の標高が低いCKライン以南では6～8cmと厚みが減じている。

上面では井戸・溝を検出した。遺物はコンテナ3箱が出土した。12世紀代の遺物が主体であり、本層の時期を示す。

6層（平安時代）：灰褐色粘質土を主体とする。調査区のほぼ全域に堆積がみられる。本層より下位での起伏のある地形は本層の堆積により平坦化する。上面の標高0.93～1.08mを測る。層の厚みは6～18cmを測る。調査区北東で6～8cm、北西で12cm程度と下面の高低により厚みが変わるが、南壁で18cm程度と安定した堆積となる。本層は1・2区では一層として扱ったが、3区では砂質の違いにより6 a・6 b層に分けた。6 b層は粘性が強く耕作土の可能性が考えられる。上面では11世紀後半の井戸を検出した。遺物はコンテナ2箱が出土し、若干の古墳時代の土師器と、中世の遺物を含む。若干新しい時期の遺物が含まれるものの、上層の掘り残し等も考慮して本層の時期については11世紀代ととらえたい。

7層（古墳時代初頭）：黄褐色～暗黄褐色砂質土を主体とする。砂質の強い上層（7 a層）と下層（7 b層）に分けられる部分があり、7 b層は耕作土の可能性がある。上面の標高0.74～1.04mである。層の厚みは3～15cmを測る。上面では溝4条と高まり1ヶ所を検出した。いずれも北西～南西方向のものである。遺物の出土はコンテナ2/3箱と少なくなり、弥生後期から古墳時代初頭の土器を主体とする。本層の時期は古墳時代初頭と考えている。

8層（弥生時代後期）：灰色～暗茶灰色粘質土で、耕作土である。上面の標高0.6～0.93mであり、溝3条と高まり3ヶ所を検出した。遺物はコンテナ1/4箱が出土した。弥生時代後期の土器が主体であり、本層の形成時期を示す。7・8層の遺構・遺物は希薄な傾向にあり、耕作地として利用されていたことが窺える。

9層（弥生時代後期以前）：黄褐色～明黄褐色粘質土で、弥生時代の基盤層である。上面の標高0.5～0.94mである。本層上面では3カ所で高まりが見つかっている。

10層（弥生時代後期以前）：暗黄灰色～暗褐色粘質土で、上面の標高0.49～0.67mである。遺物の出土はみられない。

第2節 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

本時期の遺構は、8層で検出した溝3条と高まり3ヶ所、および7層で検出した溝4条と高まり1ヶ所である。7・8層は水田耕作土の可能性が高く、その時期は、7層が古墳時代初頭、8層が弥生時代後期である(図9)。



図9 弥生～古墳時代検出遺構全体図

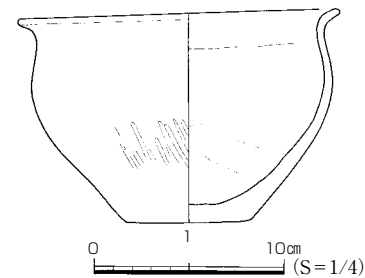
8層上面で確認した溝は、遺構の切り合い関係から南西～北東方向を示す溝1が最も古く、北西～南東方向の溝2・3は、7層検出の溝と同方向を示し、新しい傾向が窺える。弥生時代後期の中で、溝の方向が変わる。

7層上面で検出した溝4条はいずれも北西～南東方向の方向を示す。溝の時期については出土遺物がないが、検出面から古墳時代初頭で考えたい。

a. 溝

溝1 (図11①)

調査区の中央、CI～CJ・13～19区を南西～北東方向に走る。検出面は8層で、標高0.78～0.8mを測



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調	胎土
1	弥生土器・鉢	(17.0)	6.6	10.8～11.3	内：摩滅顕著、外：胴部の一部にミガキ、摩滅が著しい、口縁1/4・胴部3/4残	乳灰橙褐	細砂

図10 8層出土遺物

る。幅1.1m、深さは西端で0.15m、東端で0.2mである。底面の標高は西端で0.7m、東端で0.67mを測り、南西から北東に向かって流れていた可能性が高い。断面形は底部にやや平坦面を有する皿状を呈する。

埋土は2層に分けた。上層は暗灰色粘質土層、下層は灰色粘質土で鉄分・黄白色の粘土ブロックを含む。砂の堆積は認められないが、鉄分の存在から流水の影響が考えられる。本溝からは遺物は出土していない。遺構の時期は、検出面から弥生時代後期と考える。

溝2 (図11②)

調査区の北半、CE～CG・13～19区を北西～南東方向に走行する。検出面は8層上面での標高は西端で0.95mで

調査の記録

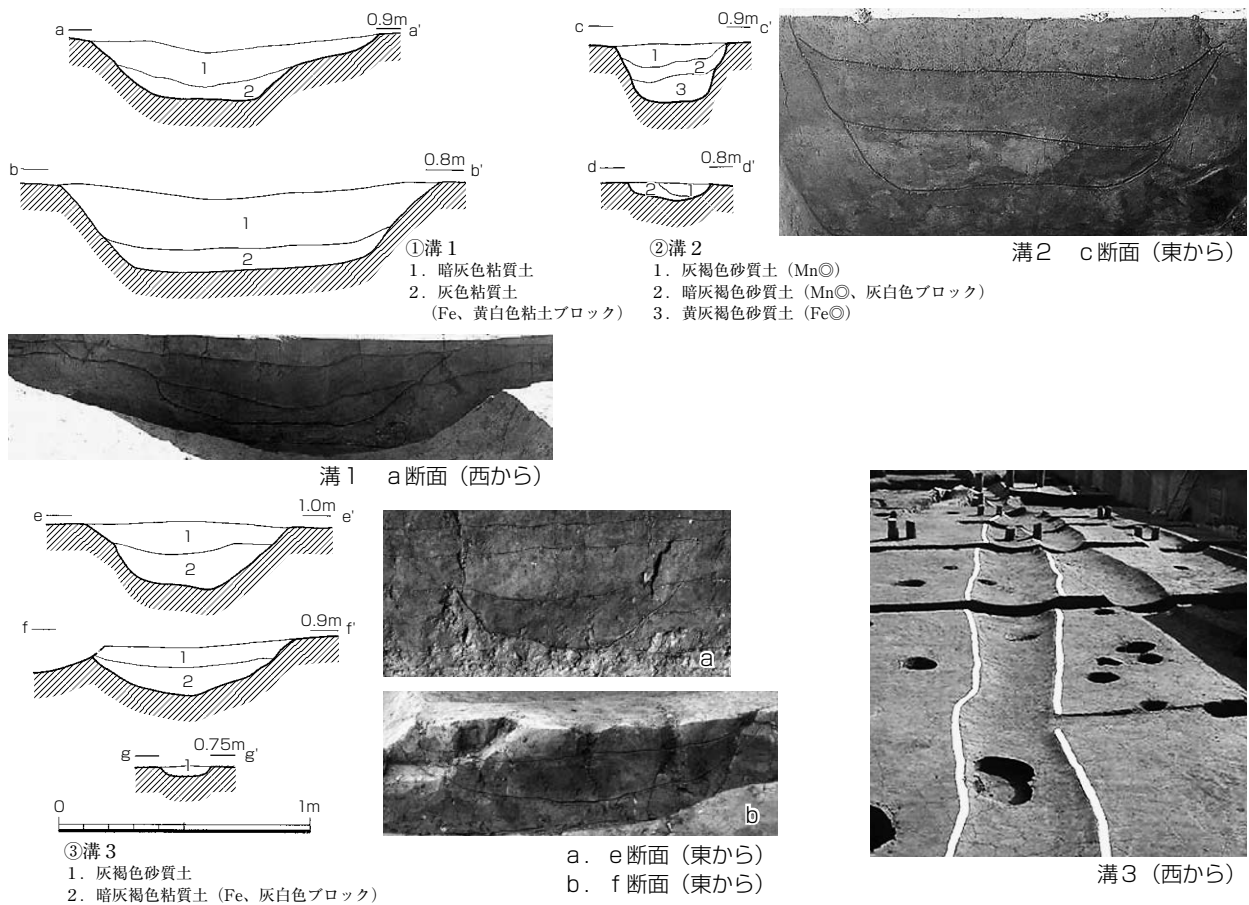


図11 溝1～3

ある。幅0.8m、深さは西端で0.25m、東端で0.05mを残す。底面の標高は西端で0.67m、東端で0.66mであり、比高差はわずかであるが西から東への流れと考えられる。断面形は丸みをもつ逆台形状を呈する。埋土は3層に分けた。いずれも砂質で、最下層には鉄分が顕著である。出土遺物はみられなかった。検出面から弥生時代後期と考えられる。

溝3 (図11③)

調査区の中央、CH～CI・17～19区を北西～南東方向に走行する。検出

面は8層上面で、標高は西端で0.84mを測る。幅0.31～0.44m、深さは西端で0.24m、東端で0.07mを残す。底面の標高は西端で0.6mであり、西から東への流れと考えられる。断面形は丸みをもつ逆台形状を呈する。埋土は3層に分けられる。1層は灰褐色砂質土、2層は暗灰褐色砂質土、3層は黄灰褐色砂質土であり、最下層は鉄分が特徴的であり流水をうかがわせる。出土遺物はみられず、検出面から弥生時代後期と考える。

溝4 (図12①)

調査区の中央、CH～CI・13～19区を北西～南東方向に走行する。検出面は7層上面で、標高は西端で0.95m、東端で0.85mを測る。幅0.33～0.63m、深さは西端で0.1m、東端で0.2mである。底面の標高は西端で0.85m、東端で0.65mであり、西から東への流れと考えられる。断面形は丸みをもつ逆台形状を呈する。埋土は3層に分けられ、最下層には鉄分および白色砂が特徴的であり流水をうかがわせる。

出土遺物はみられず、検出面から時期は古墳時代初頭と考える。

溝5 (図12②)

調査区の中央、CH～CJ・13～19区を北西～南東方向に走行する。検出面は7層上面で、標高は西端で0.95m、東端で0.85mを測る。幅0.3～0.4m、深さは0.1mである。底面の標高は西端で0.85m、東端で0.75mであり、西から東への流れと考えられる。断面形は皿状を呈する。

埋土は2層に分けられ、いずれも砂質土である。そのうち下層には鉄分が特徴的である。出土遺物はみられず、検出面から時期は古墳時代初頭と考える。

溝6 (図12③)

調査区の中央、CH～CJ・13～19区を北西～南東方向に走行する。検出面は7層上面での標高は0.9m、底面の標高は0.8mであり、西から東への流れと考えられる。幅0.35m、深さは0.1mである。断面形は皿状を呈する。

埋土は黄灰褐色の砂質土であり、鉄分を顕著に含むことから流水をうかがわせる。出土遺物はみられず、検出面から時期は古墳時代初頭と考える。

溝7 (図12④)

調査区中央、CI・CJ13～15区を北西～南東方向に走行する。本溝は重複遺構の関係で中央部分の一部のみの検出となった。検出面は7層上面で標高は西端で0.95m、東端で0.85mを測る。幅0.3～0.4m、深さは0.1mが残る。底面の標高は西端で0.85m、東端で0.75mであり、西から東への流れと考えられる。断面形は皿状を呈する。埋土は2層に分けられる。いずれも砂質土であり、下層には鉄分が特徴的である。

出土遺物はみられず、検出面から時期は古墳時代初頭と考える。

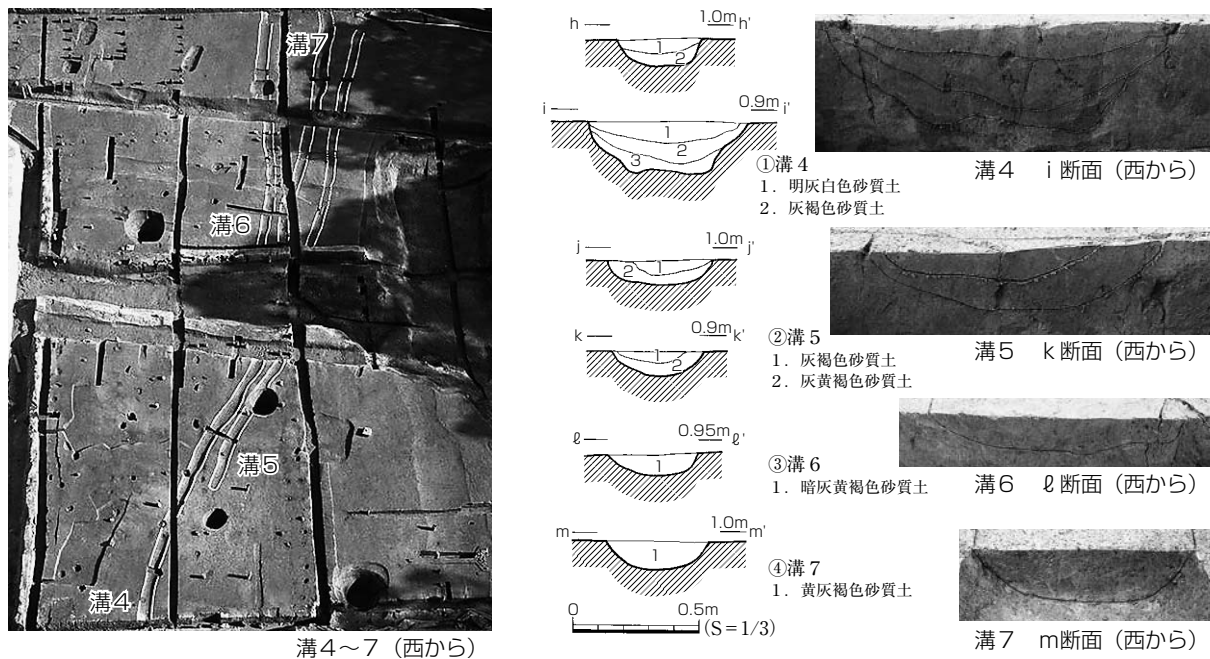


図12 溝4～7

b. 高まり (図13)

8層上面で調査区の中央付近に2カ所の高まり(高まり1・2)、またCLライン北側の東西方向の高まり(高まり3)が確認された。さらに7層上面の高まり4を調査区南端で検出した。

高まり1：8層上面で検出した。調査区中央にあたるCH18・19区に位置し、東西約5m、南北約4mの不整形円形を呈する。上面は標高1.0m、高さ0.3mを測る。高まり1については、9層直上に8層が薄く堆積し、耕作に伴うものか、自然地形ととらえるか、両方の可能性が考えられる。

高まり2：CD・CH14・15区に位置する幅約3m、長さ約4mの不整形を呈する。8層上面で検出し、標高1.0m、高さ0.1mである。

高まり3：CK18・19区に位置し幅約3m、長さ約7mの東西方向の帯状に確認された。南側・東側を後世の攪乱によって破壊される。検出面は8層上面で、標高0.9m、高さ0.3mを測る。高まり3の北側に溝1が並行するように走行する。方向は同じくするが先後関係にあり、まず高まりが形成された後に、水路として溝1がつくられたものと考えている。

これらの高まり1～3は8層の耕作に伴って9層上面を加工していくなかで形成されたものと考えられる。

高まり4：7層の水田耕作に伴う畦畔である。調査区南端CM15・16区に南西～北東方向の帯状に残る。検出面は標高1.0mを測り、上面は幅約4m、高さ0.1mである。ただし、直上に堆積する6a層によって上面が割られている可能性があり、その上面は多小上位に上がる可能性を残す。

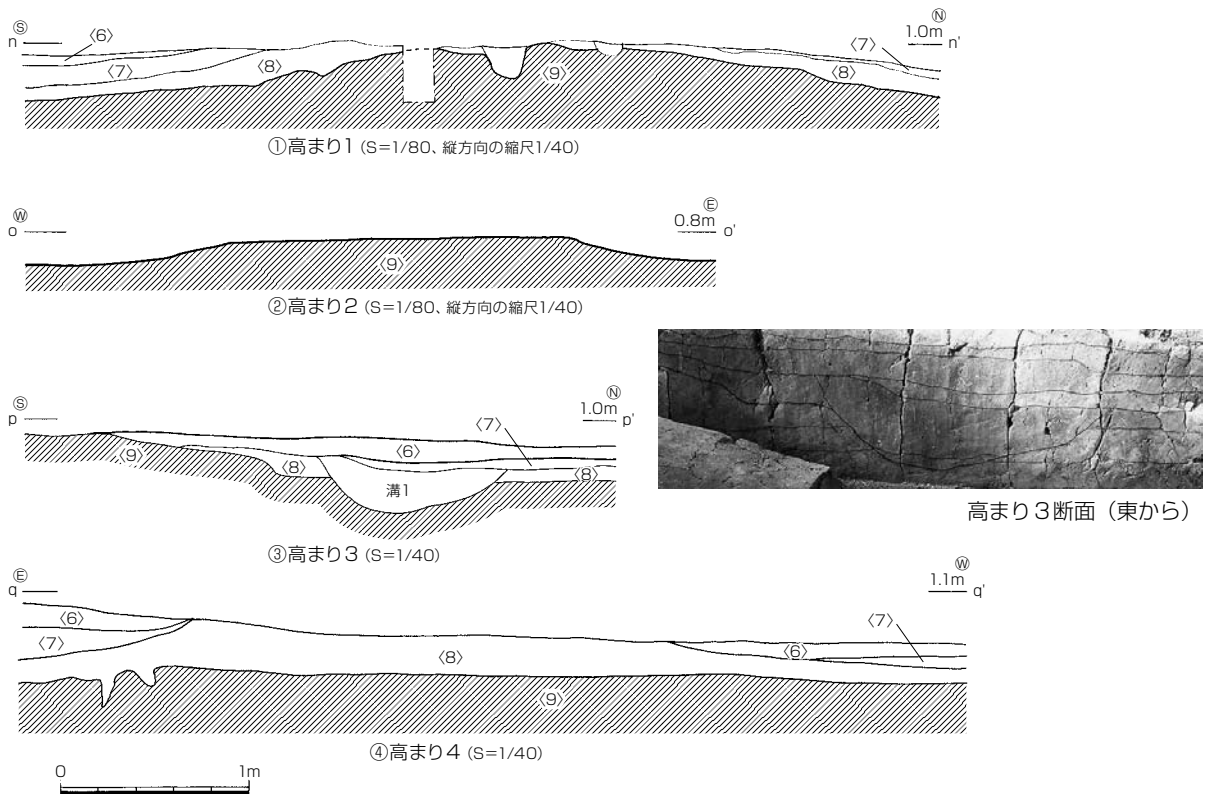


図13 高まり1～4断面

第3節 平安時代後半～戦国時代の遺構・遺物

本時期に属する遺構として、井戸10基・土坑9基・溝14条および柱穴137基があげられる(図14)。

11～12世紀初めには、調査区北西に井戸2基、中央西よりに井戸2基と、2ヶ所の屋敷地の存在が窺える。柱穴は6層で39基を検出した。

その後一旦中断が認められ東西・南北の溝群(溝8～14)は検出されているが、12世紀前半～13世紀中葉の井戸は検出されていない。

13世紀後半に井戸1基(井戸5)が認められ、再び集落が営まれるようになる。13世紀末～14世紀初頭に埋没する溝は大型化が認められ、南北方向の溝15と東西方向の溝16により区画が構成される。

15世紀前半には南北方向の大型溝は溝17に替わり、東に位置を変える。井戸8が15世紀後半にあたり、その位置は溝17の西側である。井戸8のほか、小規模な溝や柱穴等の遺構は、大半が溝17より西側に位置する。

その他に井戸4基・土坑6基は13世紀後半～15世紀後半のなかでとらえられる。

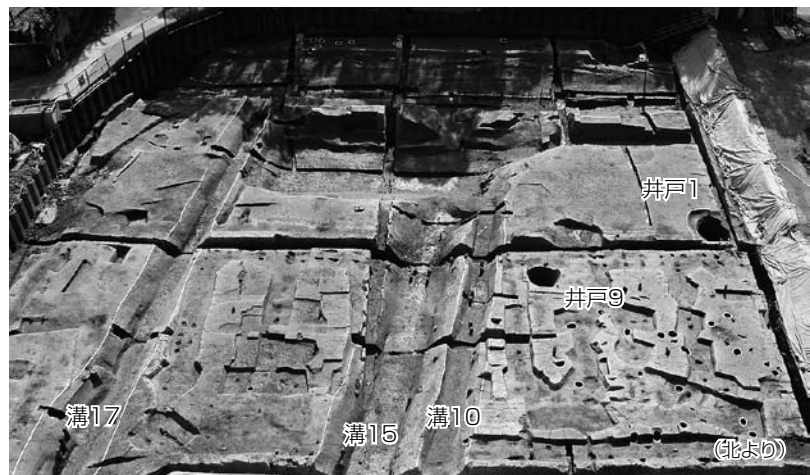
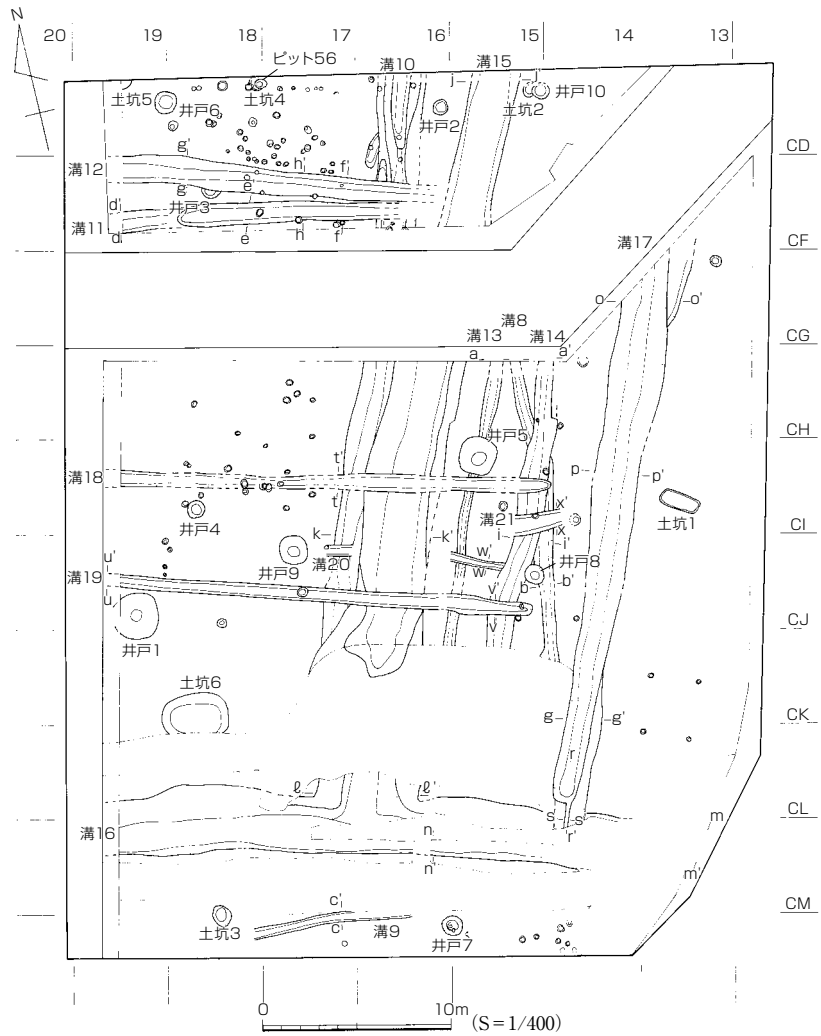


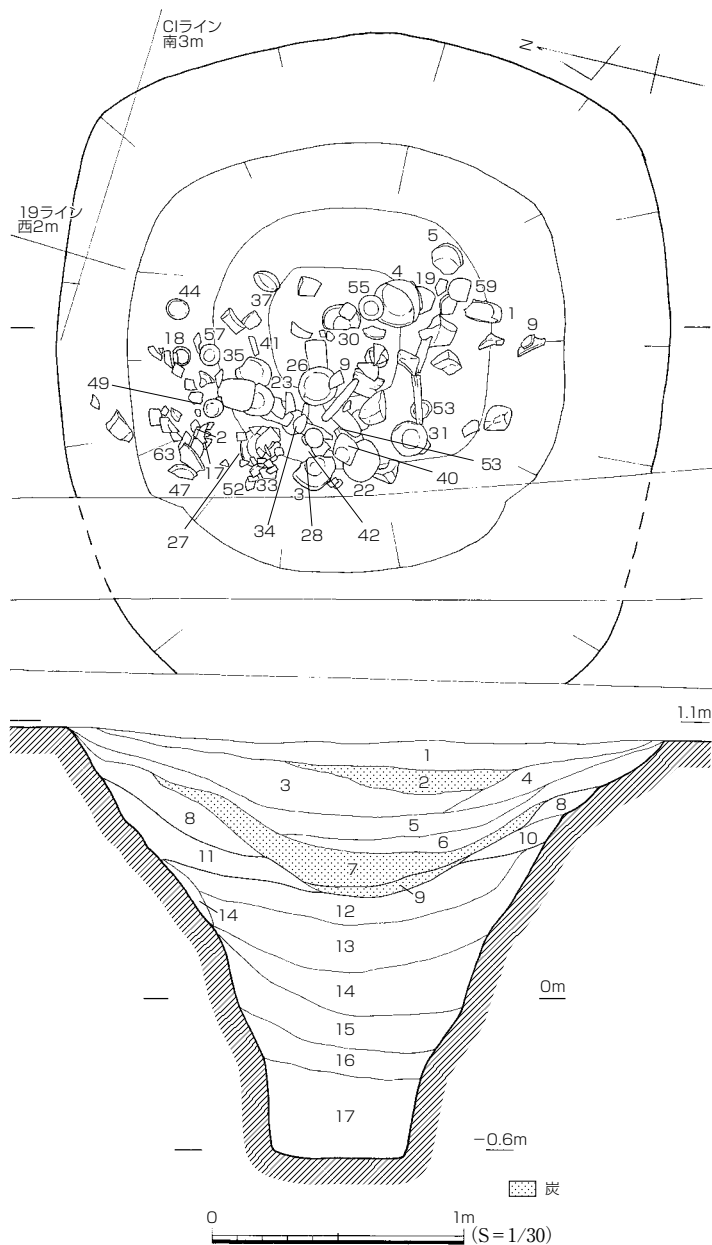
図14 平安～戦国時代検出遺構全体図

調査の記録

a. 井戸

井戸1 (図15~18 図版1)

調査区の中央西端、CI19区で検出した。検出面は6層上面、標高1.05mを測る。井戸の西端は調査区外にかかる。平面形は上部が長径2.5×短径2.2mの隅丸方形、底面では一辺0.5mの隅丸方形を呈している。底面の標高は-0.6m、深さは1.65mである。断面形は、標高0.5mより上位へは緩やかな傾斜で開き、底部近くはやや筒状を残



a. 遺物出土状況 (東から)



b. 遺物出土状況 (東から)



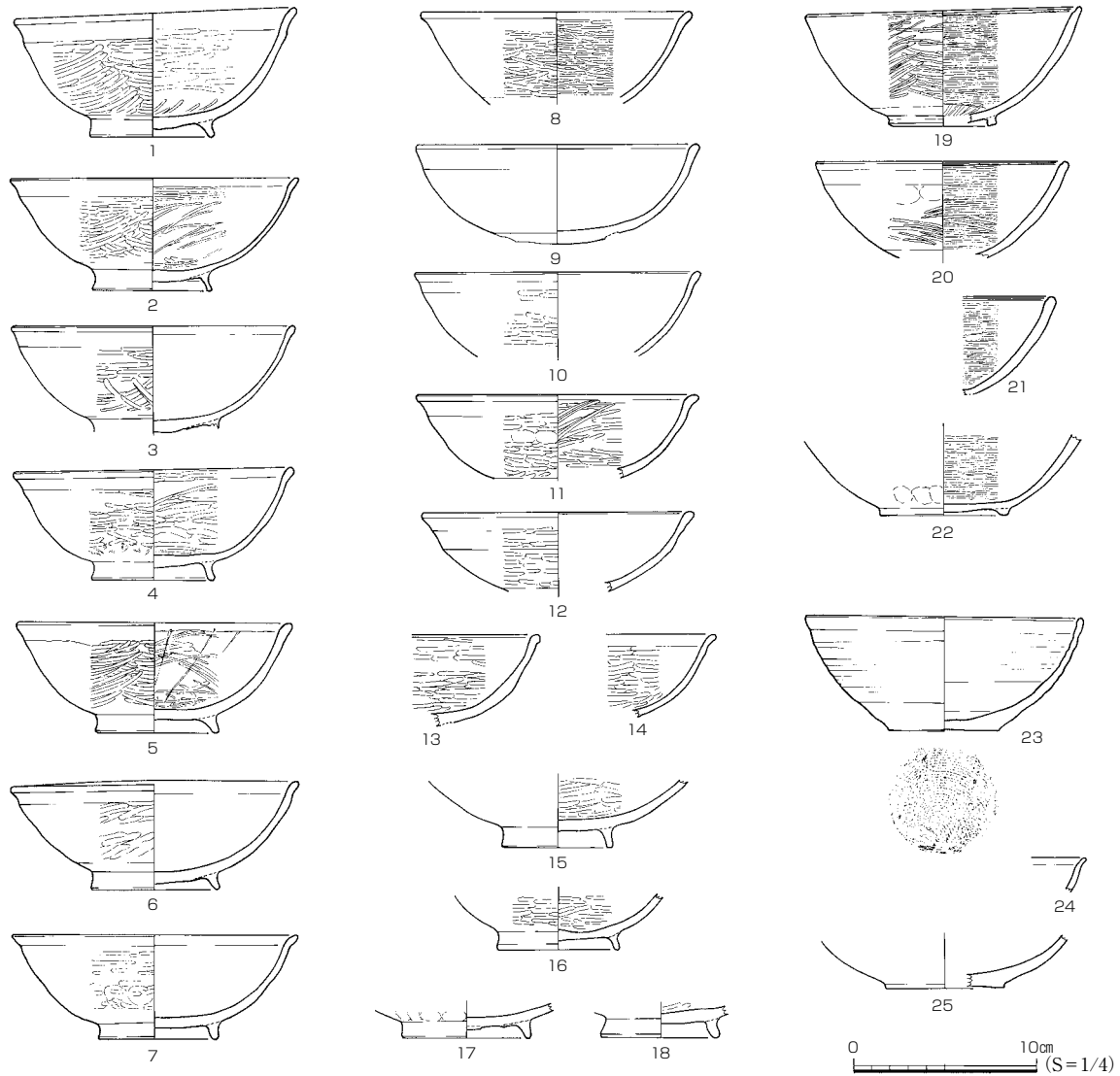
c. 完掘状況 (西から)



d. 土層堆積状況 (西から)

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1. 暗灰褐色砂質土 (炭△) | 10. 橙褐色粘質土 (灰色粘土ブロック) |
| 2. 褐灰色砂質土 (炭◎) | 11. 橙灰色粘質土 (Fe◎) |
| 3. 灰褐色砂質土 (炭・焼土) | 12. 灰褐色粘質土 (Fe◎、有機質◎、暗灰色粘土ブロック) |
| 4. 茶褐色砂質土 | 13. 灰色粘土 (暗灰色粘土ブロック) |
| 5. 褐灰色粘質土 (Fe) | 14. 暗灰色粘土 |
| 6. 暗緑褐色粘質土 (褐色土ブロック) | 15. 灰色粘土~シルト (黄灰色粘土ブロック) |
| 7. 暗灰色粘質土 (焼土◎、炭◎、土器◎) | 16. 灰白色粘土 (暗灰色粘土・黄灰色粘土ブロック) |
| 8. 黄褐色砂質土 | 17. 暗灰色シルト (ラミナ状に粗砂) |
| 9. 橙褐色粘質土 (焼土、炭) | |

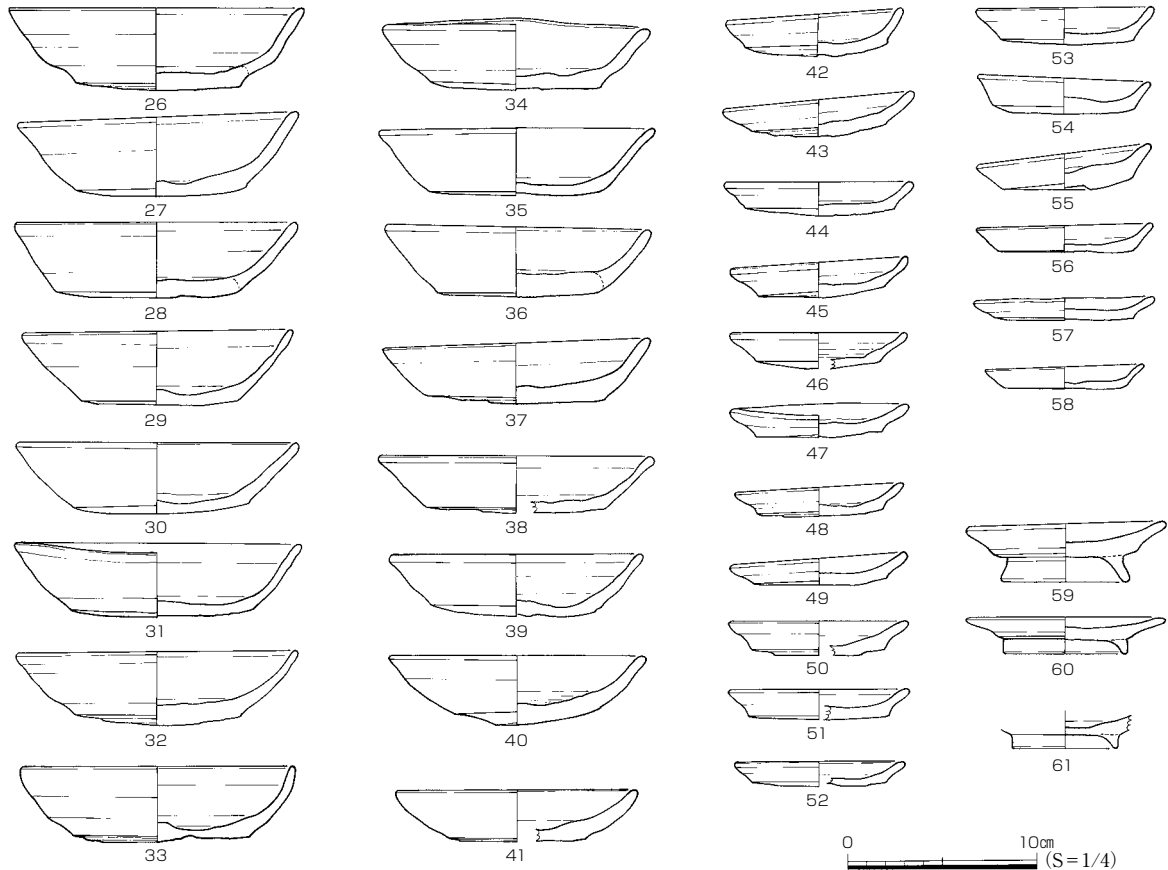
図15 井戸1



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質碗	15.4×15.5	6.8	6.3～7	内：ミガキ(密・浅・底は平行)、外：ミガキ(横方向後4分割・密・深)、内～口外：煤、ほぼ完存	白	微砂、粗砂少
2	土師質碗	15.7	6.4	6～6.1	内：丁寧なミガキ+細い暗文状ミガキ、外：押圧+ミガキ(分割的)、口縁1/4欠	白	微砂、粗砂少
3	土師質碗	15.5	(7)	6.0	内：平滑・ミガキ不明確、外：丸みライン・下半ミガキはクロス・やや疎、口：煤・シャープ、摩滅、1/4欠	白	微砂、細～粗砂
4	土師質碗	15.3×15.6	6.6×6.8	5.8～6.1	内：工具ナデ後ミガキ(幅広・円弧状・疎)、外：ミガキ(粗密有)・下半に亀裂、高台内：墨、硬質、口1/8欠	暗黄白/白	微砂、粗砂少
5	土師質碗	15×15.1	6.7	6.0	内：工具ナデ後ミガキ(円弧状・疎)、外：ミガキ(5分割)、高台内：墨○、口1/9欠・高台1/2欠	黄茶白/(黄)白	微砂、細～粗砂
6	土師質碗	15.6×15.8	7×7.1	5.6～6	内：摩滅・被熱○、外：ミガキ(幅広・やや疎)、全体に煤・変色、体部1/2欠	黒～灰褐	微砂、粗砂
7	土師質碗	15.6	6.5	5.6	内：摩滅、外：ミガキ(幅広・やや疎)・押圧、全体に煤・被熱・変色、体部1/2欠	灰褐～白～橙	微砂、細～粗砂
8	土師質碗	(14.8)	-	-	内外：平滑・ミガキ密、1/5～1/6残	白	微砂、粗砂
9	土師質碗	(15.4)	-	-	内外：摩滅・丁寧な仕上げ、外：丸みライン、底部器壁厚め、やや軟質、口3/4欠	白	微砂、粗砂
10	土師質碗	(15.6)	-	-	内：丁寧な仕上げ・ミガキ有無不明、外：丁寧な仕上げ・ミガキ、1/4残	白	微砂少、細かい
11	土師質碗	(15.4)	-	-	内：ミガキ密(横→上半右上がり)、外：押圧後ミガキ、1/4残	白	微砂、粗砂
12	土師質碗	(14.8)	-	-	内：丁寧な仕上げ・ミガキ有無不明・被熱で剥離・煤多～灰黒化、外：口縁横ナデ2段・ミガキ幅広、1/5残	白	微砂、粗砂少
13	土師質碗	-	-	-	内：平滑・ミガキ疎・底部煤、外：ミガキ(上半は疎)、口：玉縁状、体部器壁厚手、硬質感	白	微砂、粗砂
14	土師質碗	-	-	-	内外：ミガキ、口縁：シャープ、硬質感	白	微砂、粗砂少
15	土師質碗	-	6.0	-	内：ミガキ、外：摩滅、高台：立ち上がり急峻、体部1/6・高台3/4残	白	微砂、細～粗砂少
16	土師質碗	-	6.7	-	内：ミガキ密・底部煤、外：押圧後ミガキ密、高台：ナデ、体部1/7・高台1/1残	灰白～黒/白	微砂、粗砂
17	土師質碗	-	6.8×7	-	内：丁寧な仕上げ・摩滅、外：押圧、高台：ナデ、内外：煤、1/1残	(暗)灰褐	微砂、粗砂
18	土師質碗	-	6.3×6.5	-	内：丁寧な仕上げ・ミガキ、高台：ナデ・やや厚手、硬質感、1/1残	白	微砂、粗砂
19	瓦器碗	15×(15.6)	(5.9)	6.0～6.5	内：ミガキ細く密・底部暗文風、外：押圧後ミガキやや疎、体部2/3・高台1/8残、楠葉型	黒、断：白	微砂僅少
20	瓦器碗	(13.8)	-	-	内：ミガキ密、外：押圧後ミガキ疎、内外摩滅、1/6弱残、楠葉型、断面灰白色	灰白～暗灰、断：灰	微砂少
21	瓦器碗	-	-	-	内：ミガキ密、外：押圧後ミガキ疎、内外摩滅、楠葉型、22と同一個体の可能性大	淡灰白～暗灰、断：灰	微砂僅少
22	瓦器碗	-	(7)	-	内：ミガキ密、外：押圧のみ確認、高台：押圧・ナデ・低平な形状、内外摩滅、楠葉型、体部1/8・高台1/4残	断：灰	微砂僅少
23	須恵器碗	15.1	6.0	6.1～6.3	底部：内面ナデ・外面糸切り(ロクロ回転左)、口縁に重ね焼き痕、口縁1/3欠	灰～黒灰/灰	微砂、細～粗砂少
24	須恵器碗	-	-	-	内外：強い横ナデ、器壁薄手、口縁端部シャープな仕上げ、	淡灰	微砂僅少、緻密
25	須恵器碗	-	(6.5)	-	内外：横ナデ(ロクロ)、底部外：糸切り(ロクロ回転左)、1/4残	淡灰	微砂僅少、緻密

図16 井戸1出土遺物1

調査の記録



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
26	土師質杯	15.1×15.9	8.7×8.8	4.4	横ナデ、底部：内面仕上げナデ・外面鏡キリ(ロクロ回転左)後板目痕、体部内面上半～口縁に煤多、ほぼ完存	淡黄茶灰白	微～細砂多
27	土師質杯	14.8×14.9	9.1	3.7～4.5	横ナデ、底外：鏡キリ後板目痕、全体摩滅・剥離=被熱、口縁に煤多、底部厚手、口縁1/4欠	灰橙褐	細砂多
28	土師質杯	15.0	9.5	4.0	横ナデ、底外：鏡キリ後板目痕、剥離、外面煤少、底部やや厚手、口縁1/4欠	灰褐	微～細砂多
29	土師質杯	(14.3)	8.1×8.3	3.6～4.1	横ナデ、底外：鏡キリ後軽いナデ、一部被熱・煤少、口縁1/2・底部3/4残	淡黄灰白	微砂
30	土師質杯	14.7×15	9.2	3.6～3.8	底内：押圧、底外：鏡キリ後板目痕、歪みあり、剥離・変色=被熱、口縁1/3欠、赤色粒	乳灰褐	微～粗砂多、赤色
31	土師質杯	15.1×15.2	9.4×9.5	3.5～4	横ナデ、底外：鏡キリ後板目痕、底部やや厚手、完存	淡黄茶白	微砂、赤色粒
32	土師質杯	14.8×15	8.7×8.9	3.5～4	横ナデ、底外：鏡キリ(ロクロ回転左)後板目痕、口縁1/3欠、きめ細かい胎土	乳橙褐	微砂少、赤色粒多
33	土師質杯	14.6	9×9.4	3.7～4.2	横ナデ、底外：雑な鏡キリ(ロクロ回転左)、口縁1/6欠、やや厚手	灰褐	微砂
34	土師質杯	14.1×14.3	8.8×9.4	3.2～3.8	横ナデ、底外：鏡キリ後板目痕、内：被熱で剥離○、煤：内面(幅4cm強○)～口縁外面、ほぼ完存	暗灰褐/橙灰褐	微砂、赤色粒
35	土師質杯	14.6	9.2	3.5～3.6	横ナデ、丁寧な仕上げ、底外：平滑・鏡キリ(ロクロ回転右か)、口縁1/4欠、赤色粒多	淡橙褐	微～細砂、赤色粒
36	土師質杯	14.0	8.5	3.6～3.9	横ナデ、底外：鏡キリ(ロクロ回転左)、厚手(特に底部)、口縁2/3・底部3/4残	乳橙褐	微砂少、赤色粒
37	土師質杯	13.7×14.2	9.2×9.5	2.8～3.4	横ナデ、底外：鏡キリ後ナデ、厚手(特に底部)、ほぼ完存	乳橙褐	微砂、赤色粒多
38	土師質杯	14.7	9.5	3.0	横ナデ・平滑、底外：鏡キリ後板目痕、1/2残、被熱変色で橙色化	淡乳黄灰	微砂、赤色粒多
39	土師質杯	13.4	9.0	3.3	横ナデ、底外：鏡キリ後ナデ、内外に煤、1/2残	灰褐	微砂
40	土師質杯	(13.6)	7.8	3.7	横ナデ、底外：鏡キリ・丸み残す、底内：押圧、口縁1/4・底部3/4残	明橙褐	微～細砂多
41	土師質杯	(12.8)	(7.2)	2.7	横ナデ、底外：鏡キリ、1/3～1/4残	淡黄灰褐	微砂、赤色粒多
42	土師質皿	9.3×9.6	7.5	1.7～2.7	底外：鏡キリ(ロクロ回転左)、底内：押圧、煤：口縁内～外面に幅5cm(器高最高位置)、完存	暗乳灰褐	微～細砂
43	土師質皿	10.5	7.3	1.3～2.4	底外：鏡キリ(ロクロ回転左)、底内：ナデ・押圧、煤：口縁内面に径1/3、口縁3/5・底部3/4残	乳橙褐	微砂
44	土師質皿	10.0	7.5×7.8	1.8～2.1	横ナデ、底外：鏡キリ(ロクロ回転左)、底内：押圧、内面被熱、内外煤少、口縁1/2欠	乳灰褐～黄白	微砂多
45	土師質皿	9.4×9.6	6.6×6.8	1.6～2.1	横ナデ、底外：鏡キリ後ナデ、煤：口縁外面に幅4cm(器高最低位置)、完存	淡乳黄灰白	微～細砂多
46	土師質皿	(9.4)	(6.5)	(1.9)	横ナデ、底外：鏡キリ後ナデ、1/2弱残	淡乳褐/黒灰褐	微砂
47	土師質皿	9.3×9.5	6.8×7	1.2～1.9	底外：鏡キリ(ロクロ回転左)・中心に板目痕、底内：押圧、口縁1/3・底部1/5欠	淡乳灰褐	微砂多
48	土師質皿	8.9	6.6	1.2～1.7	横ナデ、底外：鏡キリ後板目痕、底内：押圧、内面3/4に煤、完存	淡乳灰褐	微砂僅少
49	土師質皿	9.2×9.4	6.9×7.1	1.1～1.7	横ナデ、底外：鏡キリ(ロクロ回転左)・中心ナデ、底内：ナデ、完存、歪み有り	淡乳橙白	微砂僅少、赤色粒
50	土師質皿	(9.5)	(6.8)	(1.8)	横ナデ、底外：鏡キリ、底内：押圧、口縁内外幅3cm黒色化、1/4残	淡橙褐	微砂
51	土師質皿	(9.6)	(7.4)	1.6	横ナデ、底外：鏡キリ後ナデ、1/3残	淡乳黄褐	微砂少
52	土師質皿	(9.0)	(7)	1.3	横ナデ、底外：鏡キリ、口縁端部に面有り、口縁1/2弱・底部2/5残	暗乳灰	微砂僅少
53	土師質皿	(9.4)	7×7.4	1.8～2.1	横ナデ、底外：鏡キリ(ロクロ回転左)・内底：押圧・摩滅、口縁1/2欠	淡乳白	微砂、赤色粒
54	土師質皿	9.2×9.8	7.4×7.6	1.6～2	横ナデ、底外：鏡キリ(ロクロ回転左)後板目痕(僅か)、内：ナデ、ほぼ完存	淡乳白	微砂
55	土師質皿	8.9×9.4	6.5×7	1.3～2.3	底外：鏡キリ(ロクロ回転左・幅広)、内底：押圧、煤：口縁～外面に幅3cm(器高最高位)、完存	明橙褐/淡灰褐	微砂
56	土師質皿	9.3×9.6	7×7.1	1.2～1.6	横ナデ、底外：鏡キリ(ロクロ回転右)後板目痕(僅か)、内中心：ナデ、完存	明橙褐	微砂僅少
57	土師質皿	9.6×9.8	7.2×7.5	1～1.3	底外：鏡キリ(ロクロ回転左)後板目痕、内底：ナデ、煤：外面～口縁内面、ほぼ完存	橙灰褐	微砂、赤色粒
58	土師質皿	8.3×8.5	6.2×6.4	1～1.4	横ナデ、底外：鏡キリ、全体摩滅・被熱(煤・変色)、完存	乳灰白	微～粗砂
59	土師質台付皿	10.5×10.1	6.8	2.9～3.2	横ナデ、底外：鏡キリ後ナデ、丁寧な仕上げ、3/4残	淡橙(灰)白	微砂、赤色粒多
60	土師質台付皿	(10.5)	(6.6)	2.0	横ナデ、底外：ナデ、シャープな仕上げ、口縁1/8・高台1/3残	淡乳灰褐	微砂少、赤色粒多
61	土師質台付杯	-	5.6	-	内：底部押圧、外：底部外：鏡キリ痕、内外：被熱による変色、1/1残	淡乳白	微砂、細砂多

図17 井戸1出土遺物2

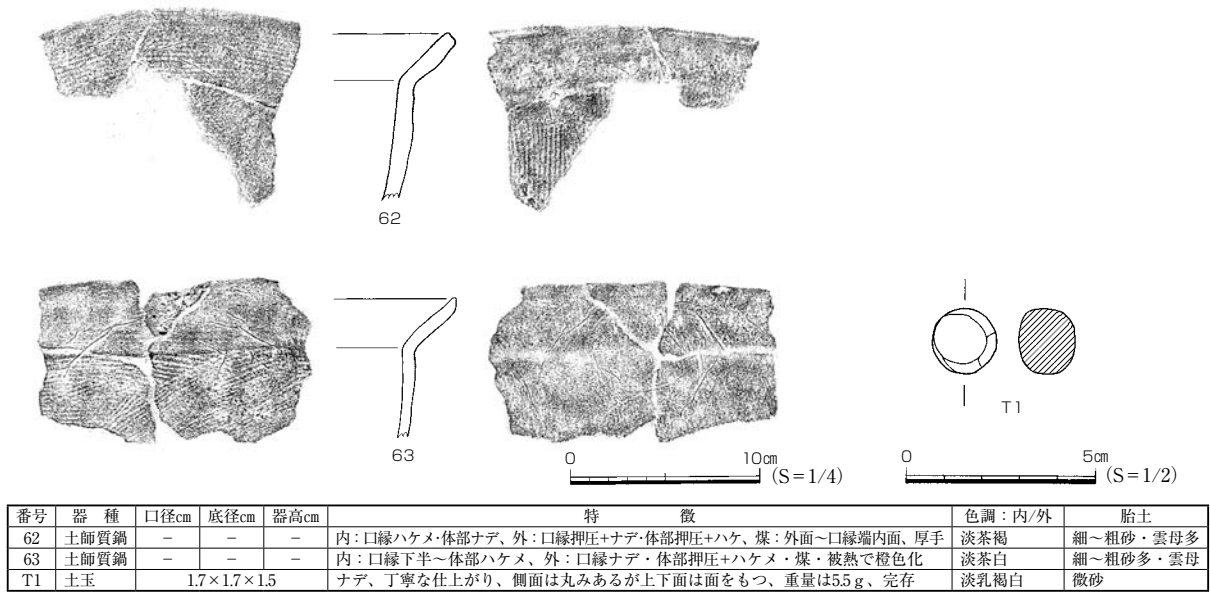


図18 井戸1出土遺物3

す。杵の痕跡は残っていないが、井戸杵が設置されていた可能性はある。

埋土は17層に分けた。1～12層と、粘土・シルト層となる13～17層の2群にまとめられる。上層の一群は灰褐色土を主体とするが、炭・焼土を多量に含む7層および炭を多く含む9層の段階と、それよりは少ないが炭を含む2・3層の段階が認められる。そのほか12層に多量の有機質が観察される。

遺物は、合計でコンテナ（27箱）3箱分が出土した。これらは7層中に集中する。次いで9層上面で土師質土器碗（図16-1・2）・須恵器碗（同23）・土師質杯（同31・35）・土師質皿（同55・58）等が出土した。さらに最下層からは土師質土器碗二点（同4・5）が出土した。こうした遺物の出土状況や炭の状況から井戸の廃棄に伴う祭祠が想定される。土師質土器碗（同4・5）の高台内には墨が顕著に認められ、墨入れとして利用した可能性が考えられる。出土遺物では土師質土器杯・皿の出土比率が高く、また在地の碗、楠葉型の瓦器碗（図16-20～22）、須恵器碗（同23～25）など中世土器碗の出現期における各地の器が一括して出土している。

本遺構の埋没時期は11世紀後半と考えられる。

井戸2（図19 図版2）

調査区北端、CD16区で検出した。調査区北壁にかかる位置にあたる。検出面は6層上面で検出面は標高1.05mを測る。平面形は径0.8mの円形を呈し、底面の標高は-0.65mで、深さは1.7mを測る。断面形は筒状を呈する。

埋土は13層に分けた。1～9層は黄褐色砂質土を主体とする。このうち5～7層は板等の痕跡の可能性も考えられる。10層は灰色粘質土と灰色砂との互層を呈し、12・13層では有機質が認められる。

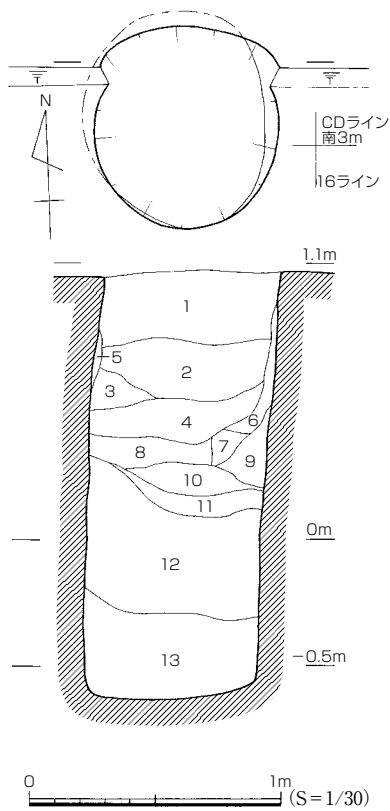
遺物は土器・木製品4点出土した。完形に近い皿1点（図19-1）以外に、土師質鍋の小片1片が出土している。W1～3は角材・板材片と考えられる。W4はヒノキ製の木製品で、図の下端両側にえぐりの加工が認められる。鍬などの農具の可能性が考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物と検出層位から11世紀後半と考えている。

井戸3（図20・21 図版2・6）

調査区北部、CE18区で検出した。検出面は6層上面、標高1.1mを測る。平面形は径1.0mの円形を呈し、底面

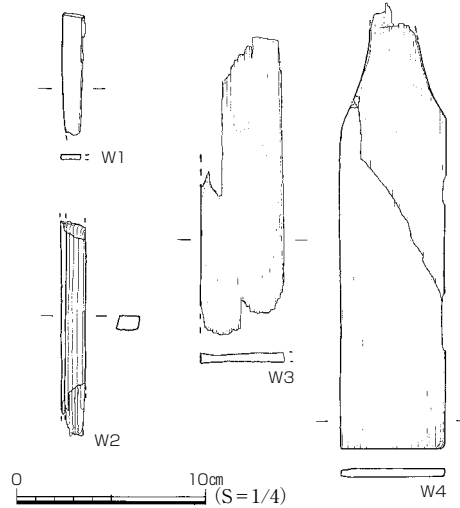
調査の記録



1. 黄白色粘質土 (Fe○)
2. 黄褐色粘質土 (Fe, Mn○)
3. 灰黄褐色粘質土 (Fe○, Mn△)
4. 黄灰褐色粘質土 (Fe, Mn)
5. 褐色砂質土 (Mn○)
6. (黄) 褐色砂質土 (Mn○)
7. 灰色砂質土 (細砂~粗砂○)
8. 灰色粘質土
9. 灰色粘質土 (微砂△)
10. (暗) 灰色粘質土 (灰白色砂ラミナ状)
11. 暗灰色粘質土 (微砂)
12. 暗灰色粘質土 (有機質○、炭)
13. 暗灰色粘質土 (有機質△)



a. 井戸2完掘 (南から)
b. 井戸2断面 (南から)



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調:内/外	胎土
1	土師質皿	(9.6)	7.0	1.6~1.8	横ナデ、底外:篋キリ(ロクロ回転左)後板目痕、内面~口縁・外面一部に煤、底部厚手、口縁3/4欠	暗灰褐/淡灰白	微砂
番号	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	特徴	
W1	板材	6.5	1.2~0.7	0.25	モミ属	薄い板状に加工、全形は不明	
W2	角材	11.4	1.3	0.8	モミ属	断面長方形の角材状に加工	
W3	板材	15.7	4.4	0.5	ツガ属	薄い板状に加工	
W4	板材	23.6	5.6~2.6	0.45	ヒノキ	柁目、両側縁にえぐれ有り	

図19 井戸2・出土遺物

の標高は-0.5m、深さは1.56mである。断面形は逆台形を呈する。

埋土は9層に分けた。1～6層は灰褐色～灰色系土、7～9層は灰色粘土を主体とする。遺物は8層下面、標高0.00～0.08mの位置で、土師質土器碗(図20-2)・櫛(同W5)・木簡(同W6)が出土した。遺物を覆うように有機質の範囲が確認された(図21-1)。藁などを敷いていたことが考えられる。5層は炭化物を含む。3層上面では標高0.67～0.79mに完形の土師質土器杯(同3)・皿(同4)が置かれていた。

遺物は、コンテナ(27号)2/3箱が出土し、瓦器碗3点、土師質土器杯1点・皿1点・碗48片、土師鍋8片、須恵質土器片4片、瓦1片、その他に土師質土器の小片30余点、木製品4点がある。

W5はイスノキ製の横櫛で全体の半分程度が残るものと考えられ、そのうちの1/3程度に歯が残っている。W6の木簡には北斗七星を示す「天崗星」の文字の下に鬼面を思わせる模様や「陰陽五行説」に関連する字句「木

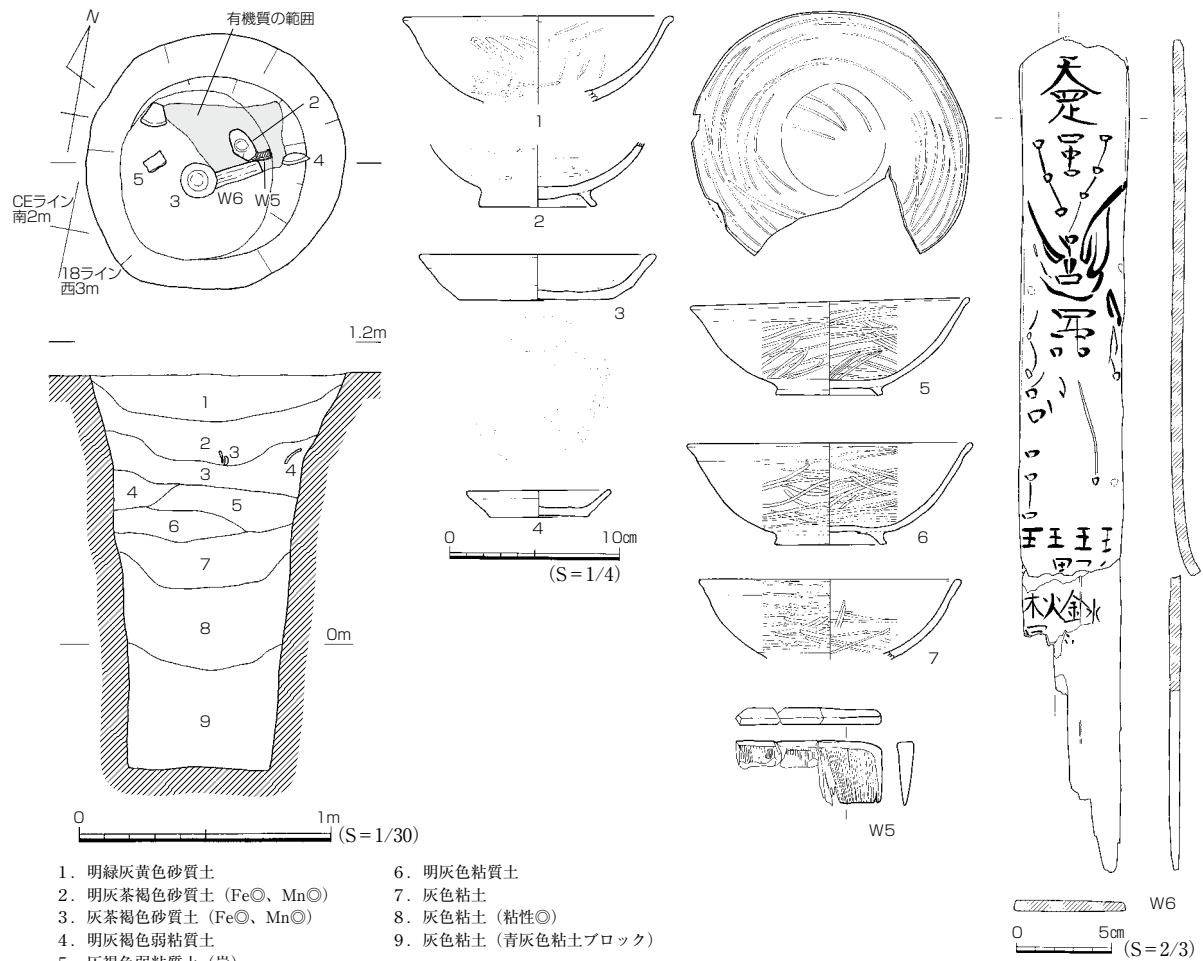


図20 井戸3・出土遺物



a 木簡出土状況（南より）



b 完掘状況（南より）



c 土層断面（南より）

図21 井戸3

火金水」「王王王王」等が記されており、呪符木簡であろう⁽¹⁾。

本遺構の埋没時期は11世紀末～12世紀初めと考えられる。

註 (1) 岩崎志保2004「鹿田遺跡第14次調査出土木簡について」『紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

井戸4（図22 図版2・3）

調査区中央西寄り、CH19区で検出した。検出面は6層上面で、検出面の標高は0.85mを測る。

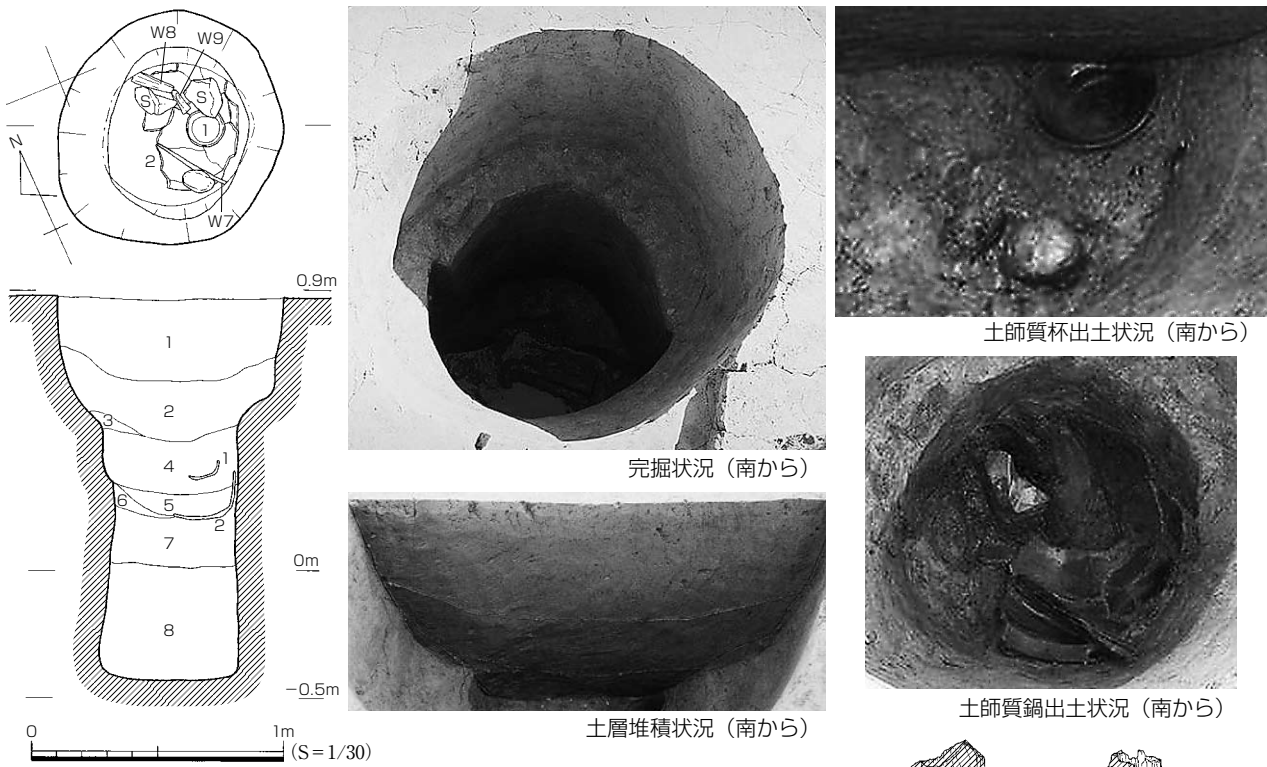
平面形は長径0.94m×短径0.89mの円形を呈し、底面の標高は-0.55m、深さは1.5mである。断面形は標高0.6m付近に段を持つ形状で、下位は筒状を呈し、深さ1.0mを測る。

埋土は8層に分けた。藁と植物質を多く含む暗灰色の腐植土層（7層）の上部に土師質鍋（図22-2）を正位置で置いている（図23左）。鍋の内部には炭化物を多く含む5層が堆積しており、その上を覆う4層には多くの炭化物和ヒョウタンの種子が認められた。4層中では完形の土師質土器杯1点（同図-1）が正位置に置かれ、同層から20cm大の角碟・円碟各1点も出土した。こうした炭を伴った完形に近い遺物の出土状況は、井戸の廃棄に伴う祭祀の過程を示していると考えられる。

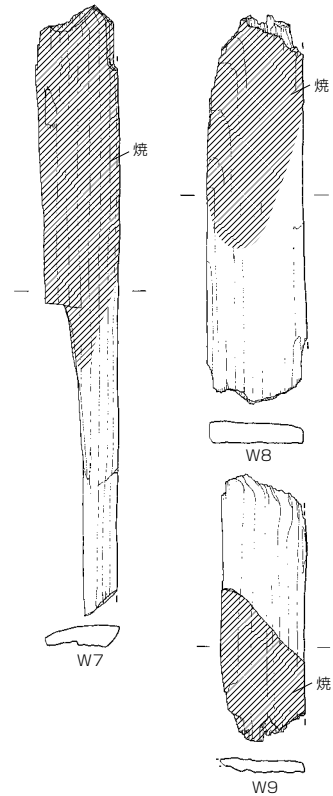
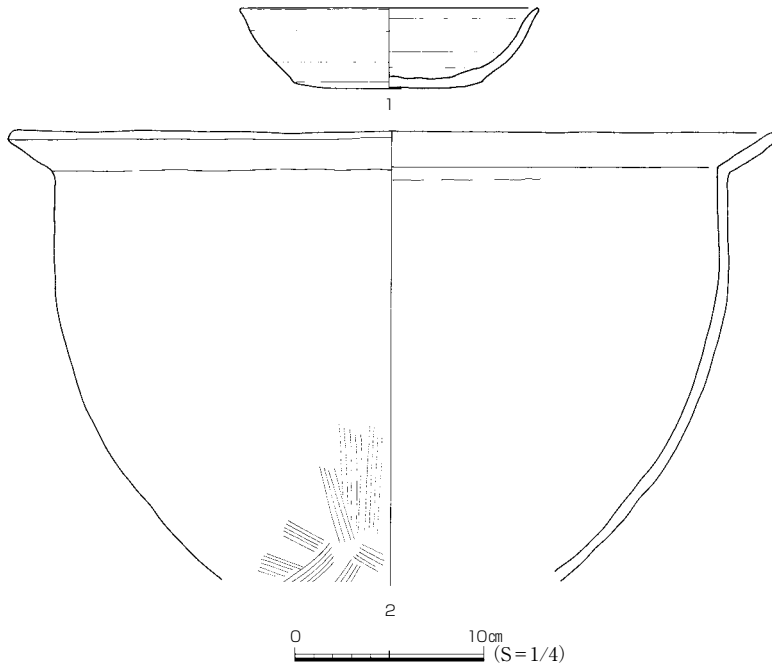
出土遺物は土師質土器杯1点・鍋41片、瓦器椀1片、土師質土器椀1片、木製品3点がある。

木製品3点（図22-W7～9）は6層から出土した。いずれも表面にケビキ状の加工痕が認められる板状を呈している。枠の部材の可能性も考えられる。

本遺構の埋没時期は遺物や検出層位から11世紀末～12世紀初めと考えられる。



- 1. 明黄茶褐色砂質土
- 2. 明灰茶褐色砂質土
- 3. 明灰褐色砂質土
- 4. 灰色～暗灰色粘土(炭・ヒョウタン・土器)
- 5. 暗灰色粘土(炭・土器)
- 6. 暗灰褐色粘土(有機質○)
- 7. 暗灰色腐植土(有機質○)
- 8. 暗褐色粘土



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質杯	15.8	10.1	4.3	横ナデ、内：一部煤付着、外：摩擦、底外：鈍キリ痕(ロクロ回転左)、ほぼ完存	暗橙褐	微砂
2	土師質鍋	(40.6)	-	-	内：口縁ハケメ、体部ナデ、外：口縁ナデ、頸部押圧、体部押圧+ハケメ、煤：外面～口縁部内面、1/6残	灰褐	粗砂
番号	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	特徴	
W7	加工材	32.2	4.3	1.1	モミ属	長方形、板状に加工。焼け焦げ有り	
W8	加工材	20.5	5.2	1.2	モミ属	長方形、板状に加工。焼け焦げ有り	
W9	加工材	14.1	4.5	0.6	モミ属	長方形、板状に加工。焼け焦げ有り	

図22 井戸4・出土遺物

井戸5 (図23・24 図版2)

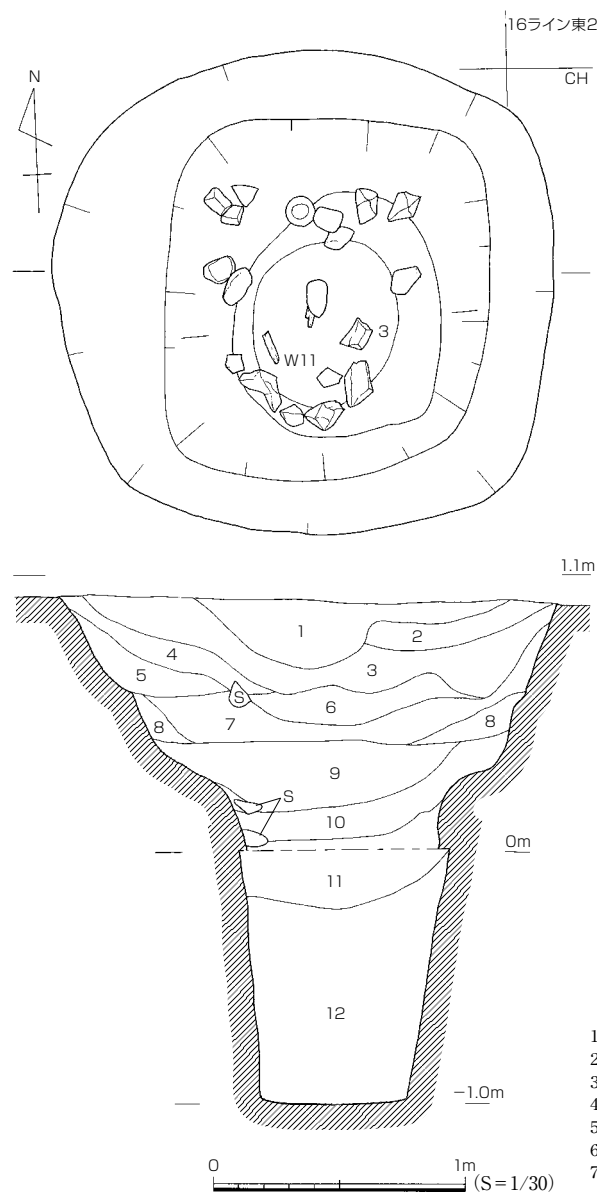
調査区中央、CH15区に位置する。5層上面で検出し、検出面の標高は1.0mである。平面形は上部では2.0×1.9mの隅丸方形を呈しており、底面では径0.6mの円形である。底面の標高は-1.05mで、深さは2.05mを測る。断面形は、標高0m付近を境に、下位では筒状、上位では逆台形を呈している。

埋土は12層に分けた。3・4・6層と11層に炭化物が多く含まれる。3・4層では炭のほかに焼土が多い。11層には植物質も多く、藁などを敷いた上に15~25cm大の角礫を多数入れている (図24右)。これらの角礫には焼けた痕跡は認められなかった。

出土遺物には土師質土器杯16片・皿22片・椀88片・鍋42片、竈4片、須恵質土器4片、亀山焼 (瓦質) の小片、

瓦1点、木製品2点がある。W10は断面形が六角形に加工されており、箸の可能性が考えられる。W11は角材で下端が焼けているが、全形・用途は不明である。

本遺構は5層で検出したが、出土遺物からは13世紀後半と考えられ、本来は4b層に対応する可能性もある。



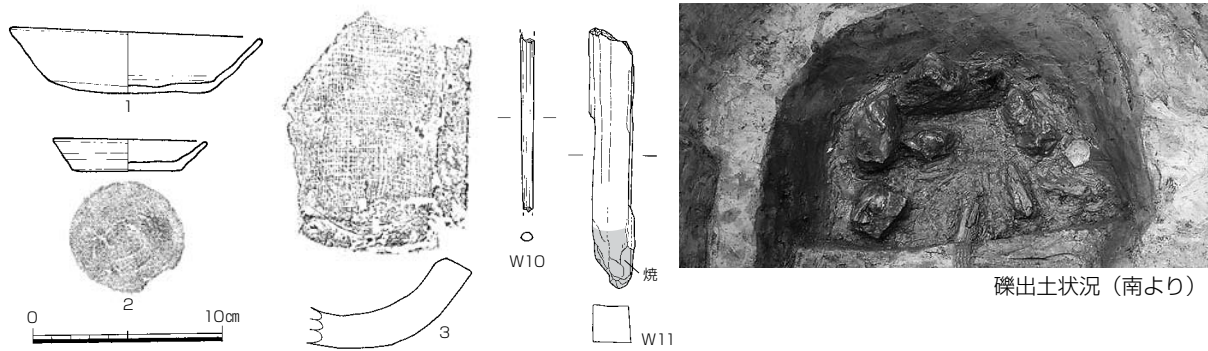
完掘状況 (南から)



土層堆積状況 (南から)

- | | |
|-------------------------|---------------------|
| 1. 暗灰褐色粘質土 (黄褐色土ブロック) | 8. 灰褐色粘土 |
| 2. 灰黄褐色粘質土 (黄褐色土ブロック) | 9. 暗灰黒色粘土 (植物質) |
| 3. 暗灰黄色粘質土 (焼土・炭) | 10. 暗灰色粘質土 (植物質・礫◎) |
| 4. 暗灰色粘質土 (焼土・炭) | 11. 暗黒灰色粘質土 (炭化物) |
| 5. 暗橙褐色粘質土 (黄褐色土ブロック・炭) | 12. 暗灰色粘土 |
| 6. 暗灰色粘土 (炭◎) | |
| 7. 暗灰褐色粘土 (黄褐色土ブロック) | |

図23 井戸5



礫出土状況（南より）

番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質杯	13.4	8.4	2.9～3.5	横ナデ、内：磨減、底外：匱キリ後ナデ、完存	乳橙	細砂・赤色砂粒
2	土師質皿	(8.2)	5.9	1.6～1.8	横ナデ、底内：仕上げナデ、底外：匱キリ(ロクロ回転左)後粗いナデ、一部板目、底部完存、口縁1/8残	乳橙褐	細砂・赤色砂粒
3	平瓦	長*11、幅*8.2、厚*1.8			内：布目、外：ナデ、側縁は切り込みを入れてカット	灰	粗砂

図24 井戸5出土遺物

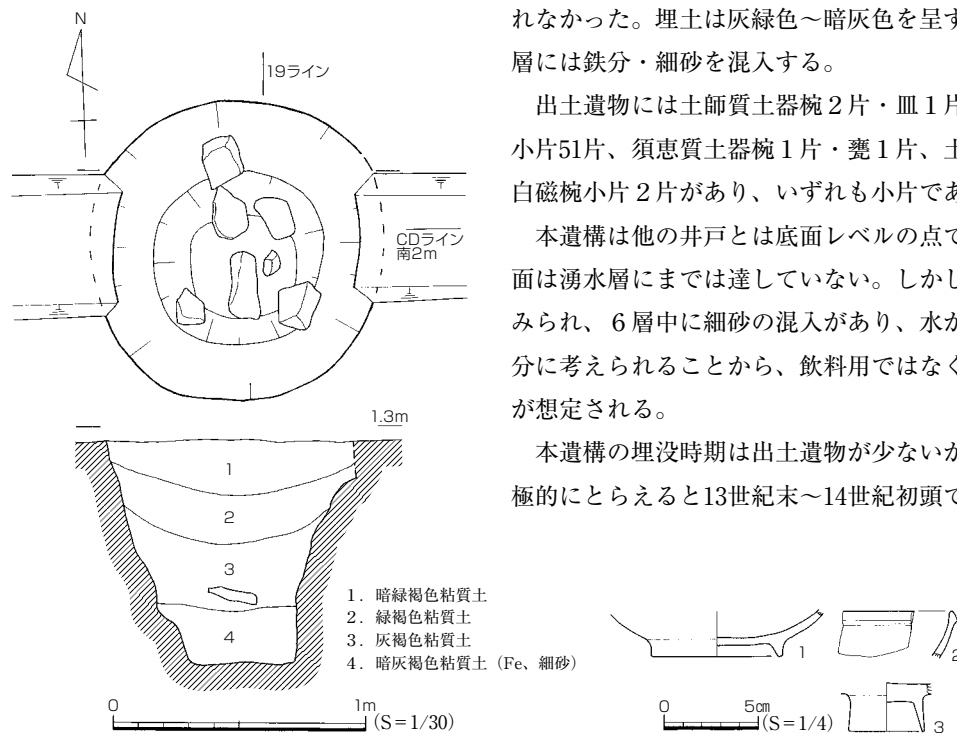
井戸6（図25・26）

調査区の北端、CD19区に位置する。4 b層上面で検出し、検出面の標高は1.25mである。平面形は径1.1mの円形を呈する。底面の標高は0.4mで、深さ0.88mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は4層に分けた。3層中には0.1～0.3m大の礫6点が出土したが、被熱痕等の特徴は認められなかった。埋土は灰緑色～暗灰色を呈する粘質土であり、最下層には鉄分・細砂を混入する。

出土遺物には土師質土器碗2片・皿1片、器種の判別できない小片51片、須恵質土器碗1片・甕1片、土師質甕5片・鍋6片、白磁碗小片2片があり、いずれも小片である。

本遺構は他の井戸とは底面レベルの点で大きな違いを有し、底面は湧水層にまでは達していない。しかし、底面に鉄分の沈着がみられ、6層中に細砂の混入があり、水が溜まっていたことは十分に考えられることから、飲料用ではなく、溜め井としての利用が想定される。

本遺構の埋没時期は出土遺物が少ないが、出土した白磁碗を積極的にとらえると13世紀末～14世紀初頭である。



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質碗	-	7.0	-	ナデ、内外とも煤付着、2/3残	乳灰褐	細砂・角閃石
2	白磁碗	-	-	-	ナデ、内外：貫入あり	灰白、(釉)淡オリーブ	堅緻
3	白磁碗	-	(4.0)	-	ナデ、内外：貫入あり、高台内無袖、1/3残	灰白、(釉)透明	堅緻

図25 井戸6・出土遺物

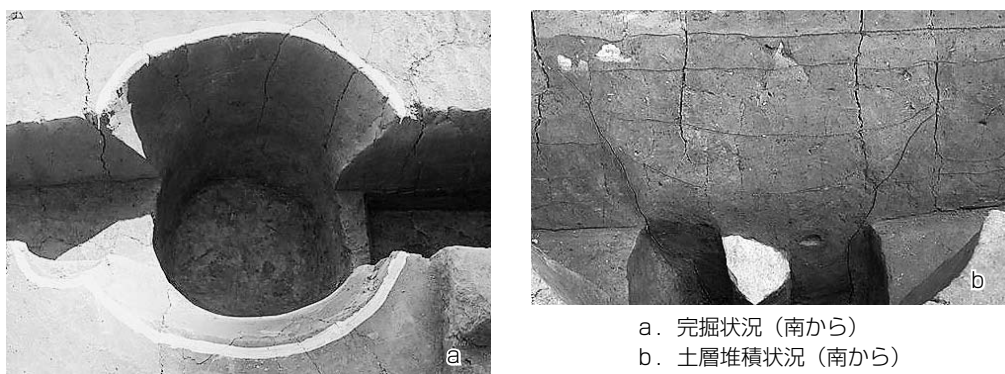


図26 井戸6

井戸7 (図27)

調査区南端の中央寄り、CM15・16区に位置する。検出面は4 b層上面で、検出面の標高0.8mを測る。底面の標高は-1.0m、深さは1.8mである。平面形は長径1.05m、短径1.0mの楕円形を呈する。断面形は標高0 m付近の傾斜変換点を挟み、下位は筒状に、上位は緩やかな傾斜をもって広がる。埋土は6層に分けた。1・2層は黄褐色系の砂質土、3～5層は灰色を呈する粘質土が堆積している。最下層の6層は暗青灰色系の粘質土で暗灰色砂を含む。

出土遺物はみられなかった。本遺構の時期は、検出面から13世紀末～14世紀初めと考えられる。

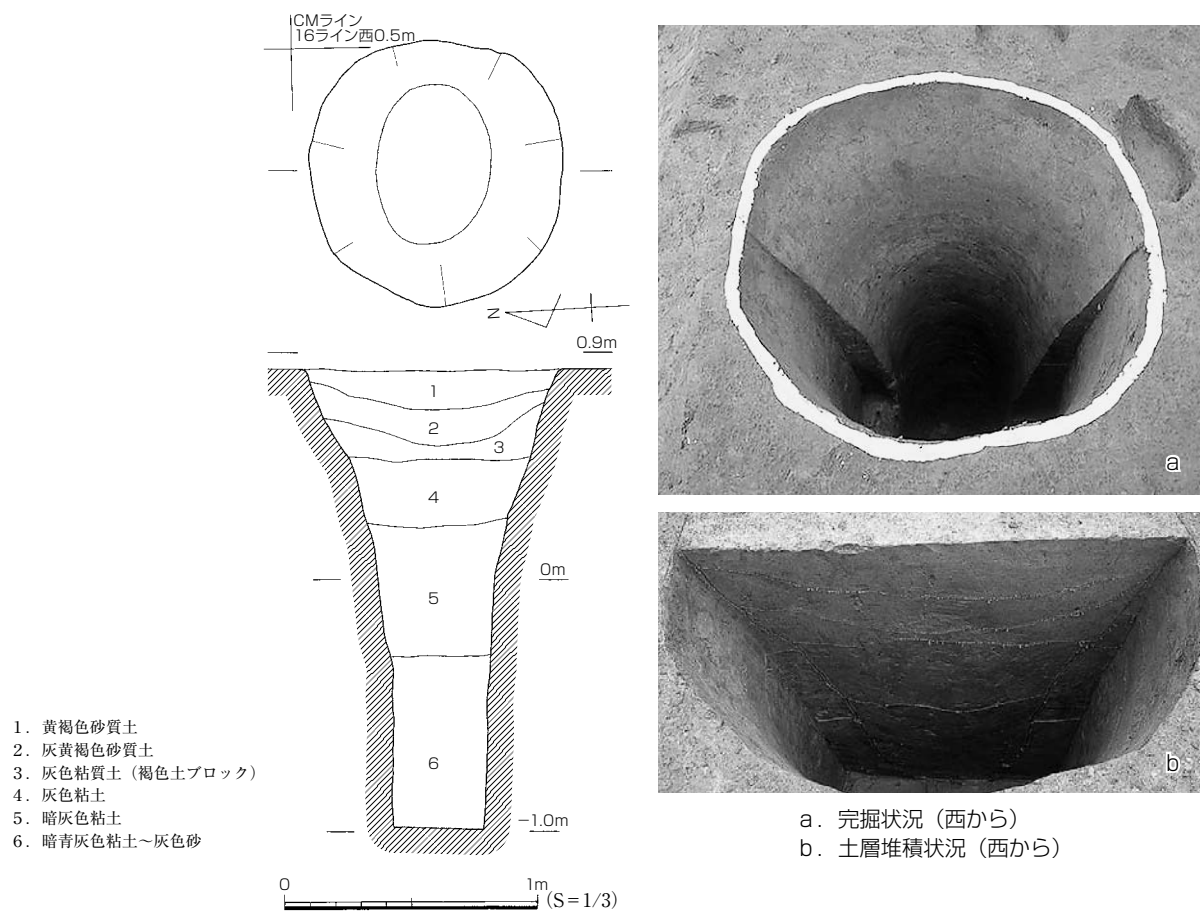
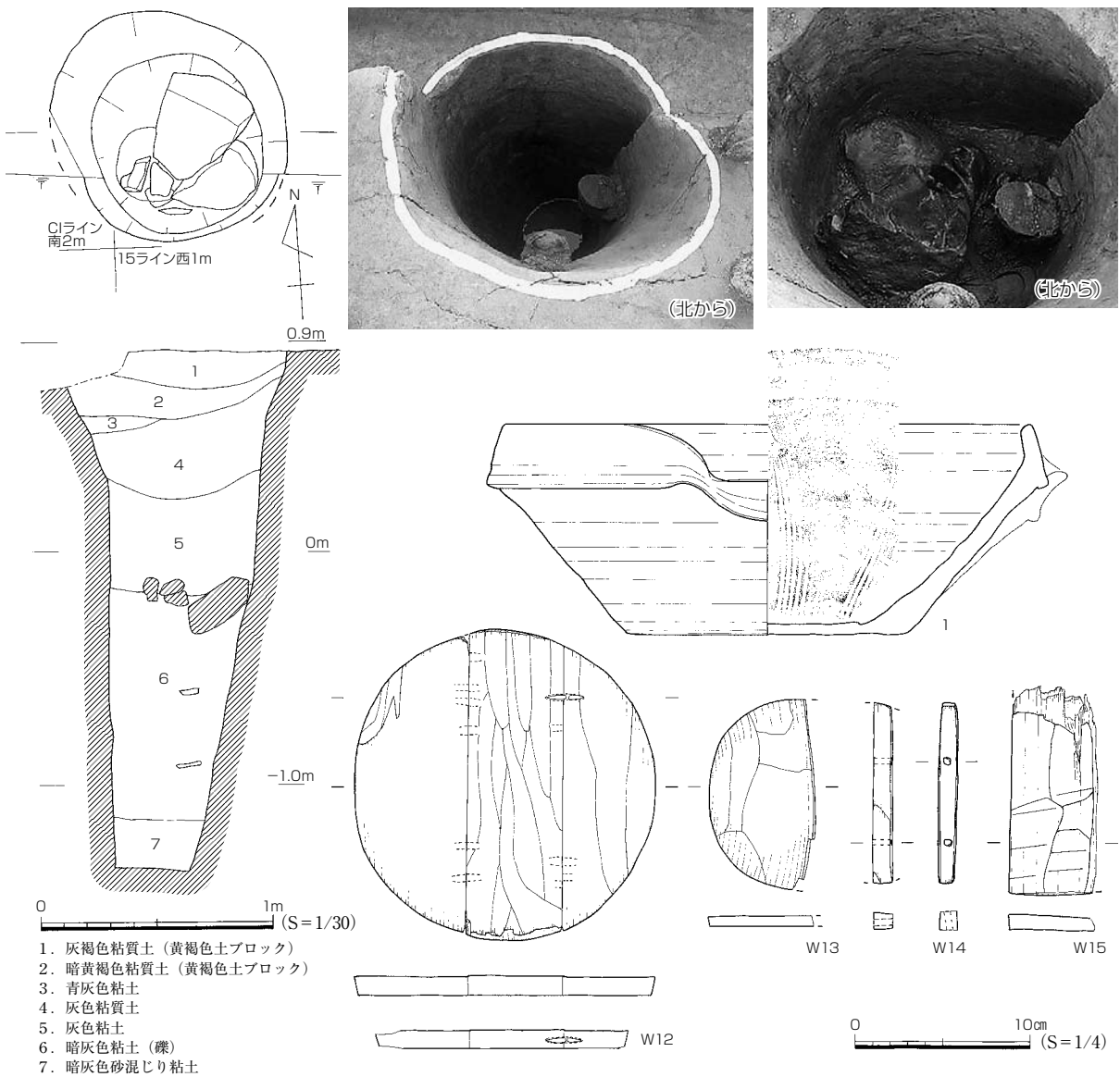


図27 井戸7

井戸 8 (図28 図版6)

調査区の中央、CI4区に位置する。検出面は4 b層上面で、標高0.85mを測る。平面形は上部で径1.0mの円形、底面では径0.4mの円形を呈する。底面の標高-1.35m、深さは2.2mである。断面形は逆台形を呈している。

埋土は6層に分けた。1・2層は灰褐色粘質土で黄褐色土ブロックを含む。標高0 m付近に、0.15m大から0.6 m大の礫が入られている。曲げ物 (W12・W13) は6層中で出土した。出土遺物は土師質土器碗小片5・竈2片、備前焼播り鉢7片、亀山焼小片1、木製品3点がある。図17-1は備前焼Ⅳ期の特徴を有する播り鉢である。同W12・13は曲げ物の底板である。W12は3枚の材を木釘により円形に綴じたものである。W14も全形は不明であるが、曲げ物底板の一部と考えられ、大きさはW13に近似する。本遺構の埋没時期は15世紀後半と考えられる。



器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1 備前焼播り鉢	(30.1)	(16)	9.3~1.2	横ナデ、内：8条一組の放射状卸し目、底外：粗いナデ、口縁1/8・底部1/4残	赤橙灰	細砂
番号	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	特徴
W12	曲物底板	18.0	17.2	1.2	スギ	合釘結合、3枚組み合わせ板
W13	曲物底板	10.9		0.5~0.6	スギ	榫目、面取り加工有り
W14	曲物底板か?	10.4	1~1.1	1~1.1	スギ	角釘穴2ヶ所有り
W15	加工材	12.0	5	0.9	スギ	榫目、刃物痕跡有り

図28 井戸 8 ・ 出土遺物

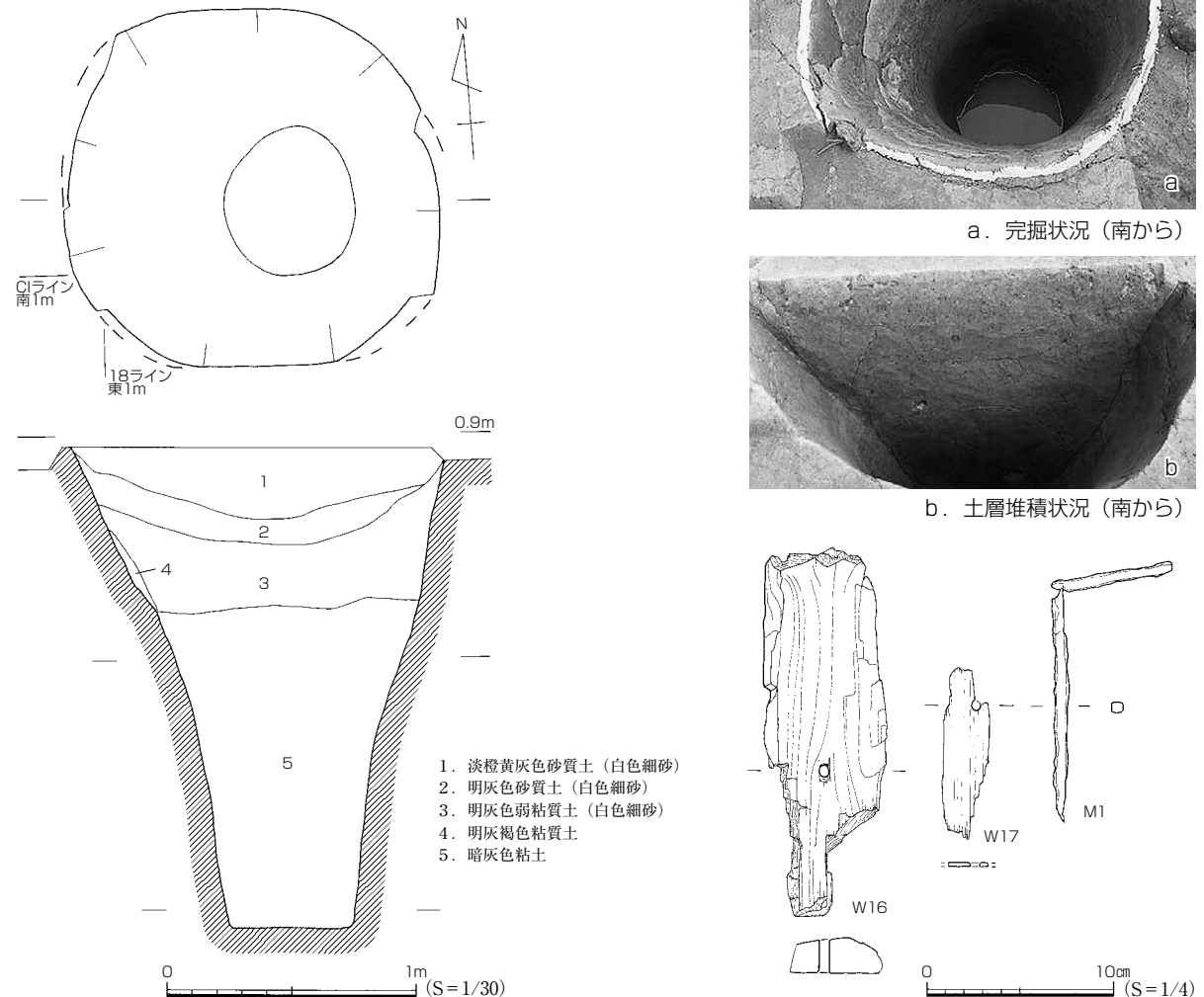
井戸9 (図29 図版5・6)

調査区中央、CI17区に位置する。検出面は4 b層で、標高0.85mを測る。平面形は上部は径1.5mの円形、底面では径0.5mの円形を呈する。底面の標高は-1.1m、深さは1.9mである。断面形はほぼ逆台形を呈し、上位は開き気味の傾斜を持つ。

埋土は5層に分けた。1～3層には白色細砂ブロックを含む。最下層の5層は暗灰色粘土層である。

出土遺物には土師質土器小片3片、亀山焼小片1片がある。その他に木製品2点・鉄製品1点がある(図29)。W16・17はいずれも板状を呈する。W16は厚みのある材ではぞ穴とみられる方形の穴が穿たれている。W17は薄手の板状で円形の小孔が1カ所認められる。いずれも用途は不明である。

本遺構の埋没時期は検出面から13世紀末～14世紀初頭と考えられている。



番号	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	特徴
W16	加工材	19.8	6.5	1.9	アカマツ	半裁材、切り込み、孔あり
W17	加工材	9.2	2.4	0.2	スギ	柃目、孔有り
番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	特徴
M1	釘	2.7	0.8~1.2	0.8~1.2	6.2	全体に錆彫れ 断面：長方形

図29 井戸9・出土遺物

井戸10 (図30)

調査区の北端、CD14区に位置する。本遺構は調査区北壁にあたり、北端は調査区外である。検出面は4b層で、標高0.3mを測る。平面形は径0.7mの円形を呈し、断面形は筒状を呈する。検出面の標高0.3m、底面の標高-0.2mを測り、深さは1.1mである。

埋土は9層に分けた。1・4・6層には粘土ブロックが顕著に含まれる。また2・8層には有機質が多く含まれる。特に2層中では藁が敷かれたような状況で認められた。最下層の9層は灰色粘質土に粗砂を多く混入する。

出土遺物は少なく、土師質鍋小片1片・皿小片3片のみであった。

本遺構の埋没時期は検出層位から13世紀末～14世紀初頭と考えている。

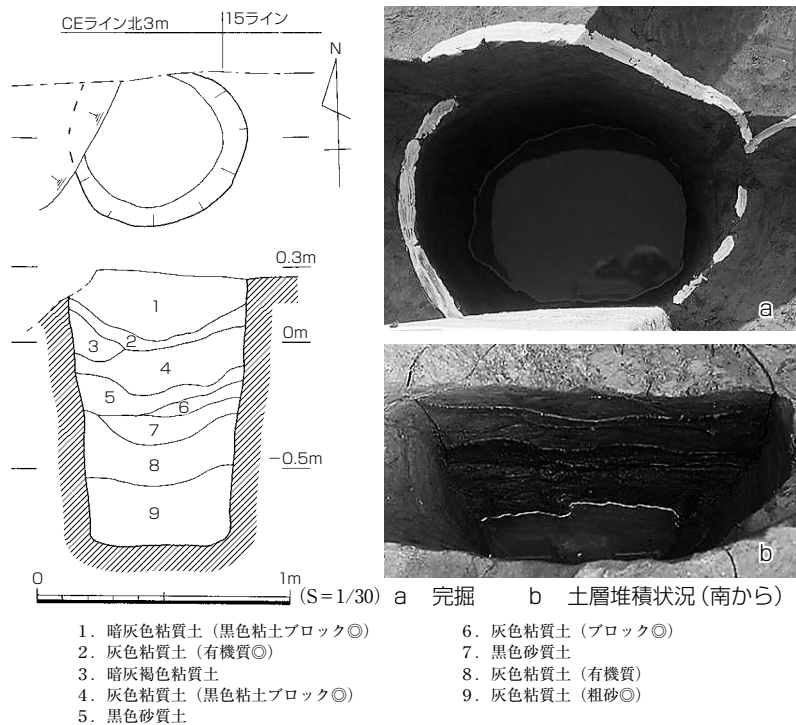


図30 井戸10

b. 土坑

土坑1 (図31)

CH13区に位置する。標高0.9m、4b層上面で検出した。平面形は長径1.9m、短径0.83mの長楕円形を呈する。長軸方向は北西-南東方向である。断面形は皿状を呈し、深さ0.22m、底面の標高は0.69mを測る。埋土は暗黄灰色砂質土と暗灰褐色粘質土層の上下二層に分けたが非常に近似している。遺物のごくわずかに土師質土器小片2片が出土した。本土坑の機能については、規模や底面が平坦な点を積極的に考えると墓の可能性はある。

本遺構の時期は検出面から13世紀後半～15世紀後半の範疇で考える。

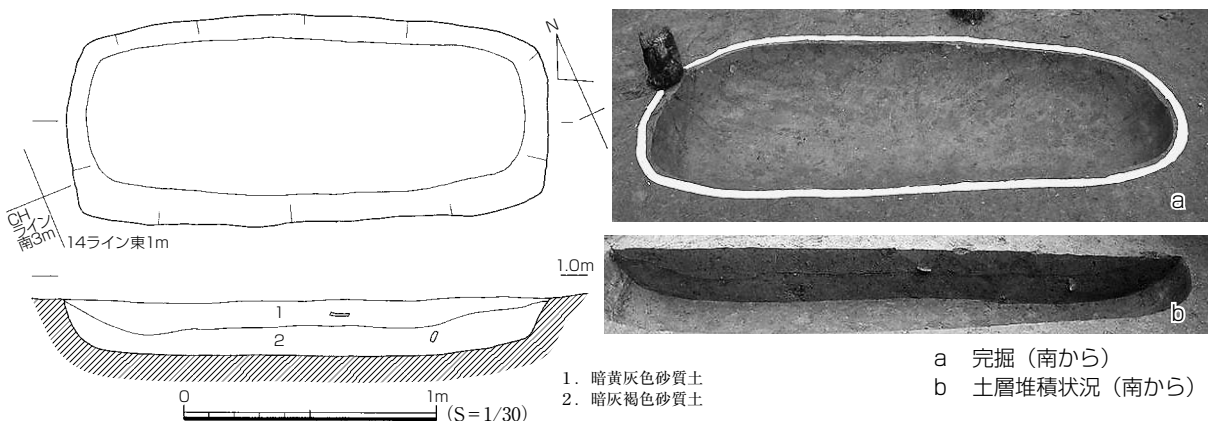


図31 土坑1

調査の記録

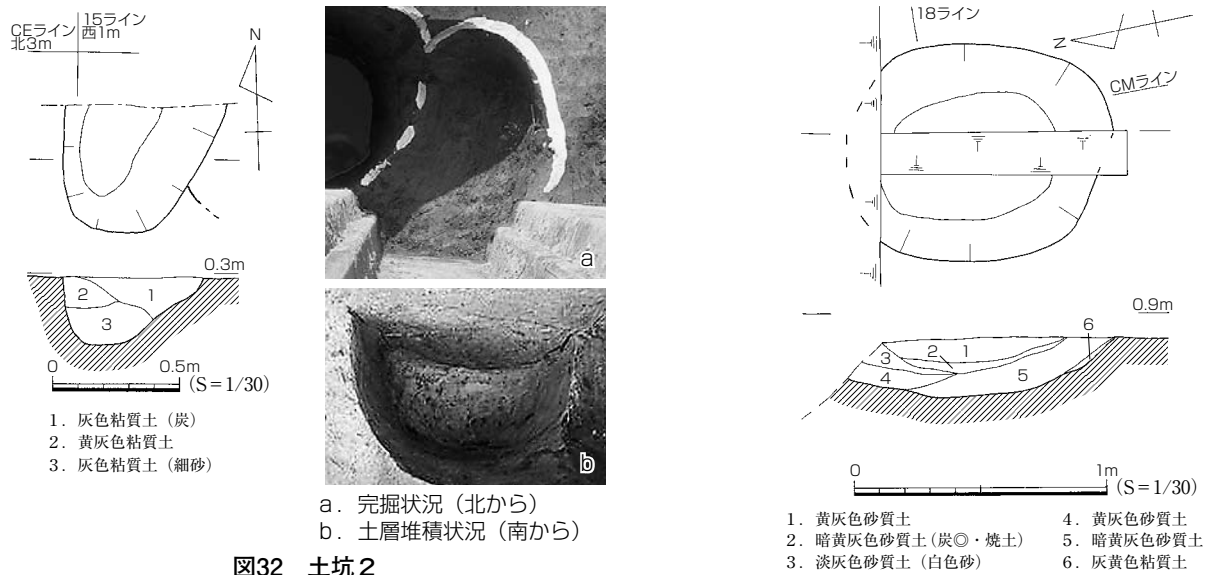


図32 土坑2

土坑2 (図32)

調査区北端、CD15区に位置する。井戸10の北西に重複し、北半は調査区外となる。検出面は4 b層で、標高0.3mを測る。現状では長径0.5m、短径0.6mの半楕円形を呈する。底面の標高は0.02mで、深さは0.27mを測る。断面形はU字状を呈する。埋土は3層に分けた。いずれも灰色を基調とする粘質土で、1層には炭化物、3層には砂が混入する。出土遺物は少なく、土師質土器碗2片・皿1片・鍋1片があり、いずれも小片である。

本遺構の時期は検出面から13世紀後半～15世紀後半の範疇で考えている。

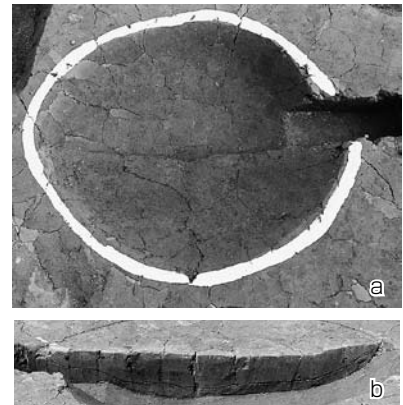


図33 土坑3

土坑3 (図33)

調査区の南端、CL・CM17・18区に位置する。検出面は4 b層上面で、標高0.85mを測る。平面形は長径1.1m、短径0.86mの楕円形を呈する。底面の標高0.57mで、深さは0.23mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は6層に分けた。1～5層は黄色系の砂質土であり、2層に炭化物・焼土、3層には白色砂が含まれる。出土遺物には土師質土器12片、鍋6片、須恵質碗1片があるが、いずれも小片である。

遺構の時期は検出面から13世紀後半～15世紀後半の範疇と考えられる。

土坑4 (図34①)

調査区北端、CD17・18区に位置する。検出面は4 b層上面であり、標高0.6mを測る。北端は調査区外にあたり、平面形は長径0.8m、短径0.5mの半円形が残るが、径0.8mの円形に復元される。底面の標高は0.34mで、深さ0.26mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は3層に分けた。1～3層は淡黒褐色～暗黒灰色を呈する粘土で、1・2層には黄褐色土ブロックを含む。出土遺物は見られなかった。本遺構の時期は検出面から13世紀後半～15世紀後半の範疇と考えられる。

土坑5 (図34②)

調査区北端、CD19区に位置する。4 b層上面で検出し、標高0.94mを測る。調査区の北西角にあたり、全形を

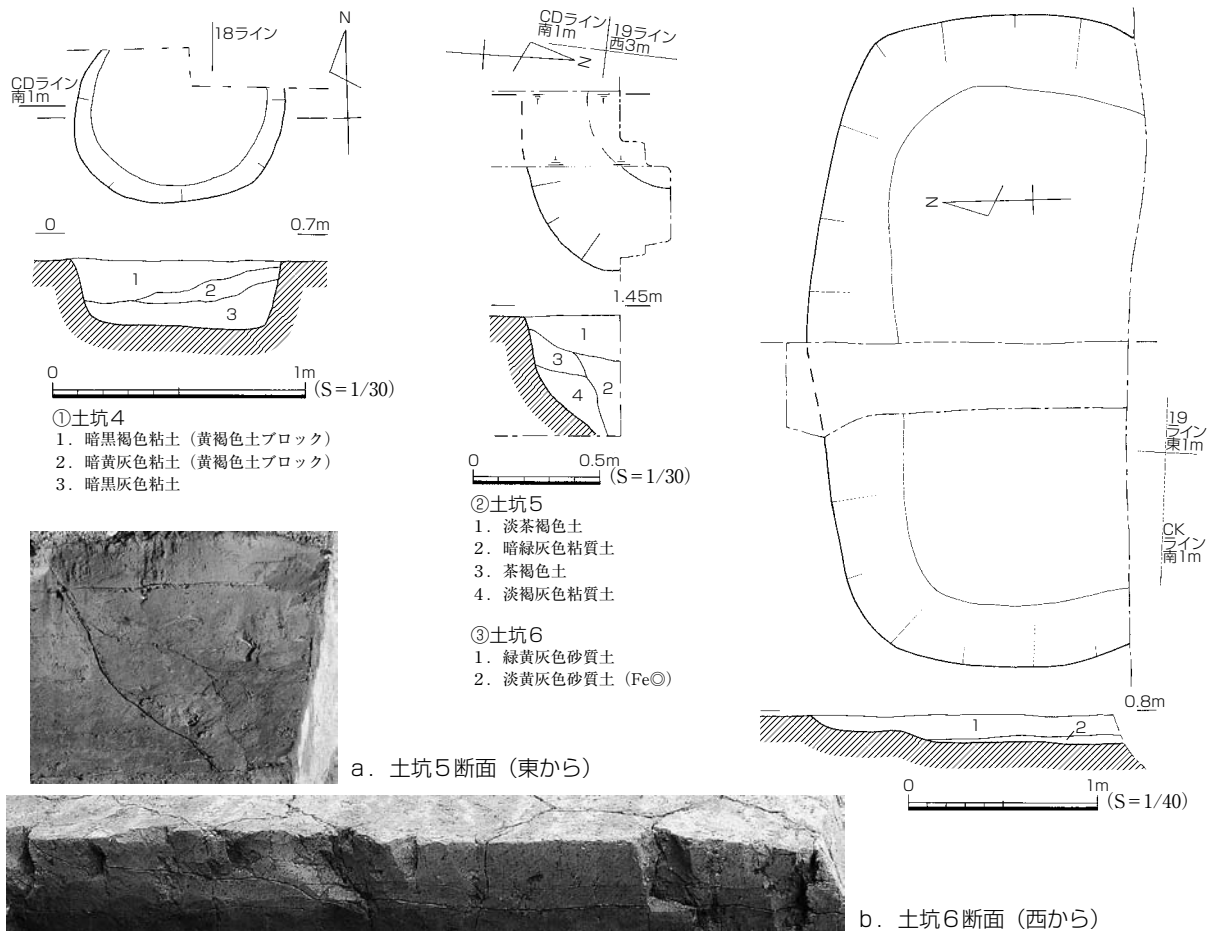


図34 土坑4～6

うかがうことはできない。長径0.7m、短径0.6mを検出した。深さは0.48mである。埋土は4層に分けた。出土遺物はみられなかった。本遺構の時期は検出面から13世紀後半～15世紀後半の範疇と考えられる。

土坑6 (図34③)

調査区の中央南寄り、CLCM18・19区に位置する。検出面は4 b層上面で、標高0.75mを測る。平面形は近世遺構により南半を破壊されるが、長径3.45m、短径1.5m以上の方形に近い形状が予想される。底面の標高は0.6mで、深さ0.15mを測る。断面形は非常に浅い皿状を呈している。埋土は黄灰色砂質土で、底面付近に鉄分が顕著に沈着している。

出土遺物は土師質土器椀・皿14片・竈4片、須恵質土器2片、亀山焼2片があるが、いずれも小片である。

本遺構の時期は検出面から13世紀後半～15世紀後半の範疇と考えられる。

c. 柱穴 (図35 表2 図版5)

4～7層上面で、中世に属する柱穴を137基検出した。柱穴の規模は径13～70cm、深さ5～60cmと幅があるが、径30cm、深さ20～40cmの幅に入るものが多い。出土遺物は、土師質土器の小片が中心主体

表2 各別ピット数

19	18	17	16	15	14	13	12	地区
4	18	13	3	0	0			CD
0	12	10	5	0				CE
							0	CF
3	4	3	0	2	1	0	0	CG
3	5	1	0	5	0	0	0	CH
4	1	1	0	3	0	0	0	CI
0	0	3	0	0	1	1	0	CJ
0	0	0	0	0	1	1	0	CK
								CL
0	0	2	13	14	0	0	0	CM

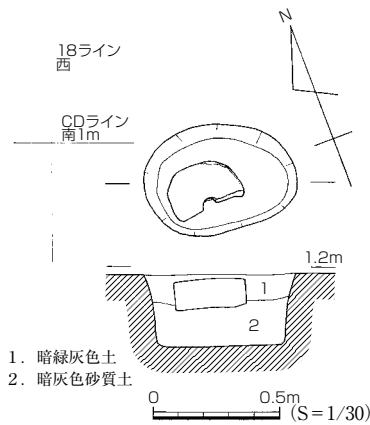
調査の記録

である。注目される遺物として石臼の出土がある。礎石として再利用した可能性が高い。

分布をみると、粗密があり調査区の北西部 (CD・CE16~18)・中央北西寄り (CG~CH17~19)、南端CM15・16区にまとまりが認められる (表2)。これらは井戸2・3・6・10の位置する北西部、井戸1・4・5・8・9の位置する中央部、井戸7の位置する南端部と、井戸の位置と関係する傾向が窺える。

検出層位では、4b層 (13世紀末~14世紀初) で検出したものが14基、5層 (12世紀) 検出が55基、6層 (11世紀) 検出が39基、7層 (古墳時代) 検出が13基であった。

柱穴群の時期については、出土遺物がほとんどなく、検出層位



ピット56 石臼出土状況 (北から)



番号	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S 1	石臼	(15.2)	(27.0)	(10.0)	(5260.0)	角礫凝灰岩	石臼上段の破片。中央に径3.5cmの方形孔

図35 ピット・出土遺物

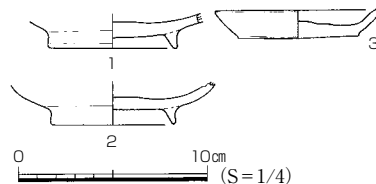
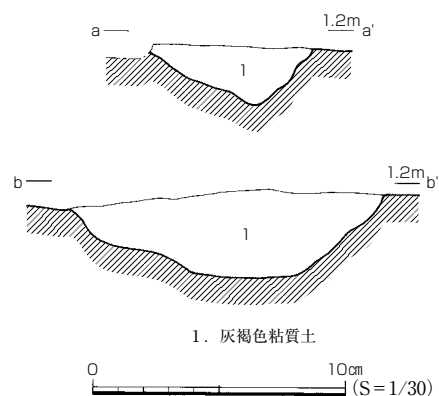
と他の遺構の内容を手がかりに11世紀後半~15世紀後半の範疇でとらえたい。

d. 溝

5層上面で7条 (溝8~14)、4b層上面で7条の溝を検出した。走行方向は、南北方向をとるもの (溝8・10・13~15・17) と、東西方向をとるもの (溝9・11・12) があり、区画溝を構成する。

溝8 (図36)

CG~CKライン間で検出した、15ライン付近を走行する溝である。5層上面で検出し、標高は1.1mを測る。本溝は真北方向に近くそのほかの南北方向の溝群 (溝10・13~15・17) とは異なる。溝14に切られているほか、南端は近世ため池状遺構に切られている。北端で底面標高0.9m、幅0.6m、南端では底面標高0.83mで、幅1.2mを測る。南へと傾斜が見られ、深さは0.2~0.32mである。断面形は皿状を呈する。



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調:内/外	胎土
1	土師質碗	-	6.8	-	ナデ、内:重ね焼痕、底部外:甑キリ後ナデ、高台完存	乳白灰	細砂
2	土師質碗	-	6.6	-	ナデ、内:重ね焼痕、底部外、甑キリ後ナデ、貼り付け高台部2/3残	乳灰白	細砂・石英
3	土師質皿	(8.8)	6.4×6.5	1.4~1.5	ナデ、内:押圧、底部外:甑キリ、2/3残	灰暗橙	細砂・角閃石

図36 溝8・出土遺物

出土遺物はコンテナ1/2箱があり、土師質土器碗47片、皿・杯の小片25片、須恵質土器碗3片、瓦器碗2片、瓦1片である。

本遺構の埋没時期は検出層位と遺物から12世紀～13世紀前半の範疇と考えられる。

溝9 (図37)

調査区の南端を走行する。5層上面で検出した溝で、標高0.95mを測る。東端は16ライン付近で近世溝に、西端は18ラインの西2mで近世土坑に切られているため不明である。主軸方向はE-5°-Nであり、構内座標のE-15°-Nとは異なる。方向の点からは溝8との関係を考えたい。

溝の幅は0.5m、底面の標高は0.71mで、深さは0.24mを測る。断面形は箱形を呈し、埋土は3層に分けた。いずれも灰褐色～茶褐色を呈する粘質土である。

出土遺物は少なく、ポリ袋(13号)1袋が出土した。土師質土器碗9片・皿片1・鍋1片・竈1片があるが、いずれも小片である。

本遺構の時期は、検出層位から12世紀～13世紀前半の範疇と考えられる。

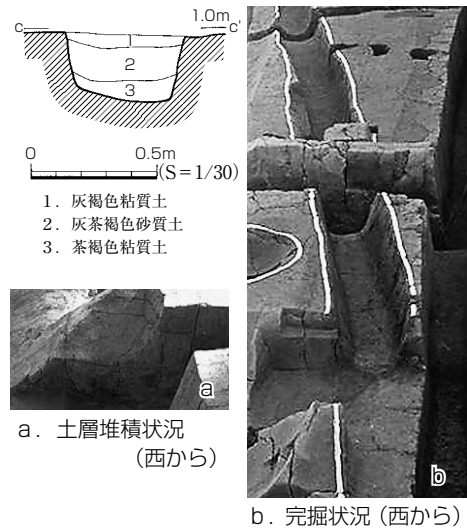


図37 溝9

溝10 (図38・39 図版2・3・5)

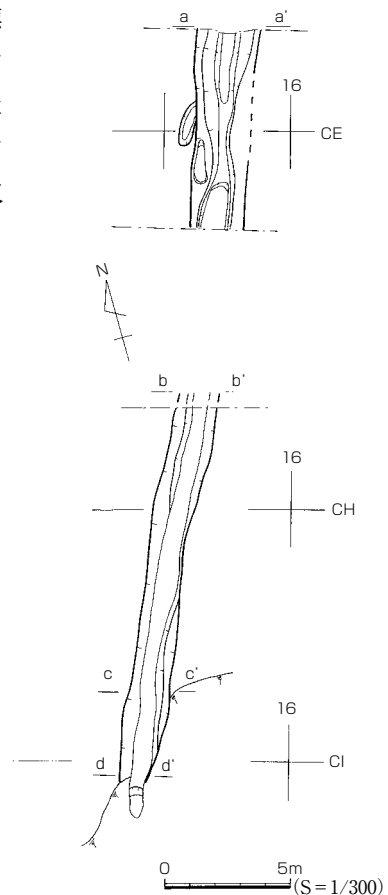
調査区中央を北が東へ15度振れた方向に走行する。5層上面で検出し、標高は1.05～1.1mを測る。ただし1区では遺構の重複や、後世の攪乱によって大きく壊れており標高0.6～0.7m以下で底付近のみを検出した。本溝の南端は近世のため池状遺構に、本溝の東側は溝15が重複する。南端の位置に関しては、ため池より南では確認されていないため、CJ-CKラインのあたりで収束するものと判断される。

溝の幅は2.4m前後で、底面の標高は北端で0.4m、南端では0.15mである。深さは0.7～0.9mを測る。

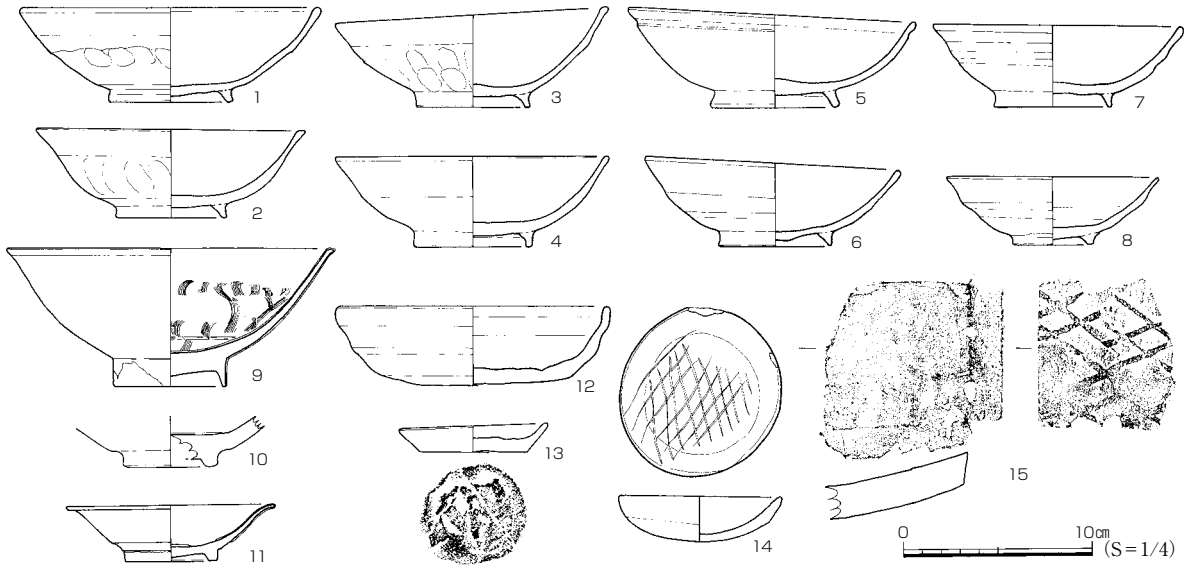
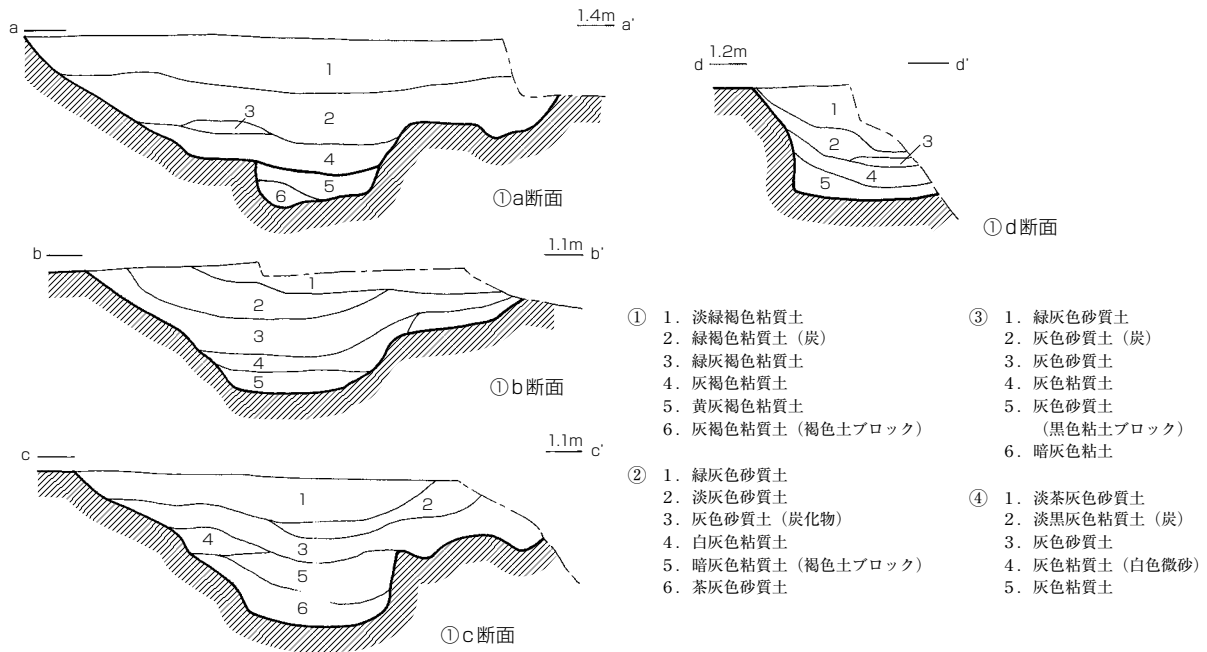
断面形は標高0.7～0.8m前後に傾斜変換点を挟み、下位は底面の幅が0.8～0.9mの逆台形状を呈し、水路部分を形成する。上位は西側は緩やかな傾斜となる皿状を呈しているが、東側は底面に凸凹が認められ、複数の流路痕跡のようになっている。底面は



図38 溝10



調査の記録



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質碗	16	6.6	5.0	ナデ、内：重ね焼痕、口縁部丸みを持つ、外：胴部押圧、口縁1/3残	乳白色	微砂
2	土師質碗	(14.5)	5.9~6.0	(4.4~5.3)	ナデ、外：押圧、口縁1/3残	乳褐色	微砂
3	土師質碗	15.2×15.4	6.7~7	4.5~5.3	ナデ、外：頸部に強い稜を持つ、底部：匏キリ後ナデ、ほぼ完存	乳淡橙	細砂
4	土師質碗	13.2	6.2	4.3	ナデ、内：重ね焼痕、底部外：匏キリ後ナデ、口縁部1/2残・高台部3/4残	乳橙	細砂・赤色砂粒
5	土師質碗	14×14.2	5.8	4.6~4.8	ナデ、外：押圧、口縁部薄くやや歪、高台部やや歪、内外煤附着、口縁3/4残	乳灰褐	微砂
6	土師質碗	14.6	6.2	4.8	内：ナデ、外：横ナデ、口縁部4/5残	乳(橙)淡	細砂
7	土師質碗	13.2~13.5	6.0	4~4.8	内：ナデ、重ね焼痕、外：横ナデ、底部外：匏キリ後ナデ、口縁部1/2残	乳淡橙	細砂
8	土師質碗	11.2	4.2	3.6	ナデ、内：一部擦痕シャープ、重ね焼痕、外：凹凸あり作り雑、高台部：畳付き幅不安定、煤附着	乳灰	細砂・赤色砂粒
9	青磁碗	(17.4)	6.0	(7.3)	内：櫛状の文様のち施袖、高台内と畳付き部露胎、口縁1/4残、高台部完存	灰、淡オリーブ	細砂
10	白磁碗	-	(5)	-	施袖、外：貫入、高台内及び畳付き部露胎、1/3残	灰、オリーブ	微砂
11	白磁皿	(11.1)	4.8	3.0	施袖、内：見込み部袖掻き取り、中央被熱により輪泡状、高台部：重ね焼痕、高台部完存	灰白、オリーブ	細砂
12	土師質杯	14.6	10.0	3.6~4.2	横ナデ、内：中央凹凸あり、底部外匏キリ・板目痕、ほぼ完存	乳淡橙	細砂
13	土師質小皿	(7.9)	5.6	(1.4)	ナデ、底部外匏キリ、底部ほぼ完存	乳黄灰	細砂
14	瓦器皿	8.6×9	4.9	2.4	ナデ、内：暗文、外：重ね焼痕、口縁部一部欠損、歪	暗灰褐	細砂
15	平瓦	長 10.0	幅 7.6	厚 1.8	内：格子目タタキ、外：布目、シャープ	暗黄灰	細砂

図39 溝10・出土遺物

北端ではCEライン付近の底が浅くなっており、以北では南→北へ、以南では北→南の傾斜を認められる。CEラインにはちょうど東西方向の溝（溝11・12）が作られることから、ここに境界ラインが窺える。さらにこの位置で南北0.8m、東西0.2m、深さ0.1mの落ちが検出され、仕切り板を設置した痕跡の可能性も考えられる。こうした底面の形状が観察されるのは1区のみであり、共同溝より南では平坦に近い底面を呈する。

埋土は5～6層に分けた。いずれも緑灰～灰褐色を基調とする。北壁断面2層（断面①）に灰色粘質土が堆積し、特に炭化物が顕著に含まれる特徴が見られる。この層は断面②の3層、断面③④の2層と対応する。

出土遺物は土師質土器椀33片・皿156片・杯29片・杯か皿片30片・鍋99片・竈19片、須恵質土器椀7片、備前焼小片1、東播系1片、瓦質土器2片、瓦器10片、青磁・白磁小片9片があり、全体でコンテナ（27㍻）6箱である。

本遺構の埋没時期は12世紀末～13世紀初めと考えられる。

溝11（図40）

調査区北部、CEライン南1mをほぼ東西方向に走行する。東端は溝10付近で確認できなくなる。調査区東端で



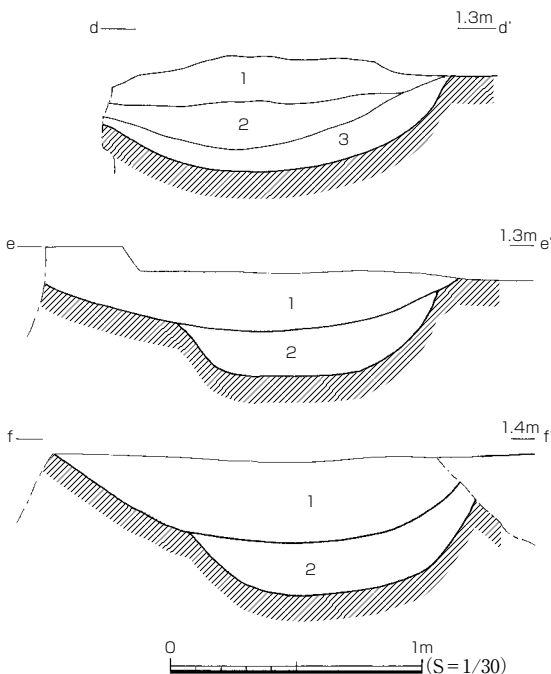
a. d断面（東から）



b. e断面（東から）

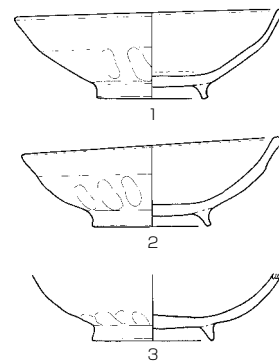


c. f断面（東から）



d断面
1. 明緑灰白色砂質土
2. 明灰茶褐色砂質土
3. 暗灰色粘質土

e・f断面
1. 灰茶褐色砂質土
2. 暗灰色粘質土



0 10cm (S=1/4)

番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質椀	14.1	5.8	4.5	内：丁寧なナデ、外：ナデ、押圧、内外煤付着、口縁部1/2残、高台部完存	暗橙淡	細砂・赤色砂粒、角閃石
2	土師質椀	(13.8)	6×6.2	3.9～4.7	ナデ、内：凹凸有り、外：押圧、内外煤付着、高台部ほぼ完存	暗橙淡	細砂・角閃石
3	土師質椀	-	6.4	-	ナデ、底部外：籠キリ後ナデ、貼り付け高台：やや雑、完存	淡乳橙	細砂
T2	土錘	長*5.2	厚0.7～1.2	重量(6.7)	ナデ平滑、下端欠失	淡橙乳	細砂

図40 溝11・出土遺物

も確認されず、途中で収束する可能性がある。5層上面で検出し、標高は1.3~1.34mを測る。幅1.8m、底面の標高は0.8m、深さは0.5m前後である。断面形は、d断面ではU字形を呈するが、東に行くにつれ皿状を呈する。

出土遺物はコンテナ(27^号)1箱が出土し、土師質土器椀442片・皿84片・杯98片・瓦器椀4片、鍋137片・竈12片・台付き土器片3片、須恵質土器小片22片、磁器6片、瓦1片、土錘1点がある。

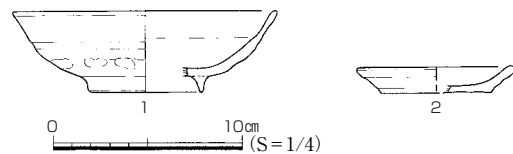
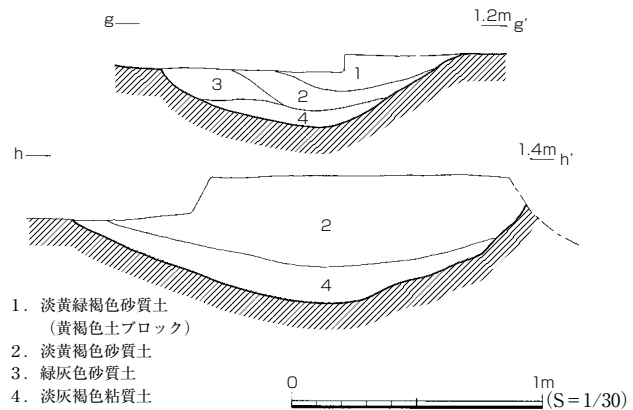
本遺構の埋没時期は検出面と出土遺物から12世紀末~13世紀初めと考えられる。

溝12 (図41)

調査区北部を東西方向に走行する溝である。5層上面で検出した。検出標高は1.1~1.32mである。東端は溝10付近で確認できなくなり、幅1.1m、深さ0.3mが残る。h断面では残りが良く幅1.8m、底面の標高0.82mを測り、深さは0.5mである。溝11の北側を一部で切っている。

断面形は皿状を呈する。埋土は4層に分けた。1層は黄褐色土ブロックを含む。出土遺物は土師質土器椀片48片・皿16片があり、コンテナ1/2箱の出土量である。

本遺構は出土遺物がなく、土層からは12世紀~13世紀前半と考えられ、溝11との切り合い関係から考えると13世紀前半の可能性が高い。



番号	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	特徴	色調:内/外	胎土
1	土師質椀	(14)	(6.1)	(4.3)	内:ナデ、口縁部強いナデ、外:横ナデ・押圧、1/3残	乳灰白	微砂
2	土師質小皿	(8.4)	(5.8)	1.4	内:ナデ、やや磨減、外:横ナデ、底部外:艶キリ後ナデ、1/2残	乳橙淡	微砂

図41 溝12・出土遺物

溝13 (図42)

検出面は5層上面で、標高1.05mである。底面の標高は0.91mを測り、深さは0.15m、幅0.6mである。調査区中央を南北に近い方向に走行する。主軸の方向は構内座標の南北ラインより北が東へ約13度傾くものである。CGライン付近から、CJラインで近世のため池状遺構に切られるまでの間で検出した。調査区北側では検出できておらず北端は確認できていない。

断面形は皿状を呈し、埋土は灰褐色粘質土層である。出土遺物はなかった。

本溝の時期は土層からの判断と13世紀後半の井戸5に切られていることから12世紀~13世紀前半の範疇でとらえられる。

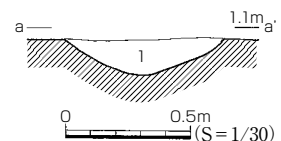


図42 溝13

溝14 (図43)

検出面は5層上面で、標高1.22mを測る。底面の標高は北で1.04m、南で0.93mを測る。深さは0.12~0.26mである。調査区中央を走行し、主軸方向は構内座標の南北ラインより北が東へ約13度傾くものである。CGライン付近から、CJラインで近世ため池状遺構に切られるまでの間で、長さ18m、最大幅1.6mを検出した。溝13と主軸方向が揃っており、溝13の東2.3mの位置をほぼ並行して走行する。

断面形は皿状を呈する。埋土は残りの良い南側では2層に分けた。上層は灰褐色の粘質土、下層は暗灰色粘質

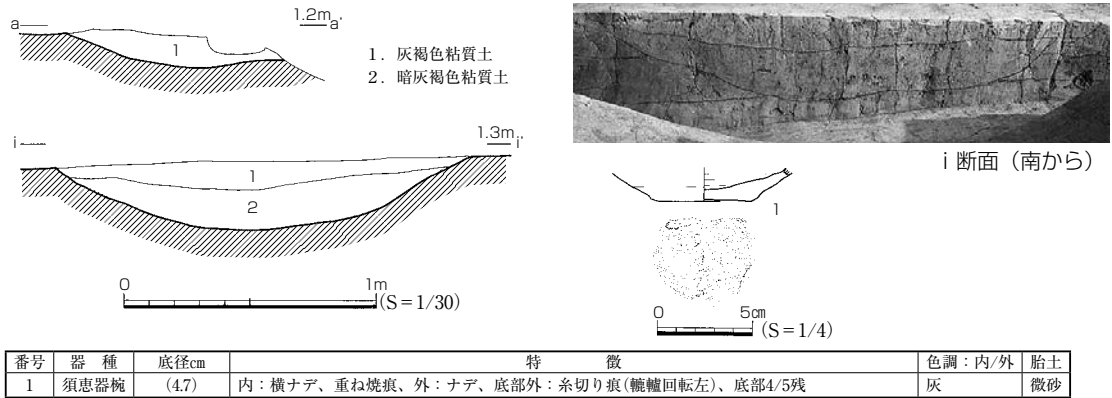


図43 溝14・出土遺物

土層が堆積し、いずれも鉄分が顕著である。

遺物はコンテナ1/2箱が出土し、土師質土器碗の小片29・杯か皿の小片53・鍋32片、須恵質土器杯2片・甕7片がある。このうち須恵質土器杯の底部を掲載した。

本遺構の埋没時期は検出面から12世紀～13世紀前半と考えられる。

溝15 (図44～50 図版2・5・6)

4 b 層の検出であり、標高は北端で1.3m、南端では0.95mである。

調査区の中央を走行する溝で、主軸方向は北端が東へ約14度傾いている。CDライン付近では15ラインに溝の東肩が沿う。途中近世のため池遺構に切られるが、CLライン南1mで、東西方向の溝16と逆T字状に接続しており、南北方向には長さ25mを検出した。

溝の幅は約5mを測り、大型の溝である。底面の標高は北端で-0.3m、南端で-0.25mを測る。深さは最も残りの良い北端で1.6mを測る。

断面形は北端では標高0.2m付近に傾斜変換点を持ち、これより上位はやや緩やかな傾斜で開く。それより下位は箱形に近い逆台形を呈し水路部分を形成する。底面の形は南に行くにつれ次第に皿状へと変化が見られ、CLライン(断面③)では緩やかな傾斜の皿状を呈する。

埋土は8～16層に分けているが、大きくは標高0.2mを境に上層群(断面①1～13層、②1～7層、③1～5層)と下層群に二分できる。上層群は灰褐色を基調とし、②断面では1・3層に砂やブロックを部分的に含む。下層群は灰色粘土を基調とし、最下層には植物質や炭化物が目立つ。上層群の下面では断面①では底面の東側(13層)と西側(12層)に灰褐色粘質土層が堆積し、くぼみ状を呈している。溝の両壁に板などを立てていた痕跡の可能性も考えられる。こうした形状がみられるのは底面が箱形を呈するCDラインからCHライン付近までである。

また北端断面①では東側に溝15B(18～22層)が確認される。灰褐色粘質土を主体とする埋土で、溝15に大半



図44 溝15完掘状況(北から)

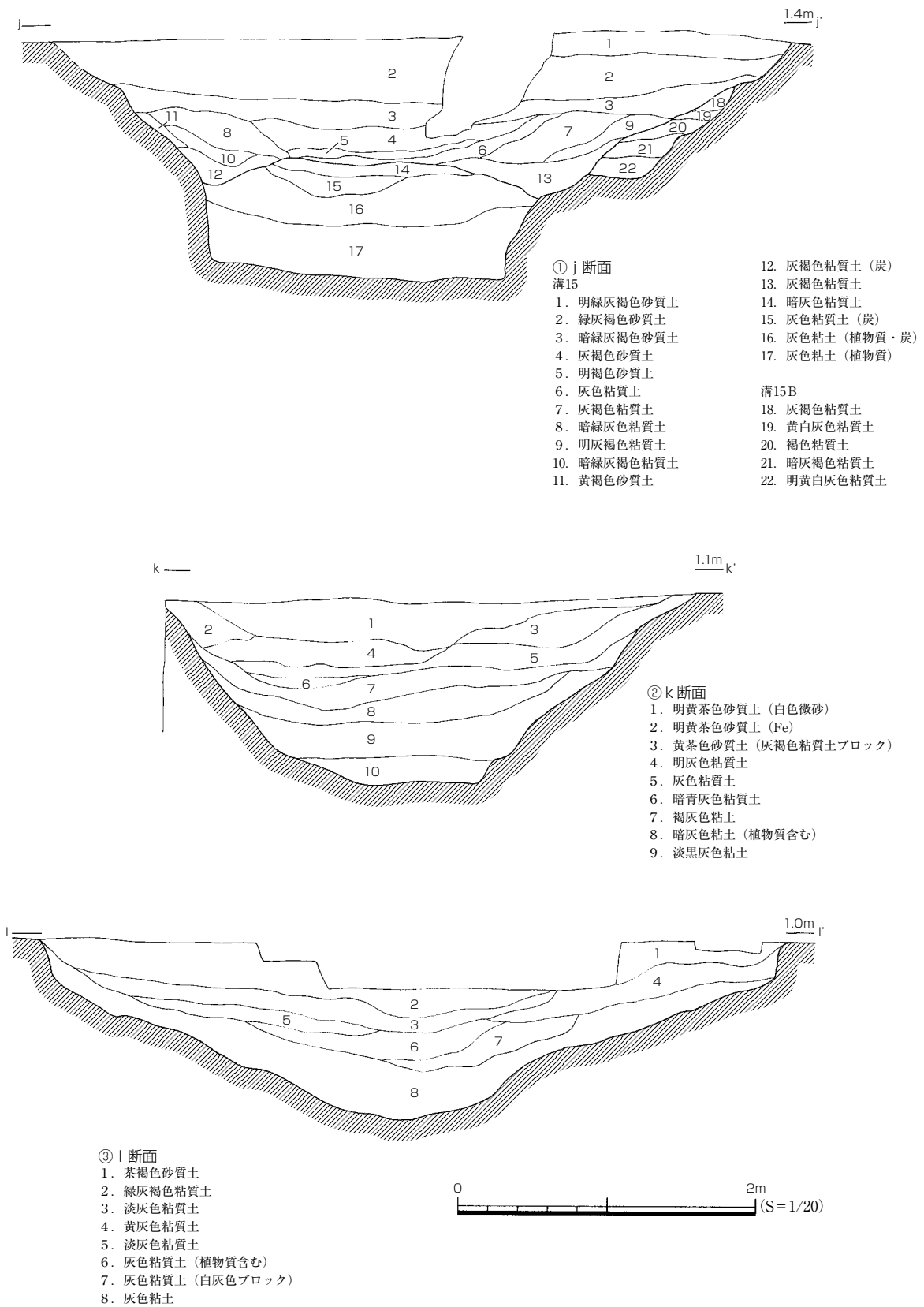


図45 溝15

を切られる。確認できた溝の幅は約1.0m、底面の標高0.35mを測る。調査区北端から長さ3.5mを検出したが、南については溝15の重複により確認できなかった。

出土遺物は非常に多く、コンテナ6箱が出土した。その内訳は土師質土器碗406片・杯116片・皿42片・杯か皿58片・台付き皿7片・鍋232片・竈2片、その他土師質土器片259片、瓦器皿1点、須恵質の土器では備前焼83片・亀山焼64片・東播系とみられるもの28片がある。その他、瓦質土器15片、瓦18片、陶磁器25片など多種におよぶ。その他に木製品30点が出土した(図47～50)。

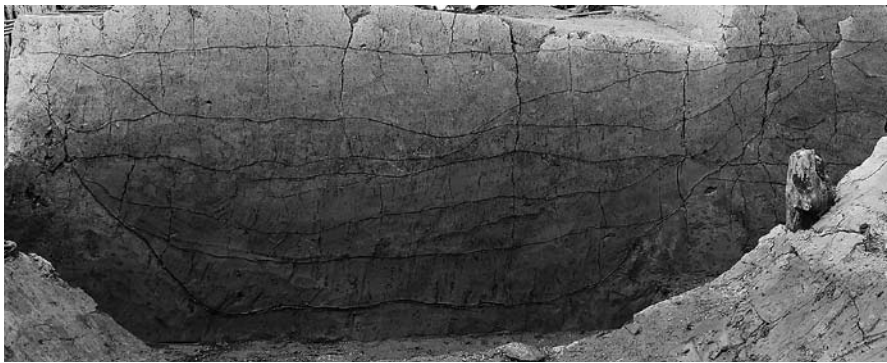
土師質土器碗は器高が3.5cm以下と低いものが主体で、高台のつくりも低平である。図47-12は高台がなくなった段階の碗である。小皿は規格の揃ったものが多く認められ、大半が下層群から出土した。図48上左のように、重なった状態で出土したものもある。

木製品は板材・角材とみられる加工品が多い。図50-W19は上端に切り込みがある板状の材である。

本遺構は13世紀末～14世紀初頭に埋没したものと考えられる。



j 断面 (南から)



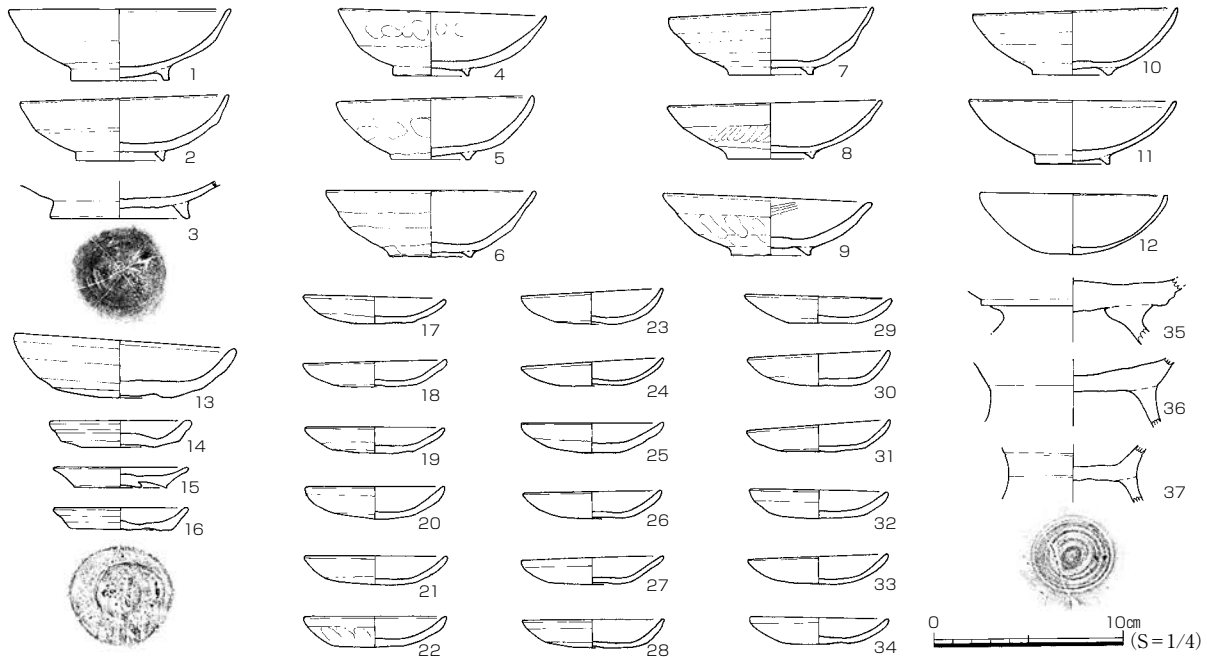
k 断面 (南から)



l 断面 (南から)

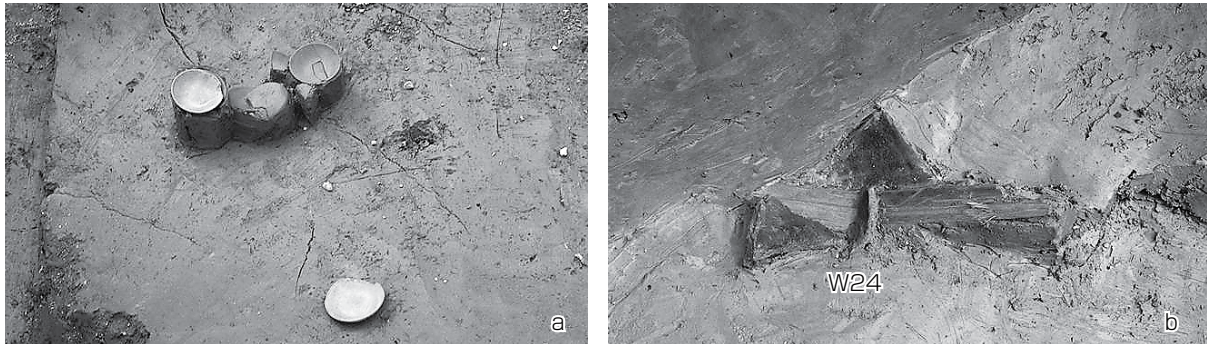
図46 溝15土層堆積状況

調査の記録



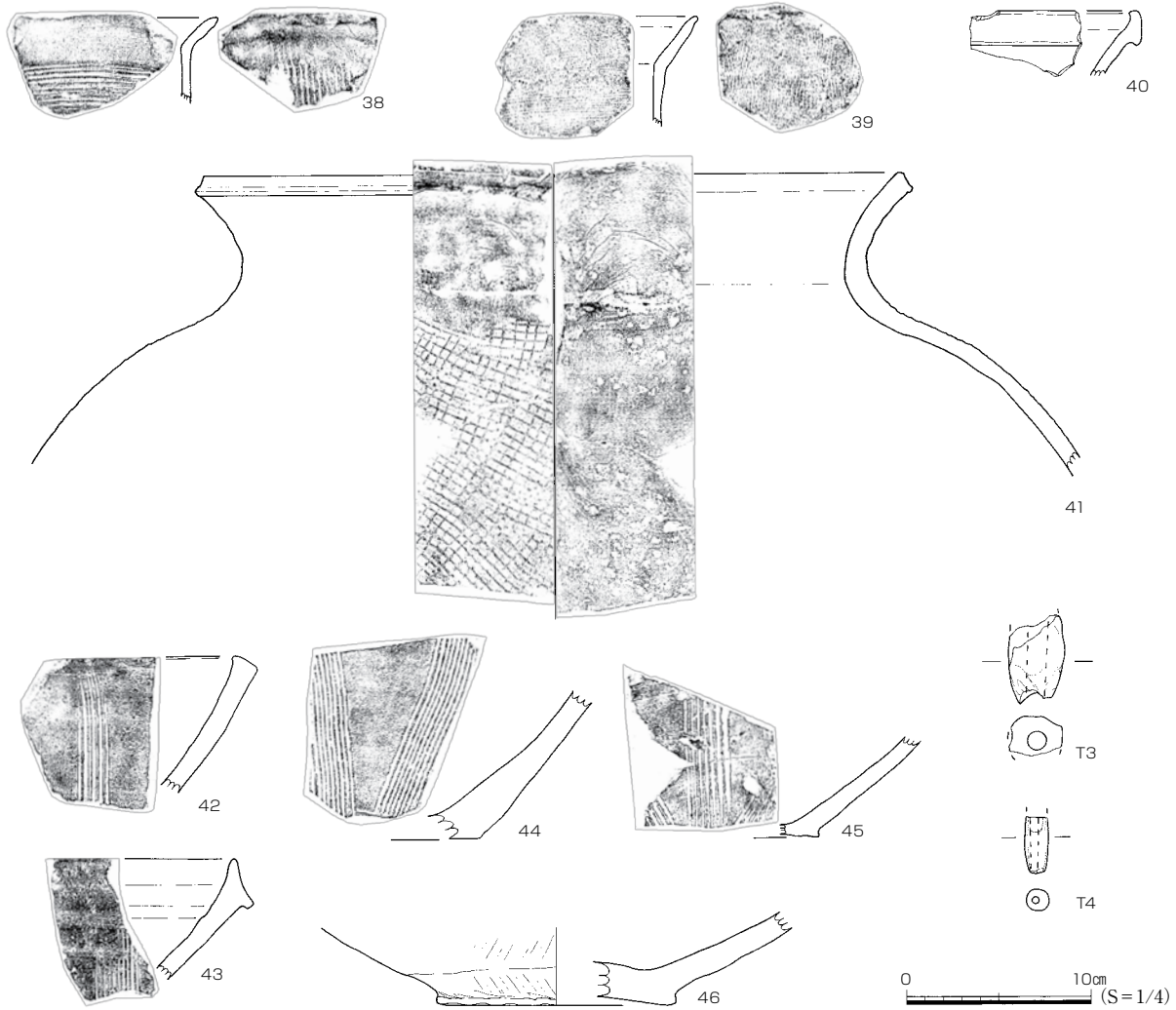
番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質碗	(11.8)	5.2	(3.75)	内：丁寧なナデ、重ね焼痕、一部煤、外：押圧後ナデ、高台：ナデ、高台完存	乳灰	細砂
2	土師質碗	11.1	4.7	3.1~3.5	内：丁寧なナデ、重ね焼痕、外：押圧後ナデ、高台：ナデ、小さく低い、口縁3/4残	乳褐	細砂
3	土師質碗	-	4.4	-	内：丁寧なナデ、外：篋切り後、篋記号※、貼り付け高台：ナデ、高台2/3残	乳白	微砂
4	土師質碗	(11.0)	(3.8×4.2)	(3.1~3.5)	内：丁寧なナデ、外：押圧後ナデ、やや疎、貼り付け高台：ナデ、低い、歪み不均等、口縁1/4・高台部3/5残	乳淡褐	細砂
5	土師質碗	10.4	4.2	3.0~3.4	内：丁寧なナデ、重ね焼痕、外：押圧後ナデ、煤、高台：ナデ、押圧。被蒸顯著。口縁5/6残	乳灰褐	微砂
6	土師質碗	(11.2)	4.4	(3.5)	内：丁寧なナデ、煤、外：押圧後ナデ、煤、高台：ナデ、押圧。口縁1/3残、高台完存	乳淡褐	微砂
7	土師質碗	10.9	4.5	3.0~3.5	内：ナデ、重ね焼痕、外：押圧後ナデ、貼り付け高台：ナデ、口縁3/4残	乳灰色	微砂
8	土師質碗	11.4	4.5×4.7	2.9	内：丁寧なナデ、外：工具抑え後ナデ、貼り付け高台：ナデ、低い、口縁3/5残	淡灰	細砂
9	土師質碗	11.1	4.3×4.6	2.7~3.3	内：丁寧なナデ、外：押圧後ナデ、貼り付け高台：ナデ、4/5残	乳橙	微砂
10	土師質碗	11.0	4.3	3.4	内：丁寧なナデ、外：押圧後丁寧なナデ、回転篋露切り後押圧、貼り付け高台：ナデ、口縁1/2残・高台部7/8残	乳暗灰黄褐	細砂
11	土師質碗	(11.0)	4×4.3	(3.3~3.4)	内：丁寧なナデ、外：ナデ、やや疎、篋切り後ナデ、貼り付け高台：ナデ。口縁1/3残・高台完存	乳淡褐	微砂
12	土師質碗	(8.0)	-	(3.2)	内：丁寧なナデ、重ね焼痕、外：押圧後ナデ、篋切り後ナデ、底部1/2残	乳淡褐	微砂
13	土師質杯	(11.8)	7.2	(2.6~3.4)	内：ナデ、外：横ナデ、底部外：篋キリ後板状工具痕、口縁部1/5・底部ほぼ完存	乳褐	細砂
14	土師質皿	(7.6)	(1.4)	(2.0)	内：横ナデ、中心部ナデ、外：横ナデ、底部外：篋キリ後板目痕、一部変色、口縁3/4・高台部1/2残	乳褐	細砂
15	土師質皿	7.1	4.9	1.1	内：ナデ、外：横ナデ、底部外：篋キリ、口縁部・底部1/2残	乳褐	微砂
16	土師質皿	7.0×7.2	5.5	1.1~1.25	ナデ、口縁部横ナデ、底部外：篋キリ後板目痕、底部完存	乳橙淡	微砂
17	土師質皿	7.6	4.2	1.2~1.6	内：丁寧なナデ、外：ナデ、底部外：篋キリ後ナデ、口縁部2/3残・底部4/3残	乳橙淡褐	微砂
18	土師質皿	7.7	4.3	1.2~1.45	内：ナデ、きれいな仕上がり、外：やや雑なナデ、口縁部一部欠損	淡橙	細砂
19	土師質皿	7.4	4.3	1.4	ナデ、内：きれいな仕上がり、重ね焼変色有り、外：一部粘土接合痕、内外とも煤、ほぼ完存	橙灰	細砂
20	土師質皿	7.4	4.3	1.8	ナデ、内：きれいな仕上がり、外：やや凹凸有り、変色有り、口縁部一部欠損	橙褐	微砂
21	土師質皿	7.6	4.0	1.5~1.6	ナデ、内：きれいな仕上がり、外：一部工具痕、沈線状、口縁部一部欠損	暗橙褐	微砂
22	土師質皿	7.4×7.6	3.9	1.7	ナデ、内：きれいな仕上がり、外：押圧、底部外工具痕、底部完存	赤褐	微砂
23	土師質皿	7.5	4.5	1.4×2	ナデ、内：きれいな仕上がり、変色有り、完存	橙褐	微砂
24	土師質皿	7.6	4.1	1~1.5	ナデ、内：きれいな仕上がり、底部外：篋キリ後ナデ、口縁部3/4残	橙褐	微砂
25	土師質皿	(7.6)	4.3	(1.6)	ナデ、内：きれいな仕上がり、底部外：篋キリ後ナデ、重ね焼変色有り、種子痕?、口縁部2/5残・底部ほぼ完存	橙褐	微砂
26	土師質皿	7.4	3.8	1.4~1.5	ナデ、内：きれいな仕上がり、底部外：篋キリ後ナデ・押圧、口縁部2/3残・底部完存	橙褐	微砂
27	土師質皿	7.6	4.4	1.3~1.5	ナデ、内：きれいな仕上がり、底部外：篋キリ後ナデ、口縁部3/5残・底部2/3残	橙黄褐	微砂・雲母
28	土師質皿	7.5	5.3	1.4	ナデ、内：きれいな仕上がり、底部外：篋キリ後ナデ、口縁部4/5残・底部完存	橙褐	微砂
29	土師質皿	7.8	3.6	1.3~1.6	ナデ、内：きれいな仕上がり、外：工具痕有り、底部外：篋キリ後ナデ、口縁部2/3残・底部3/4残	乳褐	微砂
30	土師質皿	7.6	5.5	1.4~1.9	ナデ、内：きれいな仕上がり、底部外：篋キリ後ナデ、ほぼ完存	乳橙褐	微砂
31	土師質皿	7.6	4.7	1.1~1.7	ナデ、内：きれいな仕上がり、底部外：篋キリ後ナデ、2/3残	橙褐	微砂
32	土師質皿	7.4	5.2	1.4~1.6	ナデ、内：きれいな仕上がり、底部外：篋キリ後ナデ、口縁部2/3残・底部完存	乳橙淡褐	微砂
33	土師質皿	7.5	4.9	1.3~1.6	ナデ、内：きれいな仕上がり、外：黒斑、底部外：篋キリ後ナデ、口縁部1/2残・底部2/3残	暗橙灰	微砂
34	土師質皿	7.4	3.1	1.3~1.5	ナデ、内：きれいな仕上がり、底部外：篋キリ後ナデ、口縁部5/6残、底部一部欠損、黒斑	橙灰褐	微砂
35	土師質高台付杯	-	-	-	内：ナデ、外：横ナデ、底部外篋キリ後ナデ、口縁・脚部欠失	淡橙褐	細砂
36	土師質高台付杯	-	-	-	内：横ナデ、外：ナデ、底部外篋キリ後ナデ、口縁・脚部欠失	淡橙黄	微砂
37	土師質高台付杯	-	-	-	ナデ、内：凹凸有り、底部外：篋キリ後ナデ、口縁・脚部欠失	乳淡橙	微砂

図47 溝15出土遺物1



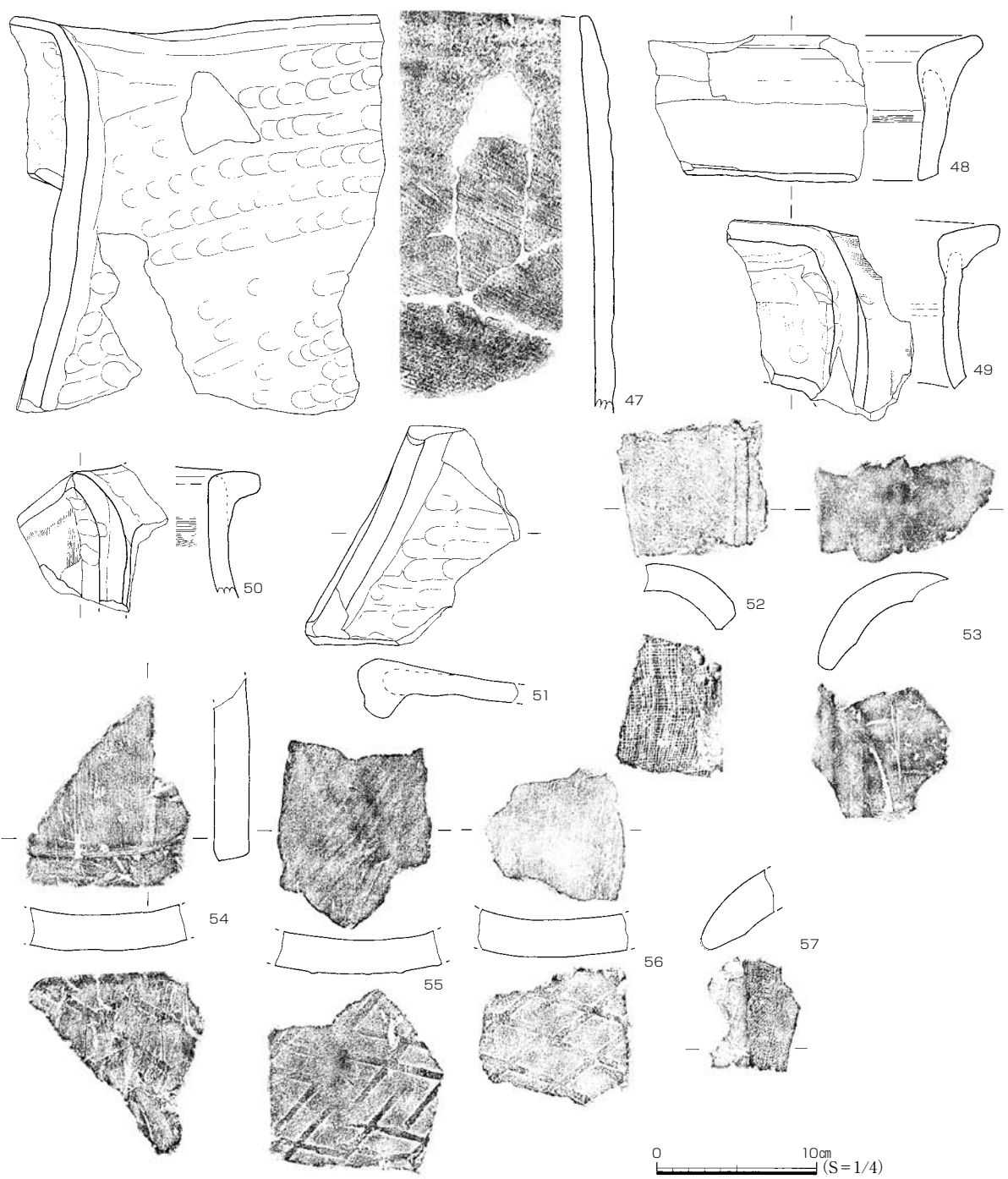
a. 土師質皿出土状況

b. 木製品出土状況



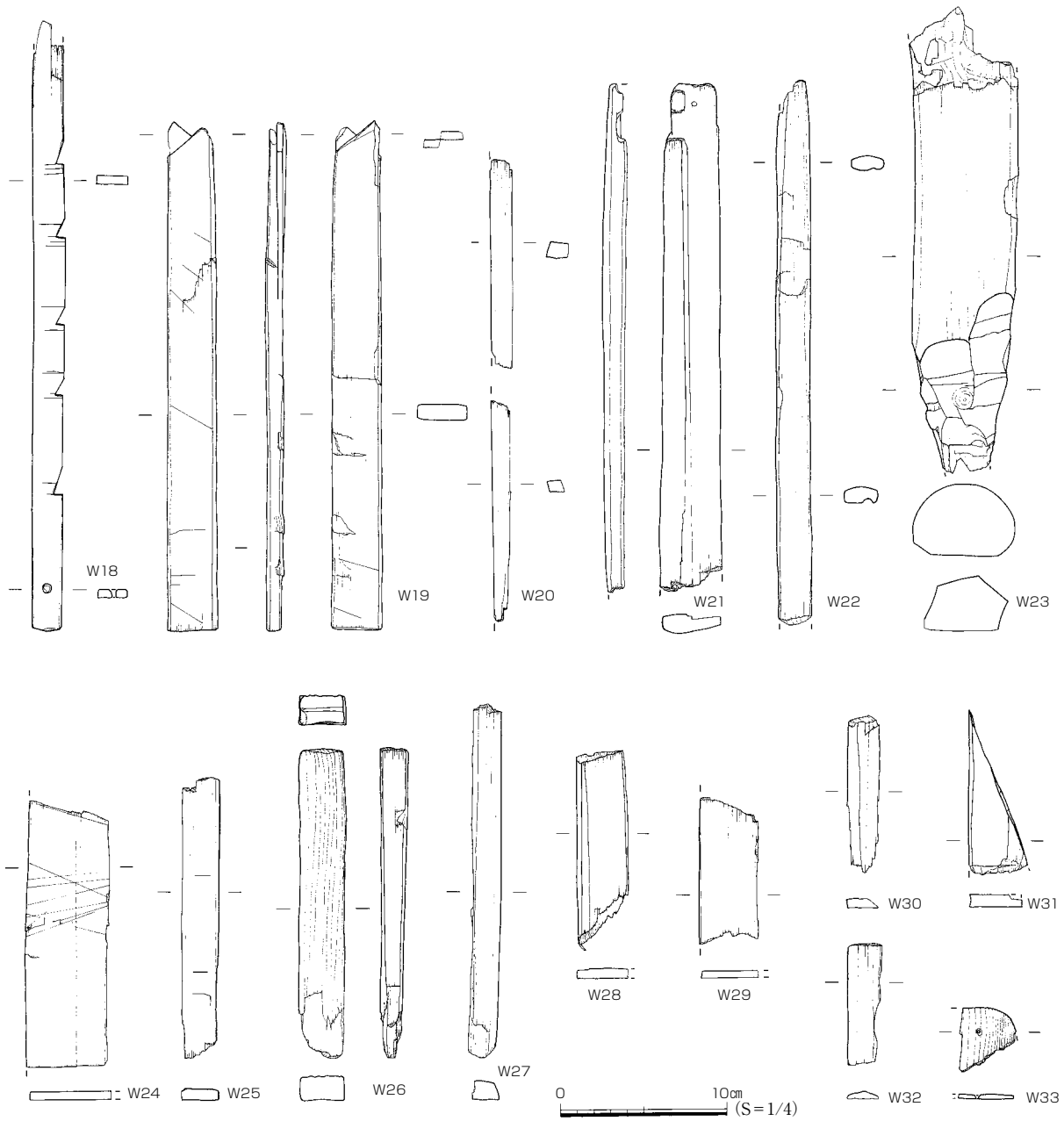
番号	器種	口径cm	底径cm	特徴	色調：内/外	胎土	
38	土師質鍋	-	-	内：口縁横ナデ、体部横ハケメ、外：口縁横ナデ、体部タテハケメ、口縁部1/8残	乳橙褐	細砂	
39	土師質鍋	-	-	口縁横ナデ、内：体部横ハケメ、外：体部押圧・タテハケメ、煤、口縁部1/10残	乳褐/黒褐	細砂	
40	土師質鍋	-	-	内外：ナデ	黒灰/乳白	細砂	
41	須恵質甕	(38.0)	-	内：ナデ、体部タテハケメ、外：口縁横ナデ・押圧、体部格子目タタキ、口縁部1/5残	灰	粗砂	
42	備前焼擂鉢	-	-	横ナデ、内：卸目(5条一組)	暗赤灰	細砂	
43	備前焼擂鉢	-	-	横ナデ、内：卸目(9条一組、二単位残)、外：重ね焼痕	茶褐	細砂	
44	備前焼擂鉢	-	-	横ナデ、内：卸目(9条一組)	灰	細砂	
45	備前焼擂鉢	-	-	横ナデ、内：卸目(7条一組)、底部外：凹凸有り、底部1/10残	赤暗灰	細砂	
46	備前焼擂鉢	-	(13)	内：ナデ、残部に卸目を認めず、粗く粘土片が散らばり凹凸有り、自然袖、外：ハケ、底部1/4残	暗灰	細砂	
番号	器種	長さcm	幅cm	重量g	特徴	色調	胎土
T3	土錘	(3.1)	1.15×1.15	(5.2)	ナデ、両端欠失、孔径0.4cm	乳淡橙	微砂
T4	土錘	(4.8)	3.5×2.1	(2.41)	ナデ、指押圧、上端欠失、孔径1cm	乳橙褐	細砂(赤色砂含)

図48 溝15出土遺物2



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
47	土師質竈	-	-	-	ナデ、内：押圧・横ナメ方向ハケメ、煤、外：指押圧顕著・煤付着、火口右部残	灰橙褐	粗砂・白色砂粒多
48	土師質竈	-	-	-	内：横ナデ・横方向ハケメ、煤、外：指押圧・ナデ、煤、火口上部残	乳橙褐	粗砂・金雲母多
49	土師質竈	-	-	-	内：横ナデ、外：ナデ・ハケメ・指押圧、火口右上部残	暗灰褐	粗砂
50	土師質竈	-	-	-	内：横ナデ・横ハケメ、煤、外：ナデ・ハケメ・指押圧、一部煤、火口右上部残	暗橙灰	細砂・金雲母
51	土師質竈	-	-	-	内：ナデ、煤、外：ナデ、指押圧顕著、火口のみ煤、火口右下部残	乳橙灰	粗砂・金雲母多
番号	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	特徴	色調：内/外	胎土
52	須恵質瓦	8	5.7	1.8	内：布目、外：ナデ、側縁は切り込み	灰	細砂
53	須恵質瓦	8.2	8.2	1.9	ナデ、内：工具痕、外：タテに面を持つ	灰褐	微砂
54	須恵質瓦	11.4	10.1	2.2	内：格子目タタキ、外：布目、	淡灰	細砂
55	須恵質瓦	11	11.0	2.2	内：格子目タタキ、外：布目、ナデ	灰褐	微砂
56	須恵質瓦	9.1	8.0	2.3	内：格子目タタキ、外：布目、工具痕、煤	乳灰褐	細砂
57	須恵質瓦	8	5.8	2.6	内：布目、ナデ、外：ナデ	暗灰褐	微砂

図49 溝15出土遺物3



番号	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	樹種	特徴
W18	加工板	36.6	1.8~1.9	0.5	スギ	切り込み5ヶ所残存、刃物痕跡有り、穿孔あり
W19	加工板	36.0	3~3.1	0.9~1.0	スギ	互い違いに切り出し。割り裂き状裂痕あり。緊結具痕跡か？
W20	部材	12.5・13.2	0.7~1.4	0.6~1.0	スギ	接合しない同一破片。断面方形に加工
W21	部材	30.5	2.7~3.8	1.2	スギ	溝状の加工あり、図上部に未貫通孔1ヶ所有り
W22	板材	32.8	2.0	1~0.8	スギ	断面形が丸みのある長方形状に加工
W23	杭	28.0	6.3	4.3	アカマツ	丸木どり、先端を面的にカット
W24	板材	16.0	4.8	0.5	スギ	薄い板状。刃物痕跡有り
W25	部材	16.9	2.25	0.7	スギ	刃物痕跡有り
W26	板材	18.6	2.7	1.7	ヒノキ	断面長方形状、小口に段あり
W27	板材	21.3	1.6	1.15	スギ	断面長方形状
W28	部材	12.0	3.1	0.6	スギ	榫目、板状
W29	板材	8.8	3.5	0.4	スギ	榫目、板状
W30	板材	9.6	1.9	0.6	スギ	榫目、板状
W31	板材	9.9	3.5~0.1	0.8	スギ	複数カット面有り
W32	板材	7.4	2.1	0.5	ヒノキ	榫目
W33	板材	3.8	3.3	0.2~0.25	スギ	榫目、孔有り、曲げ物底板の一部か

図50 溝15出土遺物4

溝16 (図51~53 図版2・3・6)

調査区南部、CLライン南を東西方向に走行する溝である。

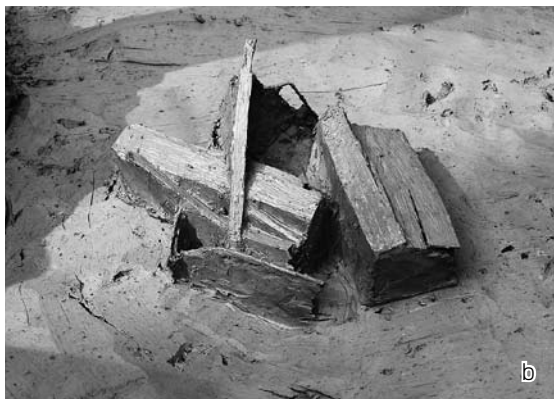
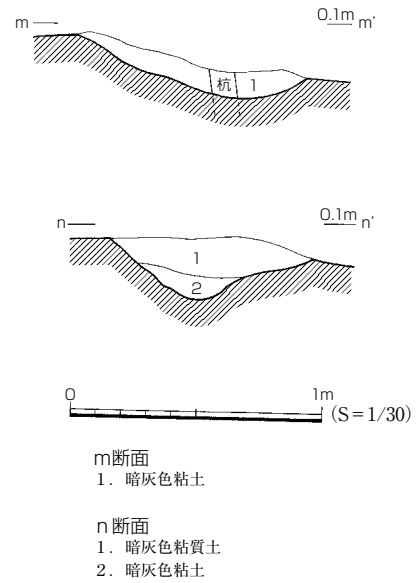
主軸方向は南へ12度傾く。近代溝が重複するため、標高0.1~0.2mより下位で、底面付近を検出したのみである。底面の標高は-0.18~-0.05mを測り、検出面からの深さは残りの良いところで0.23m、幅3.6mである。本溝は前述の溝15と、16ライン付近で逆T字状に接続している。底面の標高では、溝15が接続部付近で-0.14m、本溝では-0.2mと本溝の底面が若干深くなっている。本溝の上位は大きく破壊を受けており、本来の幅の復元は難しいが、溝15と同様の幅5m程度に想定される。

断面形は皿状を呈しており、埋土は暗灰色粘質土を主体とした1~2層を確認した。

出土遺物はコンテナ(約27^{リットル})で4箱分が出土しており、土師質土器碗83片・皿68片・杯32片・鍋93片・竈30片、須恵質土器碗9片のほか、須恵質土器では備前焼播り鉢片16片、東播系の播り鉢片10片、亀山焼11片がみられる。また瓦質土器5片、瓦器5片、瓦6片、青磁・白磁碗4片および木製品多数がある。

木製品のうち、W34~36は薄い板材で、組み合わせて平面長方形の箱状の製品となるものとみられる(図51b)。

本溝は13世紀末~14世紀初頭に埋まったものと考えられる。



a. 完掘状況(西から)
b. 木製品(図53-W34~36)出土状況(東から)
c. 鍋出土状況(図52-20)(西から)

図51 溝16

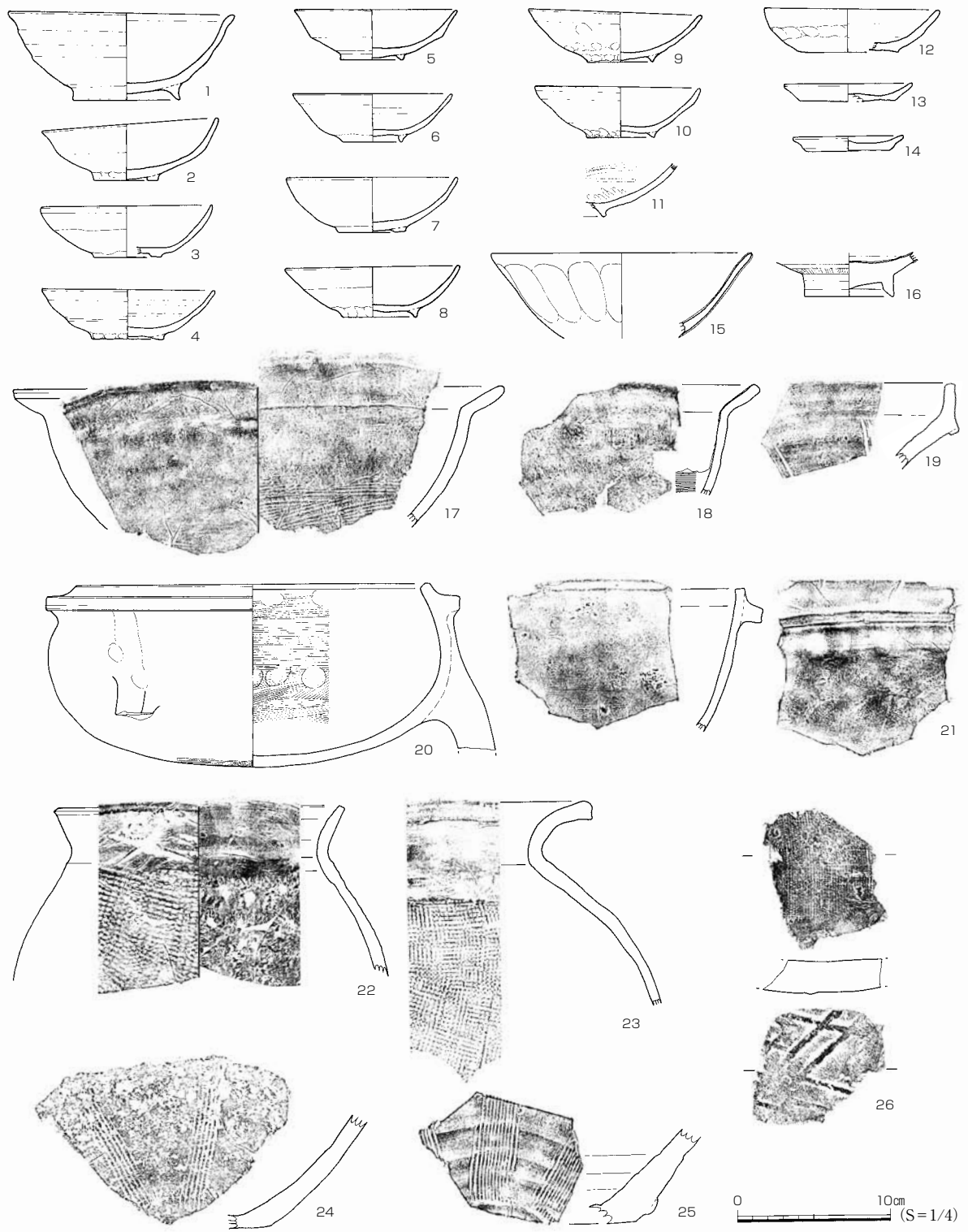
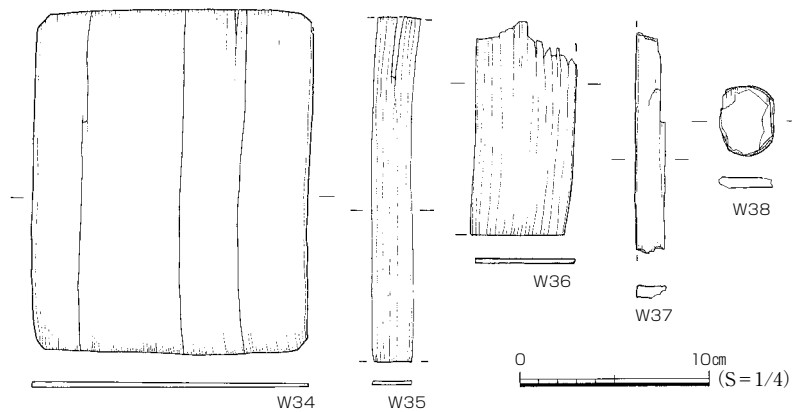


図52 溝16出土遺物1

調査の記録



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	土師質碗	14.8	7.0	5.5-5.8	内：磨減、外：ナデ、底部：篋切り後ナデ、貼り付け高台：ナデ。口縁完存、高台2/3残	乳白	微砂、細砂僅少
2	土師質碗	11.5	4.2	3.3-4.1	内：丁寧なナデ、外：ナデ、底部：篋切り後ナデ、高台：ナデ、小さく低い、口縁2/3残	乳褐	微差
3	土師質碗	11.2	4.4	3.4	内：丁寧なナデ、外：押圧後ナデ、高台：ナデ、小さく低い、内外煤、口縁完存、高台1/2残	淡橙褐	微砂
4	土師質碗	11.3	4.8	3.2	ナデ、外：押圧後ナデ、底部：篋切り後ナデ、貼り付け高台：小さく低い、口縁3/4残	淡灰褐	微砂
5	土師質碗	10.6	4.2	3.3	内：丁寧なナデ、重ね焼き痕、外：ナデ、底部：篋切り後ナデ、高台：ナデ、小さく低い、口縁3/4残	暗乳橙	微砂
6	土師質碗	10.4	3.8	3.1-3.2	ナデ、貼り付け高台：小さく低い、ほぼ完存	乳白	微砂
7	土師質碗	(11.2)	(4.2)	3.6	内：丁寧なナデ、外：ナデ、底部：篋切り後ナデ、高台：ナデ、小さく低く歪。口縁1/4残	乳淡褐	微砂
8	土師質碗	11.4	4.9	3.3	内：丁寧なナデ、外：押圧後ナデ、底部：篋切り後ナデ、貼り付け高台小さく低い、口縁3/5残	乳茶褐	微砂
9	土師質碗	11.3	4.4	3-3.5	内：丁寧なナデ、外：押圧後ナデ、底部：篋切り後ナデ、高台：押圧・ナデ、小さく低い、口縁5/6残	乳橙褐	微砂、細砂僅少
10	土師質碗	10.8	4.3-4.4	3.2-3.5	内：丁寧なナデ、外：押圧後ナデ、貼り付け高台：ナデ、小さく低い、歪。口縁4/5残	乳黄褐	微砂
11	瓦器碗	-	-	-	内：横ミガキ、外：押圧・ミガキ疎、高台：ナデ	暗灰	細砂
12	土師質杯	11.4	6.6	3.8	内：丁寧なナデ、一部煤、外：押圧後ナデ、底部：篋切り後ナデ、煤、口縁2/3残	橙乳	微砂
13	土師質小皿	(8.2)	(6.2)	(1.2)	ナデ、外面は磨減、口縁部1/4残	乳淡	細砂
14	土師質小皿	(7.2)	(5.4)	(1)	内：丁寧なナデ、外：横ナデ、篋切り後ナデ、口縁部・底部1/3残	乳褐	細砂
15	青磁碗	(17)	-	-	施釉、外：面取り、一部貫入、口縁部1/5残、龍泉窯系	胎：灰、釉：オリーブ	微砂
16	白磁碗	-	(5.8)	-	内：淡オリーブ色施釉、貫入弱い、外：ナデ、高台部無袖、胴下部ハケメ、高台部完存	胎：乳白、釉：オリーブ	微砂
17	土師質鍋	(32)	-	-	口縁部ナデ、内：体部横ハケメ、煤、外：体部押圧後ハケメ、煤、口縁部1/7残	暗灰/灰褐	細砂
18	土師質鍋	-	-	-	口縁部ナデ、内：体部横ハケメ、煤、外：体部押圧後ハケメ、煤、口縁部1/8残	暗灰	細砂
19	備前焼播鉢	-	-	-	横ナデ、内：卸目(条数不明、2カ所残)、外：口縁部自然袖、体部変色、口縁部1/8残	灰暗茶	細砂
20	瓦質鍋	22×23	12.6	-	口縁部ナデ、内：押圧後ハケメ、外：底部ハケメ、煤強調整不明、三脚先端すべて欠損、口縁部7/8残	暗灰褐	粗砂
21	瓦質鍋	-	-	-	口縁部横ナデ、内：体部横ハケメ、外：押圧後ナデ、体部横ハケメ、口縁部1/6残	灰暗褐	細砂
22	須恵質甕	(19)	-	-	内：押圧後ナデ、凹部に布目、外：口縁部横ナデ、頸部平行タタキ、肩部以下格子目タタキ、口縁部1/2残、歪	灰	微砂
23	須恵質甕	-	-	-	内：ナデ、外：口縁部以下肩部タタキ後ナデ、肩部以下タタキ、口縁部1/8残	乳灰	細砂
24	備前焼播鉢	-	-	-	内：ナデ、卸目6条一組2カ所残、外：ナデ、煤、底部一部残	灰褐	細砂
25	備前焼播鉢	-	-	-	内：ナデ、卸目12条一組3カ所残、外：ナデ・押圧、底部一部残存	赤褐	細砂
26	土師質瓦	残長9	残幅8	厚2.1	内：布目、外：格子目タタキ	乳橙	細砂

番号	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	樹種	特徴
W34	板材	18.3	14.6	0.15-0.3	スギ	柾目、四隅角面取り、折敷の底板か
W35	板材	18.2	2.4	0.2	スギ	柾目、折敷の側板か
W36	板材	11.3	5.4	0.2-0.25	スギ	柾目。板状、折敷側板か？
W37	加工材	11.6	1.5	0.6	スギ	板目
W38	円盤状木製品	3.6	2.9	0.55	ヒノキ	長楕円状に加工。片面には漆塗り。

図53 溝16出土遺物2

溝17 (図54・55 図版6)

調査区の西半を走行する溝である。主軸方向は北が東へ14度傾くもので、前述の溝15と並行する方向である。CLライン以北は攪乱で消失している。検出面は4 b層上面で、標高は北端で1.3m、南端で0.85mである。本溝の南端は、おそらくCLライン付近を東西方向に走行する溝と接続するものと推定されるが、攪乱により確認はできない。

本溝の幅形状はCLライン付近を境に、南端部分の形状に大きく変化が認められる。以下南端を小水路状として記す。断面形は北端からCLラインまでは、幅2.5m、深さ1.0mの逆台形を呈しており、標高0.75~0.8mから上位は緩やかな傾斜で開く。南端の小水路部分では断面形は幅0.2m、深さ0.1mの箱形を呈している。

埋土は5~8枚に分けた。大きくは褐灰色~暗灰色を呈する砂質土を主体とする上層群(断面①1-6層、断面②1~5層、断面③1~3層、断面④1・2層)と、灰色粘質土~粘土を主体とする下層群(断面①7・8層、断面②6~8層、断面③4・5層、断面④3・5層)に分けられる。

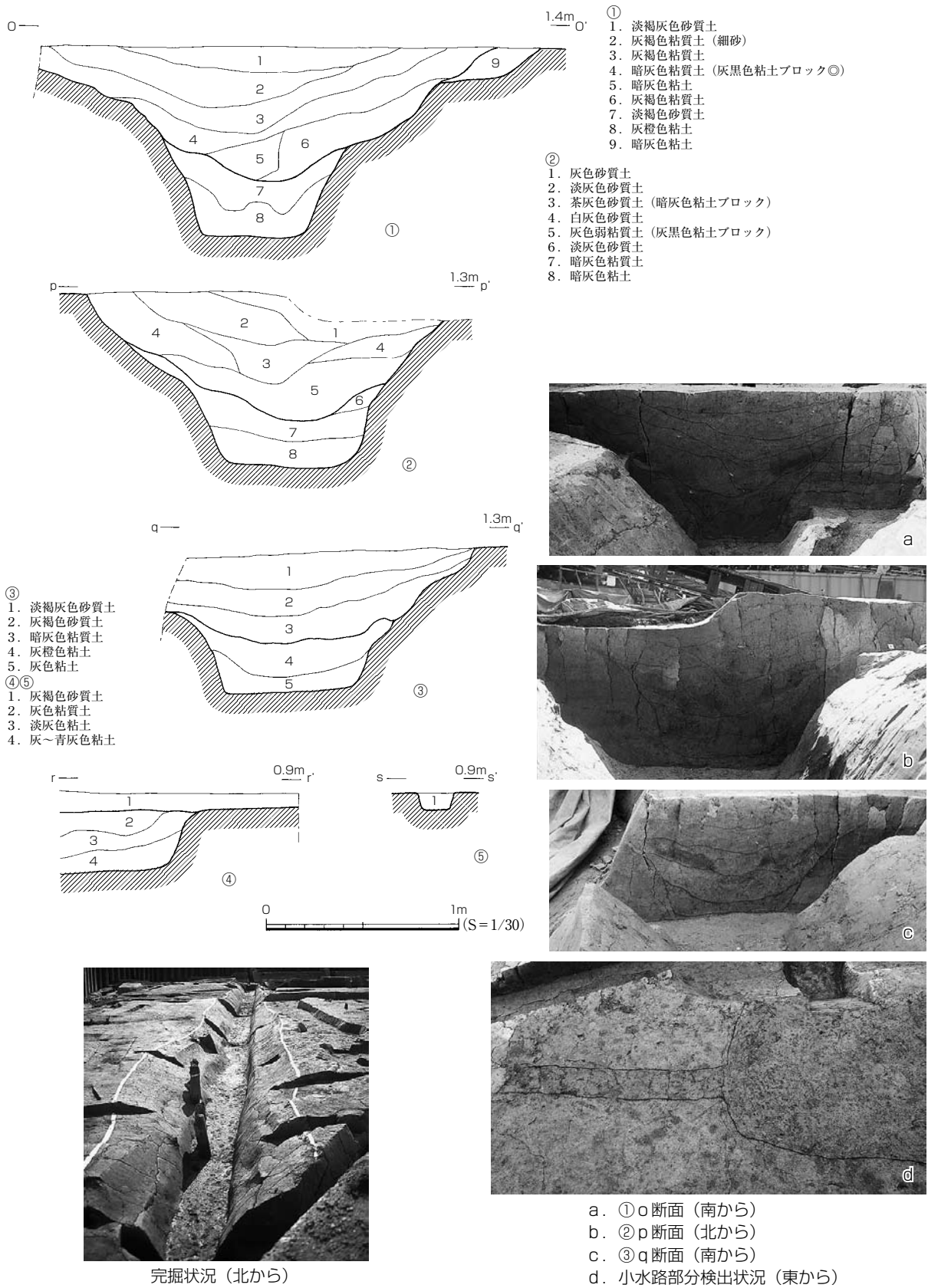
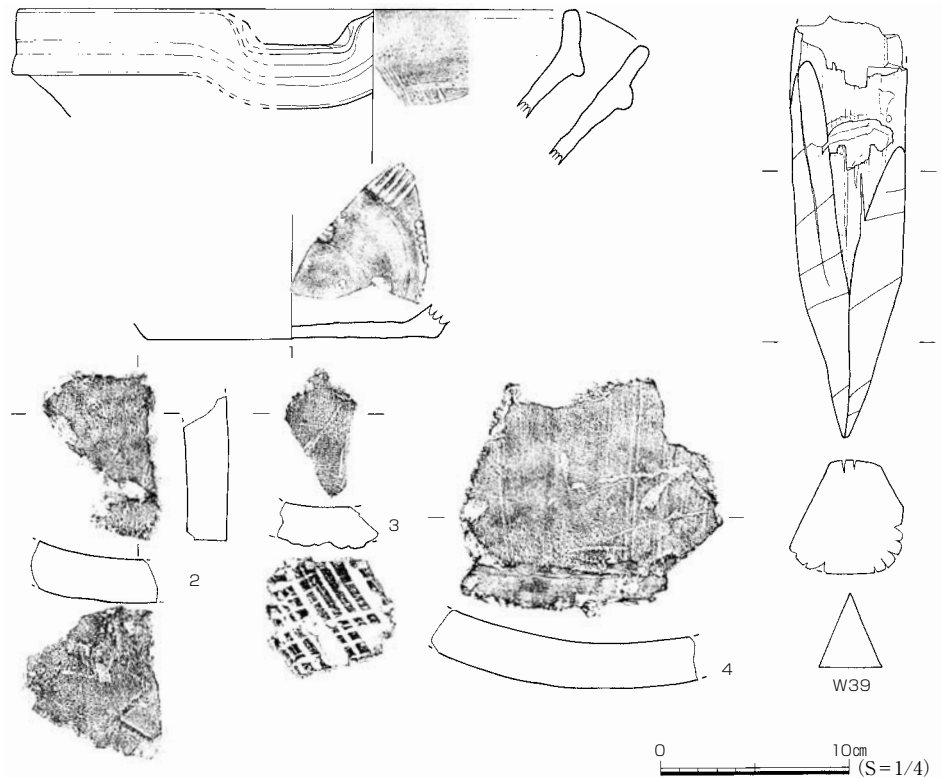


図54 溝17

南端の水路状部分の埋土は上層埋土に対応し、一定程度の水量があるときに南側に位置する東西方向の水路と接続している状況と考えられる。また水路の始まる地点に近い部分で、ウシ下顎骨が見つかった。下顎骨は溝の底に置かれており、下層群埋土で埋められている。溝の端部での祭祀をうかがわせる。

出土遺物はコンテナ2箱、内訳は、土師 碗 265片・皿 49片・杯 70片・鍋 215片・竈 44片、須恵器 7片、須恵質土器 17片、備前焼 44片、常滑焼 1片、東播系 9片、亀山焼 14片、青磁・白磁 9片、瓦質鍋 22片、瓦 5片と木製品がある。

本遺構の時期は14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

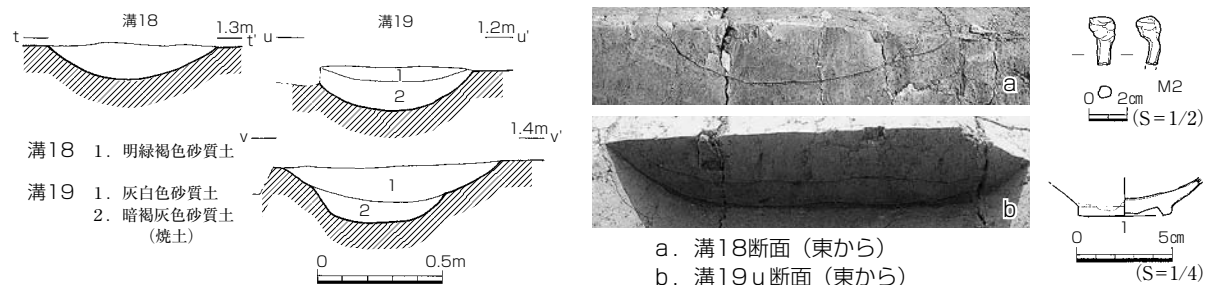


番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	備前播り鉢	(49.6)	(15.4)	—	横ナデ、内：銅目(6条一組)、底部：外強い凹凸後ナデ、口縁部1/3残・底部1/5残	暗赤灰	微砂
番号	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	特徴		
2	須恵質瓦	7.6	7.0	2.3	内：格子目タタキ、外：布目	灰白色	細砂
3	須恵質瓦	6.3	6.5	2.1	内：格子目タタキ、深く強い、外：布目	灰	細砂
4	須恵質瓦	10.8	14.0	2.5	内：タタキ後ナデ、外：布目後工具ナデ	t 暗橙乳	微砂
番号	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	樹種	特徴	
W39	杭	22.2	6.0	6.0	アカマツ	3面加工、芯持ち	

図55 溝17出土遺物

溝18 (図56 図版5)

調査区中央、CHライン南2mの位置を東西方向に走行する。調査区の西端から15ライン付近までの長さ24mを



番号	出土遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	特徴	
M2	18	釘	25	0.6~1.35	0.55~1.2	4.9	全体に錆膨れ 断面：長方形	
番号	出土遺構	器種	底径cm	特徴			色調：内/外	胎土
1	19	白磁皿	4.9	内：施釉オリーブ色、見込み部：釉掻き取り、外：施釉オリーブ色、削り出し高台部無釉、高台部完存			オリーブ	微砂

図56 溝18・19・出土遺物

検出した。4 b層上面で検出し、標高1.25mである。底面の標高1.15mを測り、幅は0.65m、深さは0.1mである。断面形は皿状を呈し、埋土は明緑褐色砂質土1層である。

出土遺物はコンテナ1/3箱が出土し、土師質土器碗88片・杯、皿の破片35、鍋27片、須恵質土器2片、瓦器碗2片と鉄器1点が含まれる。いずれも小片である。

本溝の時期は、15世紀後半と考えている。

溝19 (図56)

調査区中央、CIラインの南約2mの位置をほぼ東西方向に走行する。調査区の西端から15ラインまでの長さ24mを検出した。4 b層で検出し、標高1.1～1.2mを測る。底面の標高は西端で0.9m、15ライン付近では0.95mを測る。幅は0.6～0.8m、深さは0.2mを測る。断面形は皿状を呈し、上下2層の埋土からなる。上層は灰白色砂質土、下層は暗褐灰色砂質土である。

出土遺物はコンテナ1/3箱が出土し、土師質土器碗96片・杯15片・皿64片・鍋29片、須恵質土器4片、竈29片、瓦質鍋片6片、瓦器1片、白磁皿1点、瓦8片があるが、大半が小片である。

本溝は、形状と位置が前述の溝18と類似しており、溝18との間隔は5.5～6.5mでほぼ並行しており、道路の側溝である可能性も考えられる。いずれの溝も南北方向の溝17の西端で収束し、溝17との関係も窺える。時期は15世紀後半と考えている。

溝20・21 (図57)

調査区中央、CIラインの南0.3mの位置で、東西方向の溝を部分的に検出した。4 b層上面である。溝20が17ライン付近の長さ3m、溝21は15～16ライン間の長さ3mを検出した。

溝20：検出標高1.28m、底面の標高1.2mで、幅1.1m、深さ0.08mを測る。断面形は浅い皿状で、埋土は淡黄褐色砂質土1層である。遺物はポリ袋1袋が出土し、土師質土器碗39片・皿15片・鍋10片が出土しているが、いずれも小片である。

溝21：検出標高1.35m、底面の標高1.25mで、幅0.65m、深さ0.1mを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は明緑黄褐色砂質土1層である。遺物の出土はなかった。

溝20・21はいずれも部分的にしか確認できていない。位置は近いものの、埋土が異なるなど両者が同一遺構とは確認できなかった。形状・埋土の特徴は前述の溝18・19に似ており、時期としては15世紀後半と考えている。

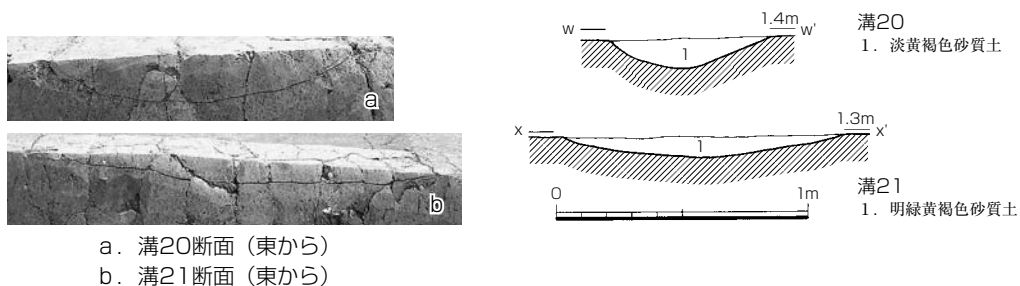


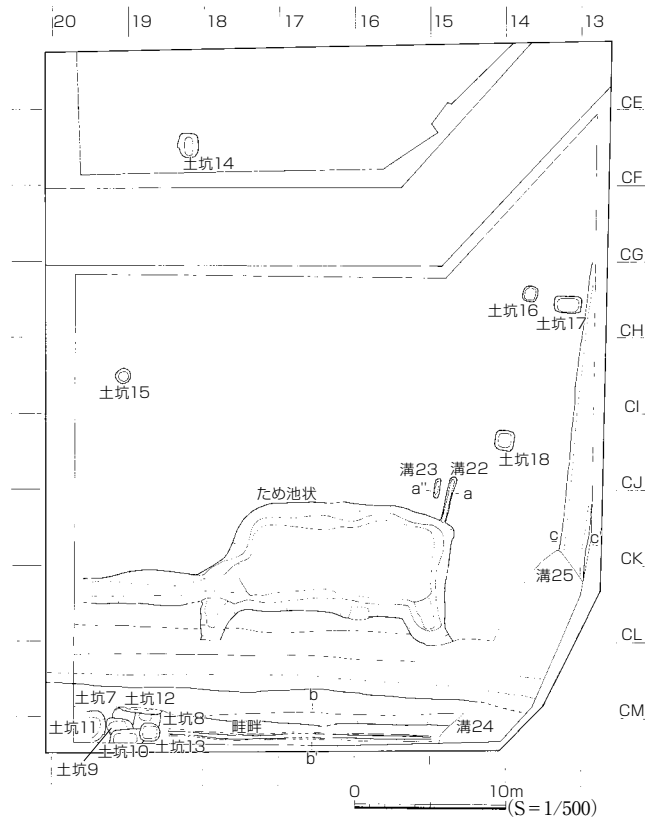
図57 溝20・21

第4節 江戸時代の遺構・遺物

(1) 江戸時代

本時期の遺構は土坑11基、ため池遺構1基、溝5条、畦畔1条である。3・4 a層上面で検出した(図58)。遺構の多くは調査区の南半に位置する。土坑7基が調査区の南西隅、CL・CM18・19区に集中して形成されて

いる。その他の4基については調査区北部と東部に点在する。ため池状遺構と東西方向の溝もCJライン以南に位置する。耕作地として利用され、CL~CMラインに溝・畦畔があることから、この位置に区画があったと考えられる。



a. 土坑

土坑7(図59)

調査区南端、CL・CM18・19区に位置する。3層上面、標高1.05mで検出した。上面は削平を受けており、また土坑9・11・12によって削平され全体の1/4ほどが残った状態である。長径1.3m、短径0.8mの半楕円形を呈し、復元形は直径1.6mほどの隅丸方形と推定される。新段階の底面は標高0.86mに位置し、箱形の断面となる可能性がある。高さ5cmほどの木杵が一部に認められた。古段階の底面は標高0.58mに位置する。

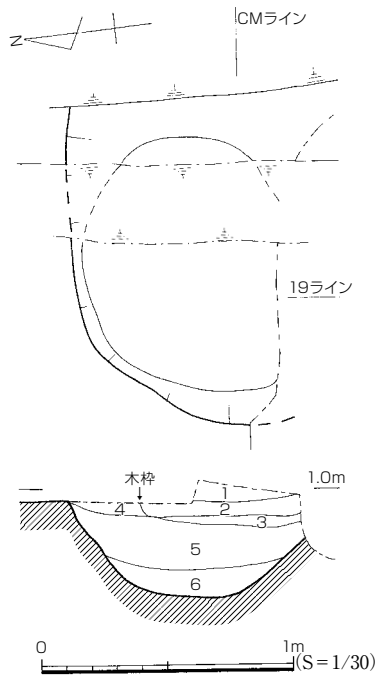
埋土は新段階(1-4層)と古段階(5・6層)とに分けられる。前者は流入土と考えられ



a 検出遺構(西から)

b 土坑7~13(西から)

図58 江戸時代検出遺構全体図



る1層、暗灰色を呈する粘質土(2・3層)、杵の掘りかたの埋土と考えられる灰色砂質土(4層)に分けられる。後者は炭化物・細礫の混入が目立つ暗灰色の粘質土である。

本遺構は古段階は断面U字形を呈し、新段階には断面箱型で杵を伴う構造となる。遺物は陶磁器・土師質土器小片、瓦片・須恵質土器片等合計40点がみられた。時期は17世紀初頭～前半と考えられる。

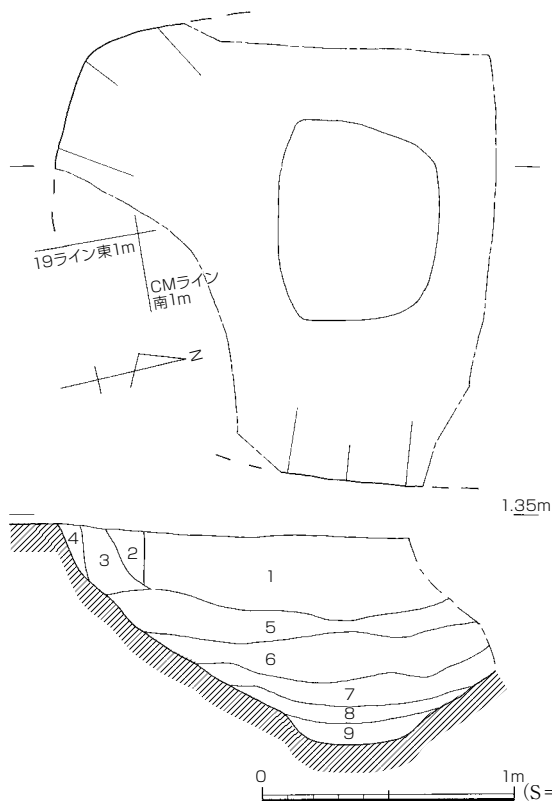


1. 灰色砂質土
2. 暗灰色粘質土
3. 暗灰色粘質土(細礫)
4. 灰色砂質土
5. 暗灰色粘質土(炭化物・細礫)
6. 暗灰褐色粘質土(炭化物・細礫)



番号	器種	底径cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	肥前磁器碗	3.3	内：透明釉、底面に貫入、外：藍色で施文後、透明釉。高台部、畳付のみ露胎、高台部5/6残	胎：白色、釉：透明	均質堅緻

図59 土坑7・出土遺物



土坑8 (図61)

調査区の南端CL・CM18区に位置する。土坑10・12・13の重複によって切られている。残存部分の平面形は長径1.7m、短径1.5mの不整形を呈する。復元形は径1.7m程



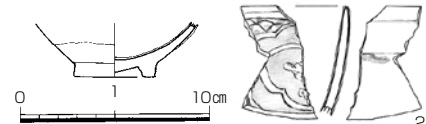
1. 茶灰色砂質土
2. 黄灰色砂質土
3. 暗黄灰色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 青灰色砂質土
6. 暗黄灰色砂質土
7. 暗青灰色粘質土
8. 暗灰褐色粘質土
9. 灰黒色粘質土(木質)

図60 土坑8

調査の記録

度の隅丸方形になるものと推定される。検出面は標高1.3m、底面の標高は0.45mで、検出面からの深さ0.85mを測る。断面形は深い皿状を呈する。

埋土は9枚に分けた。上層群（1～6層）は灰色系を呈する砂質土層であり、下層（7～9層）の暗灰色系の粘質土層とに大別される。出土遺物はコンテナ1/2箱があり、陶磁器、瓦、土師質土器碗・皿・鍋・竈、備前焼甕片等77点が出土したが、大半が小片である。本遺構の時期は17世紀初頭～前半と考えられる。

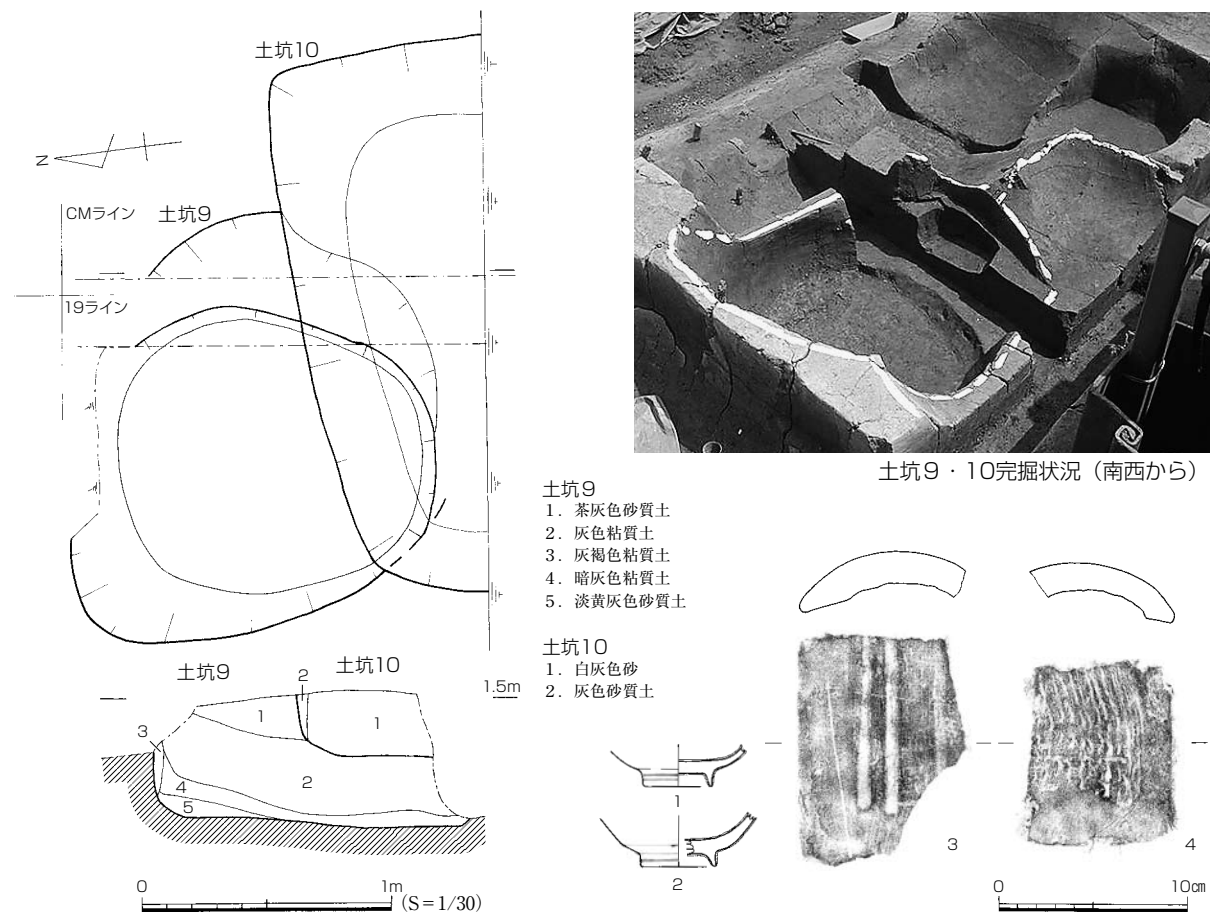


番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	肥前磁器碗	-	4.3	-	内外：回転削り後施釉、削り出し高台：露胎、ほぼ完存、乳茶色釉	乳灰	微砂
2	肥前磁器碗	-	-	-	内外：藍で施文後透明釉、口縁一部残	乳灰	微砂

図61 土坑8出土遺物

土坑9・10 (図62)

調査区南端CM18・19に位置する。2基の土坑が重複している。3層上面で検出した。調査時に一括して掘っており、遺物も一括で取りあげたため、2基まとめて報告する。



土坑9・10完掘状況（南西から）

- 土坑9
 1. 茶灰色砂質土
 2. 灰色粘質土
 3. 灰褐色粘質土
 4. 暗灰色粘質土
 5. 淡黄灰色砂質土

- 土坑10
 1. 白灰色砂
 2. 灰色砂質土

番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	肥前磁器碗	-	3.7	-	内外：施釉、畳付露胎、高台外藍色施文、貫入粗い、高台部一部欠損	淡青	微砂
2	肥前磁器碗	-	(4)	-	内外：施釉、畳付露胎、高台外藍色施文、一部変色、高台部1/4残	淡青	微砂
番号	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	特徴	色調：内/外	胎土
3	須恵質丸瓦	11.5	8.0	1.8	内：布目・工具痕、外：磨滅	灰	微砂
4	須恵質丸瓦	9.8	7.2	1.5	内：布目、側面は綺麗にカット、外：磨滅、頭部厚みは5mm～8mm	灰	微砂

図62 土坑9・10・出土遺物

土坑9は検出面の標高1.5m、底面の標高0.96mを測る。平面は長径1.6m、短径1.52mの長楕円形を呈し、断面形は深さ0.54mの箱形を呈する。埋土は1～5層の5枚に分けた。灰褐色～暗灰色の粘質土を主体とし、埋土のうち3層は枠外の埋め土の可能性が考えられる。

土坑10は土坑9の南側を切ってつくられており、検出標高は1.5m、底面の標高は1.25mを測る。南側は調査区外へと続き、平面形は隅丸方形となる可能性がある。深さ0.28mを測り、断面箱形を呈する。埋土のうち2層は灰色砂質土で、枠の抜き跡を示す可能性が考えられる。

土坑9・10の出土遺物は一括で取り上げたもので、瓦、陶器、磁器、土師質土器片など小片で50点程が出土した。本土坑の時期はいずれも17世紀後半の中で考えている。

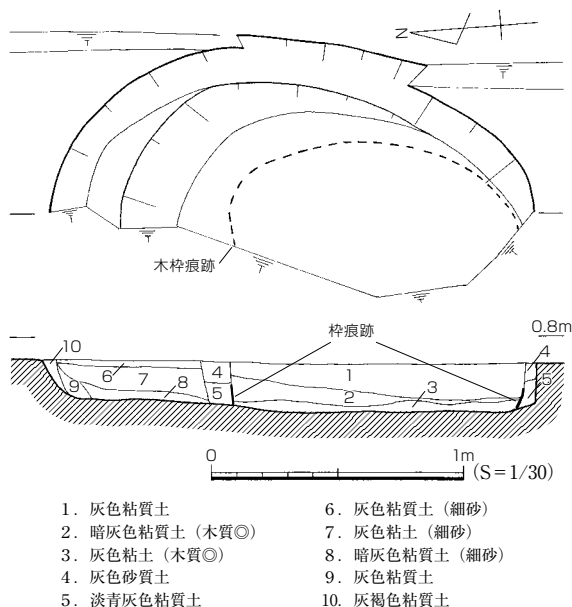
土坑11 (図63)

調査区の南西端、CL・CM19区に位置する。上面は削平を受け、また西半を攪乱により破壊されている。その影響か標高0.7mを測る7層上面で検出したが本来は3層上面に相当する。

平面形は径1.9mの半円形が残る。新旧の段階が認められ、直径1.5～1.6mの円形に復元される土坑を若干位置をずらして作っている。底面は標高0.5m、深さは0.2mを測る。掘り方の断面形は箱形を呈する。高さ0.1m程の曲物枠の痕跡が残っており、枠は径1.1mの円形に復元される。

埋土は新段階（1～5層）と古段階（6～10層）とに大別される。前者は木質を含む灰色粘質土を主とする1～3層、枠の掘り方埋土にあたる灰色～青灰色粘質土（4・5層）の2群にまとめられる。一方、後者は灰色を呈し、砂まじりの6～8層と、暗灰色で粘質の強い9・10層とに分けられる。

遺物は埋土全体から出土した。陶磁器・土師質土器の小片、瓦片等60点が見られた。遺物は陶磁器、土師質土器片、瓦など64片が出土したが、いずれも小片であった。肥前陶器・磁器がふくまれており、18世紀代の野壺であると考えられる。



a. 完掘状況 (西から)

b. 土層堆積状況 (西から)

図63 土坑11

土坑12 (図64)

調査区南端CL18区に位置する。北側を近代溝により破壊されており、南端の一部を長径2.85m、短径0.35mの

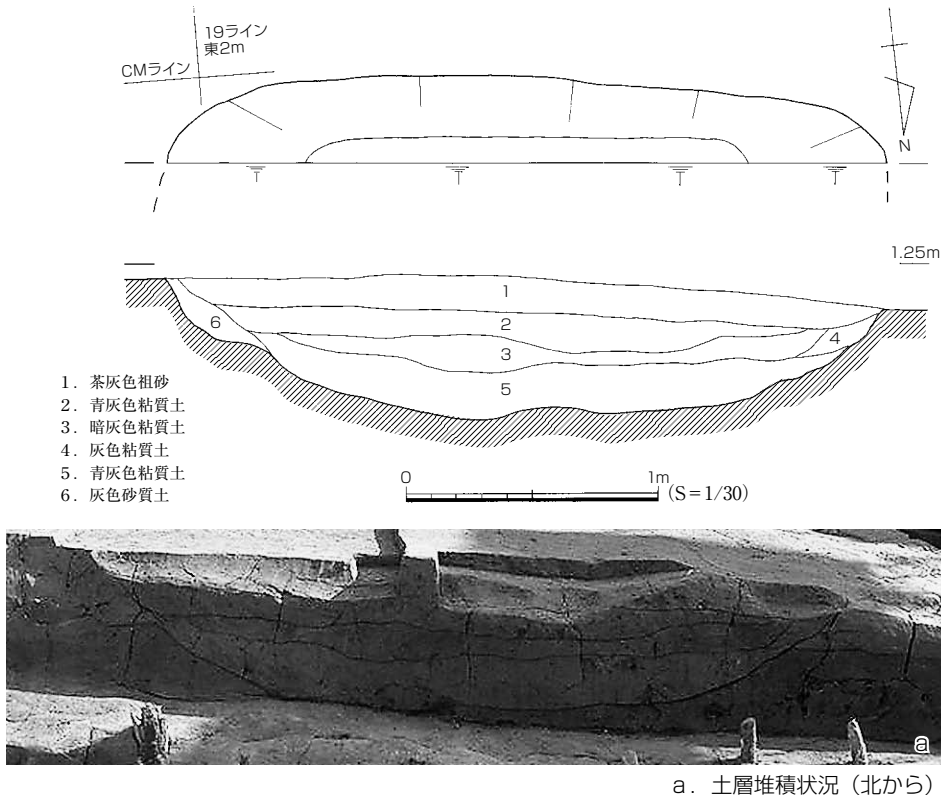


図64 土坑12

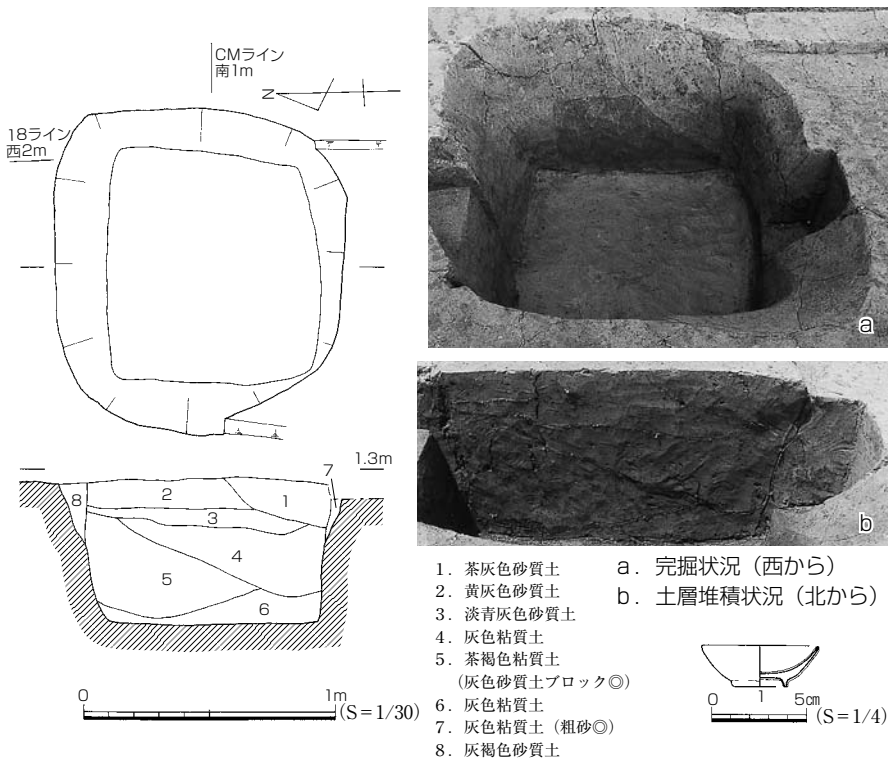


図65 土坑13・出土遺物

番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	肥前磁器碗	(6.2)	(2.8)	(2.2)	内外：施釉、墨付部露胎、高台内：粘土片付着、口縁部1/6残・底部1/2残	灰白	微砂

大きさを検出した。

検出面は標高1.2m、底面の標高は0.65mで、検出面からの深さは0.5mを測る。断面形は皿状をなすが、全形を窺うことは難しい。出土遺物はなかった。

本遺構の時期は、切り合い関係から18世紀前半と考えている。

土坑13 (図65)

調査区南端CM18区に位置する。

長辺1.3mの隅丸方形を呈し、検出面の標高は1.2m、底面の

標高0.7mで、深さ0.6mを測る。断面は箱形をなす。

埋土は8層に分けた。本来は枠が入っていたと考えられ、7・8層は枠外の埋め土にあたる可能性がある。遺物は肥前磁器、土師質土器、瓦など23片が出土した。

本遺構の時期は18世紀代と考えられる。

土坑14 (図66)

調査区北部、CD・CE18区に位置する。検出面は3層で、標高1.3mを測る。平面形は長径1.7m、短径1.4mの楕円形を呈し、深さは0.55mである。

底面の標高は0.75mを測る。断面形はU字形を呈し、埋土は7枚に分けた。灰色系の粘質土を主体とする。最下層7層には細砂を多く含む。

遺物は土師質土器、竈の小片が20点余出土した。

本遺構の時期は17世紀代と考えられる。

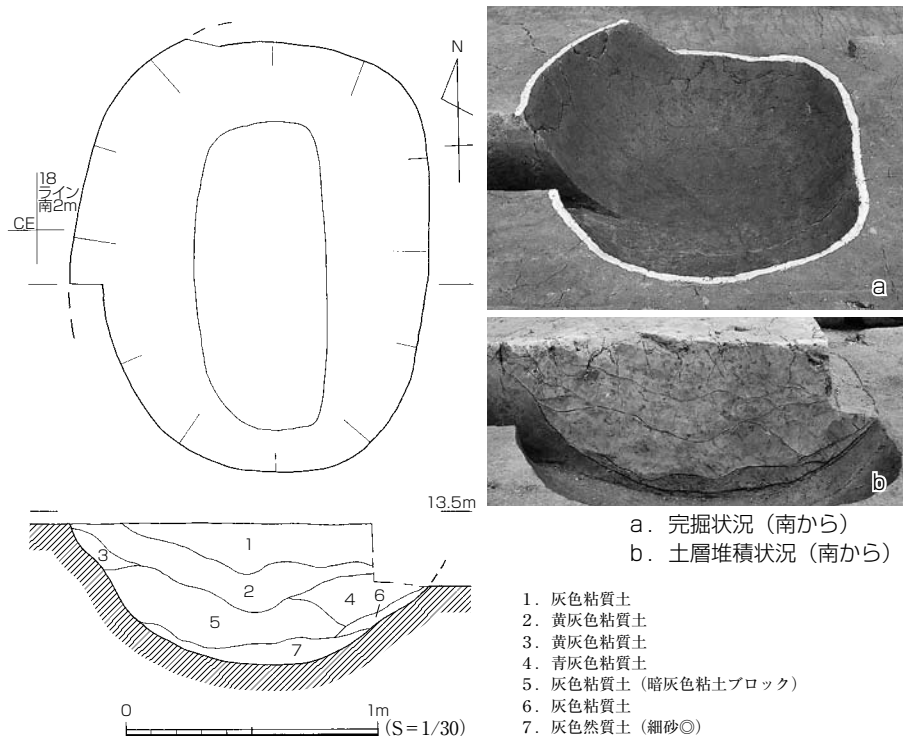


図66 土坑14

土坑15 (図67)

調査区中央西側、CH19区に位置する。3層上面で検出し、標高1.25mを測る。

底面の標高は1.15m、深さは0.1mである。平面形は径0.95mほどの円形、断面形は皿状を呈する。埋土は

黄褐色砂質土で、炭・焼土を含む。

出土遺物は土師質土器の椀・皿10片があるが、いずれも小片である。

本遺構の時期は17世紀代と考えられる。

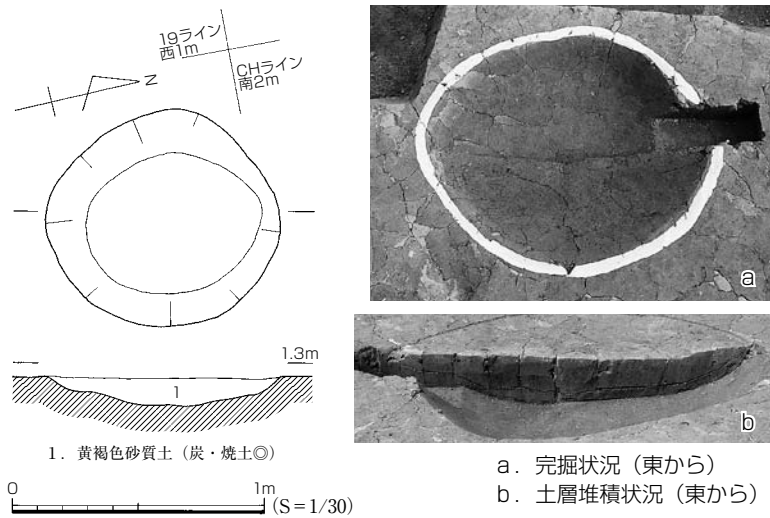


図67 土坑15

土坑16 (図68)

調査区中央東寄り、CG13区に位置する。3層上面で検出し、標高1.2mを測る。平面形は長径1.8m、短径1.2mの隅丸長方形を呈し、底面の標高は0.7m、深さは0.7mである。断面形は箱形を呈しており、埋土は4枚に分けた。1～3層は淡灰色の砂質土を主体とし、炭・焼土などが含まれている。

遺物は土師質土器・須恵質土器の小片など24片が出土するがいずれも小片である。出土遺物、検出面から本遺構の時期としては17世紀代と考えたい。

また本土坑の機能については、規模・形状からは墓である可能性も考えられるが、他に特徴的な出土遺物ではなく、断定は難しい。

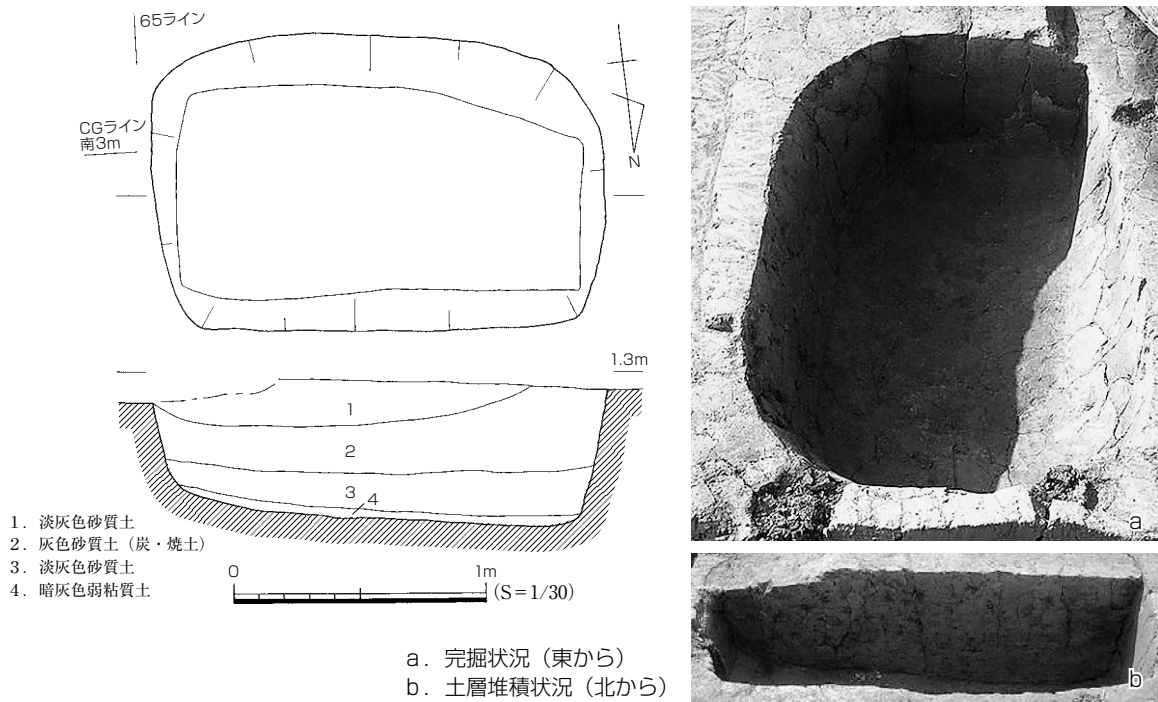


図68 土坑16

土坑17 (図69)

調査区中央東寄り、CG13区に位置する。土坑16の1mほど西にあたる。3層上面で検出した。検出面の標高は1.35m、底面の標高0.8mを測る。平面形は長径1.26m、短径1.18mの隅丸方形を呈し、深さは0.8mである。断面形は逆台形に近く、埋土は3層に分けた。褐灰色～黄褐色の砂質土で、炭を含む。

遺物はポリ袋で1袋分が出土し、須恵質土器・土師質土器・白磁の小片など70余片が含まれる。本遺構の時期は検出面から17世紀代と考えている。

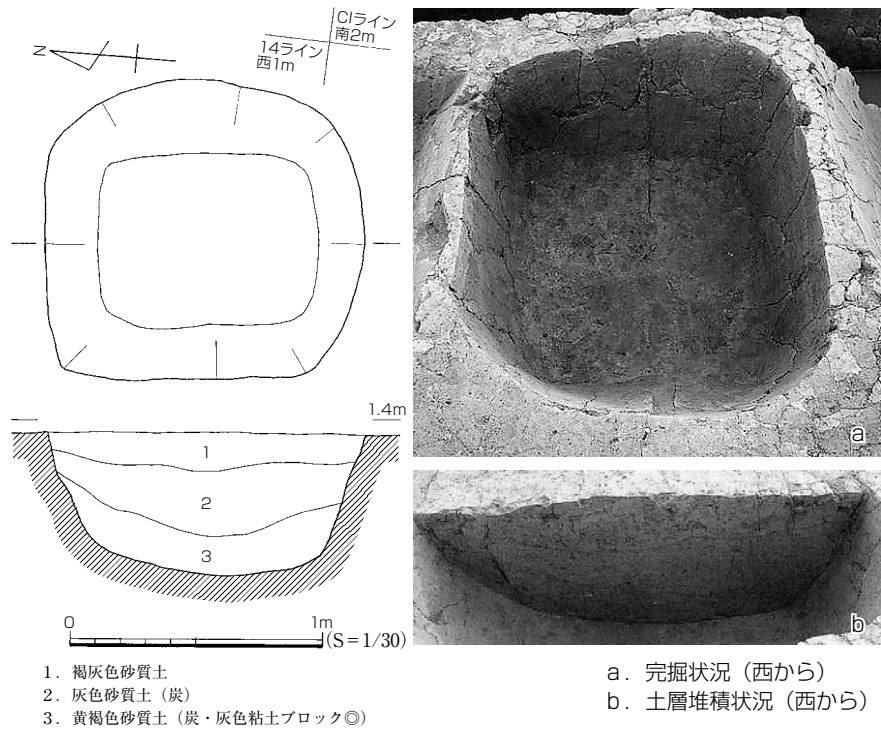


図69 土坑17

土坑18 (図70)

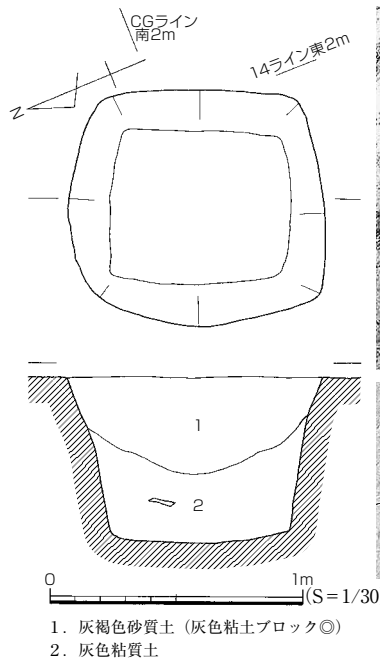
調査区中央東寄り、CI14区に位置する。検出面の標高1.3m、底面の標高0.7mを測る。平面形は一辺1.0mの正方形、断面形は検出面からの深さ0.5mの逆台形を呈している。

埋土は2層に分けた。下

層は灰色粘質土、上層は細砂を含む灰褐色砂質土である。遺物は備前焼・亀山焼等の須恵質土器、土師質土器の小片のほかに、肥前磁器片など20点足らずが出土した。図化できるものはなかったが、時期は出土遺物から17世紀後半～18世紀代と考えられる。

b. 溝

3層上面で溝4条を検出した。南北方向の小規模な溝2条（溝22・23）のほか、区画溝となる東西方向（溝24）・南北方向（溝25）の溝各1条がある。



a. 完掘状況（西から）
b. 土層堆積状況（西から）

図70 土坑18

溝22・23（図71）

調査区中央東寄り、CI・CJ14・15区に位置する。いずれも3層上面で検出し、標高は1.1mを測る。

溝22はほぼ南北方向の溝で幅0.3m、長さ3mを検出した。北端はCJラインの北1m、南端はため池状遺構によって切られている。底面の標高は北端で0.9m、南端で0.97mを測る。深さは0.2mである。断面形はU字形を呈し、埋土は3枚に分けた。1層は淡灰色砂質土、2・3層は淡灰色粘質土が堆積する。出土遺物はなかった。

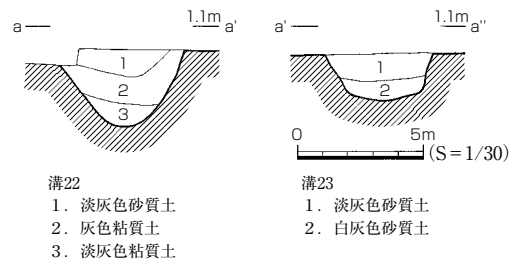


図71 溝22・23

溝23は、溝22の西約1mに並行して位置する溝である。北端は溝22と同じくCJラインの北1mであるが、CJラインまでの長さ1m、幅0.4mを検出した。底面の標高は0.96m、深さは0.15mほどである。断面形はU字形を呈し、埋土は2枚に分けた。灰色砂質土を主体とする。出土遺物はなかった。

溝22と23は形状が近似し、方向も並行していることから何らかの関連があるものと考えられる。時期としては、ため池状遺構との切り合い関係から、17世紀前半代と考えられる。

溝24（図72）

調査区の南部、CLライン付近を東西方向に走行する溝である。大半を近代の溝の重複により切られており、南側の肩部の一部を3層上面で検出した。標高1.3mを測る。底面の標高は1.05m、深さは0.3mである。断面観察では上面が標高1.45mに位置することが確認されるが、本来の溝の幅・深さは不明である。埋土は灰褐色砂質土である。

出土遺物は13号ポリ袋で2袋が出土している。土師質土器碗・皿・竈119片、須恵質土器片5点、近世陶磁器片7片、瓦4片が含まれる。いずれも小片で図化できるものはなかったが、磁器の中には、18世紀後半～19世紀のものが含まれており、本遺構の時期を示すものと考えられる。

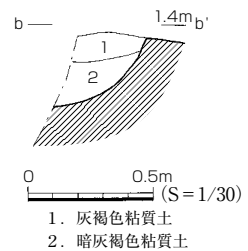
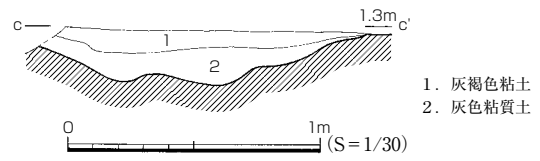


図72 溝24

溝25 (図73)

調査区の東端をほぼ南北方向に走行する溝である。北端はCFラインで、これより以北は調査区外となる。南端はCKラインの2m程南までの長さ19mを検出し、以南は攪乱によって破壊されている。CF～CJライン間は溝の東肩は調査区外となる。走行方向は、南北方向よりも南が西に約10度ほど振れている。この方向は、中世後半の溝15、溝17と同様であり、時代を下るにつれ、東へと位置を変えていることが認められる。



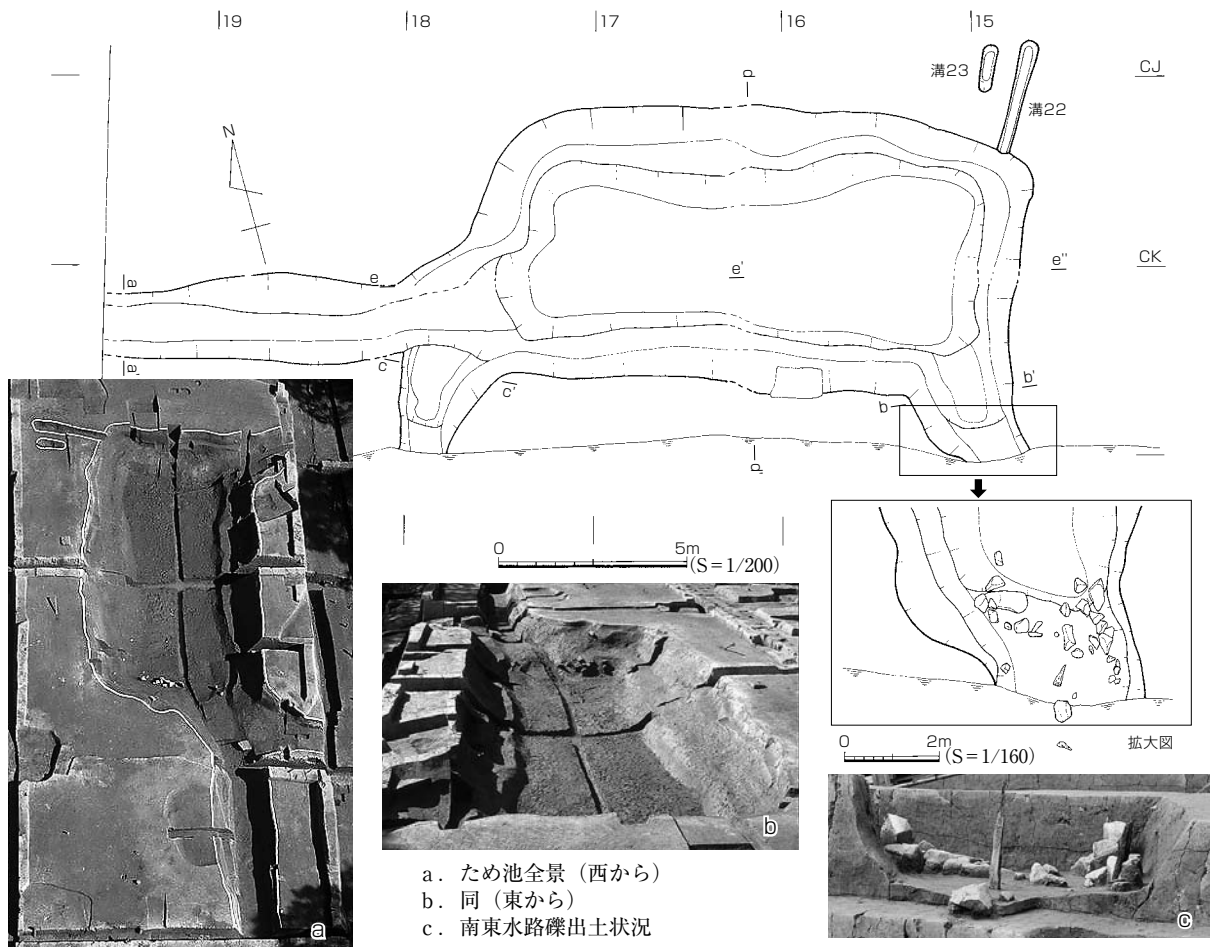
a. 断面 (南から)

図73 溝25

検出面の標高は1.25m、底面の標高1.05mである。幅1.7m、検出面からの深さ0.2mを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は2枚に分けた。遺物はポリ袋で1袋が出土し、土師質土器片60片、須恵質土器片1片、陶磁器9片、瓦7片が含まれる。いずれも小片のため図化はできなかった。18世紀後半代の磁器・棧瓦が含まれており、本遺構の時期を示す。前述の溝24と同時期と考えられるが、その接続部分にあたるCK・CJ13区については攪乱が及んでおり、接続するかどうかについては明らかではない。

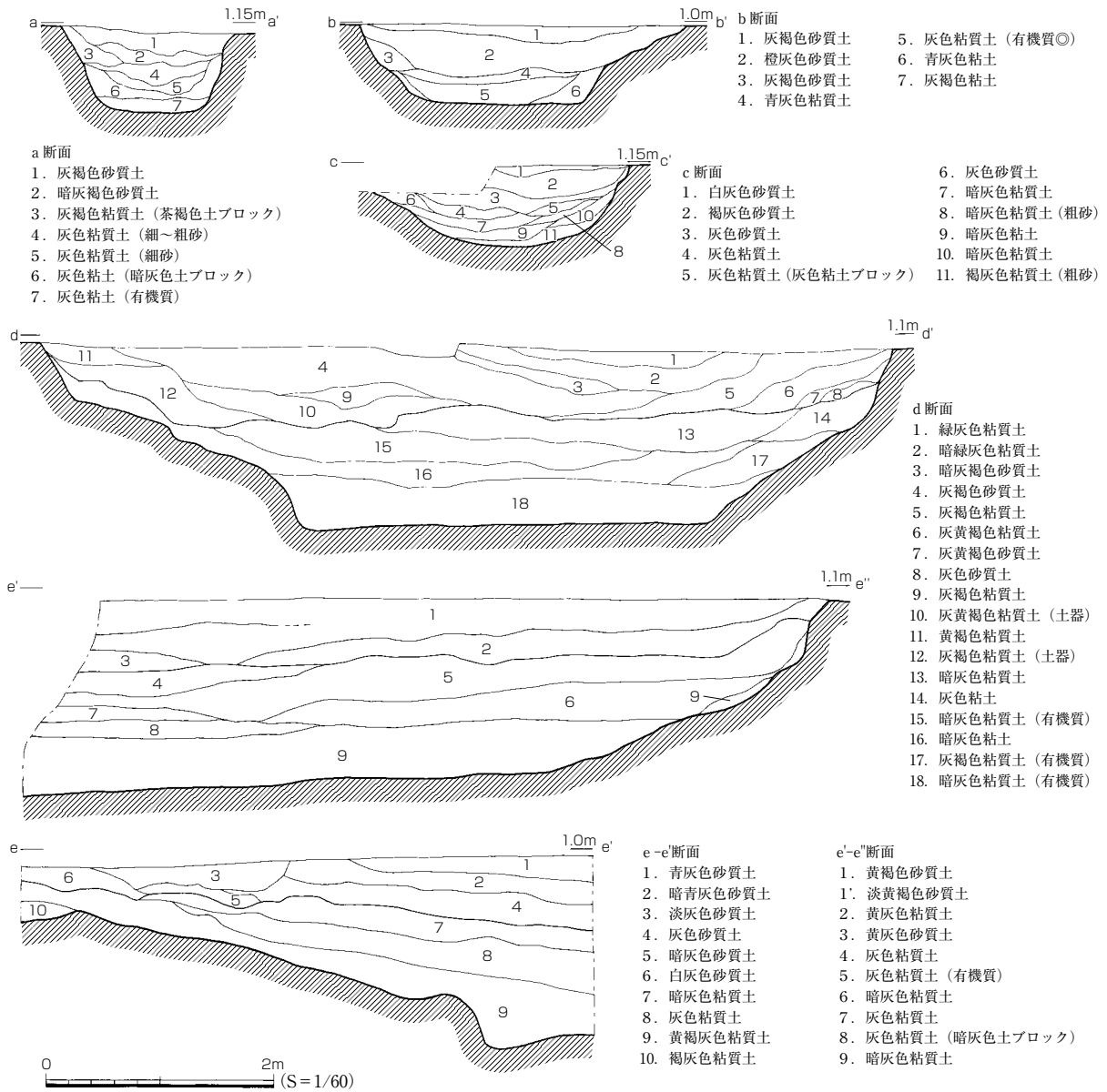
c. ため池状遺構 (図74～76)

調査区南半、CJ15～17・CK15～19区に位置する。3層上面で検出し、標高は1.05～1.1mである。東西長約14



a. ため池全景 (西から)
b. 同 (東から)
c. 南東水路礫出土状況

図74 ため池状遺構平面図



a. 南北断面 (d 断面) (西から)

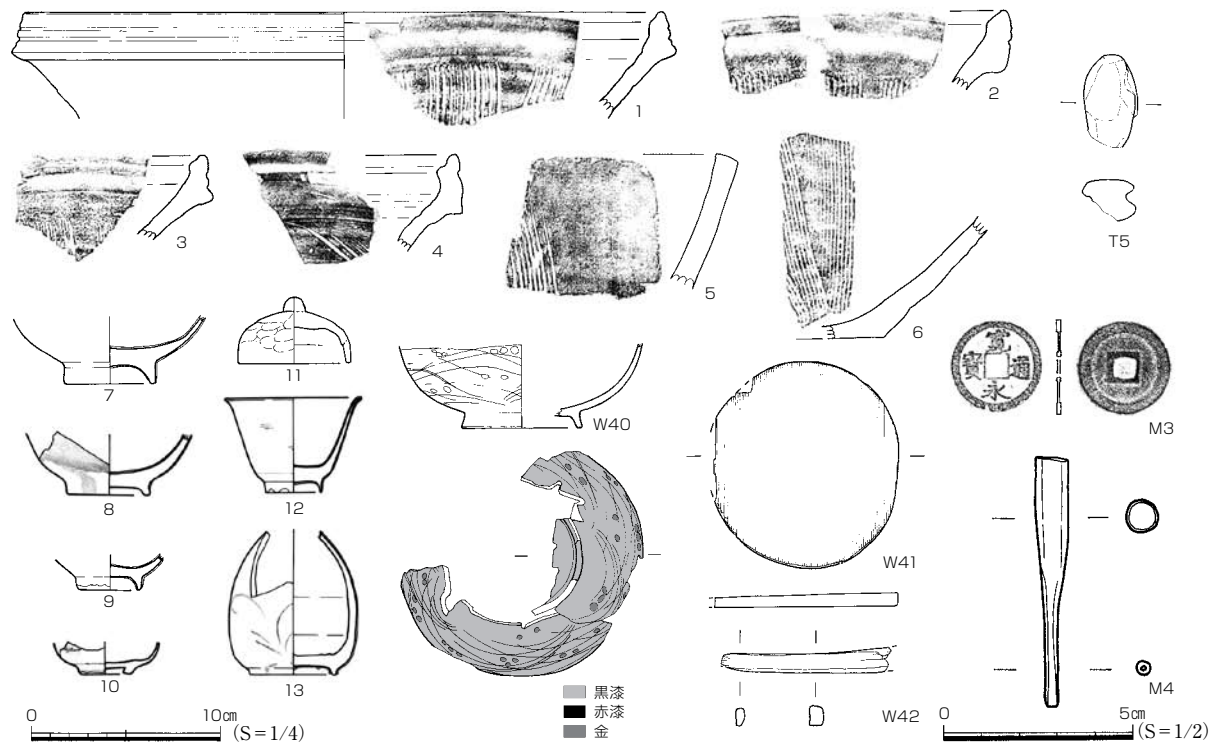
図75 ため池状遺構断面図

調査の記録

m、南北長7.5mの長方形を呈する大型土坑に、西側にとりついた幅2.2m、長さ10mの水路（以下西水路とする）が調査区西端まで伸びる。また長方形土坑の南西と南東の2カ所には南に伸びる水路（以下南西水路・南東水路とする）がとりつき、南側を東西に走行する溝に接続するものと考えられる。これら大型土坑と3方向の水路をまとめて「ため池状遺構」として報告する。

ため池部分の底面標高は-0.6mを測り、深さは1.5mである。埋土は粘質土と砂質土の互層からなる上層群（d断面：1～9層、e断面：1～5層）と粘質土からなる下層群の二つに大別できる。標高0.4mより下位に堆積する下層群の埋土は、灰色～暗灰色を呈し、有機質・粘土ブロックを含む。一方上層群は粘質・砂質の互層の堆積が幾度か繰り返される状況が認められる。

西水路は検出面の標高1.1m、底面の標高は西端で0.35m、18ライン付近のため池との接続部付近で0.1mを測る。



番号	器種	口径cm	底径cm	器高cm	特徴	色調：内/外	胎土
1	備前焼擂鉢	(34.0)	-	-	横ナデ、内：卸目(11条3カ所残)、外：口縁部沈線2条、自然袖、口縁1/8以下残	橙灰	細砂
2	備前焼擂鉢	-	-	-	横ナデ、内：卸目3カ所残、外：口縁部沈線2条、自然袖	赤灰褐	細砂
3	備前焼擂鉢	-	-	-	横ナデ、内：卸目2カ所残、外：口縁部沈線2条	暗茶灰	細砂
4	備前焼擂鉢	-	-	-	横ナデ、内：卸目1カ所残、外：口縁部凹線状横ナデ	暗灰	細砂
5	備前焼擂鉢	-	-	-	内外：横ナデ、卸目1カ所残	灰	細砂
6	備前焼擂鉢	-	-	-	内：卸目3カ所残、外：横ナデ	橙灰	細砂
7	肥前陶器鉢	-	4.9	-	内外：施袖、光沢のある黄オリブ袖、畳付露胎	乳黄褐	微砂
8	肥前磁器碗	-	4.4	-	内：施袖、織部、貫入細、外：施袖、厚み不均等、高台部露胎。織部	灰茶・暗緑	微砂
9	肥前磁器碗	-	3.2	-	内：施袖、貫入横方向、外：施袖、高台部～底部露胎、貫入粗い、高台部1/2残	灰白・白青	微砂
10	肥前磁器碗	-	2.6	-	内：透明袖、外：透明袖、藍で施文、畳付部～底部露胎	灰白	微砂
11	須恵質蓋	(6)	-	(3.5)	内外：ナデ、押圧、つまみ部完存	灰	微砂
12	肥前磁器碗	7.3	5.0	3.0	内：乳白袖、外：乳白袖、藍で施文、畳付露胎、口縁部2/3残、底部完存	灰白	微砂
13	肥前磁器瓶	-	4.7	-	内：無袖、一部袖タレが内底まで及ぶ、外：淡オリブ袖、藍で施文、畳付露胎、底部外縁、胴部～底部完存	淡灰白・淡オリブ	微砂
T5	土錘	長(4.9)	幅2.2×2.9	重量(26)	ナデ、下端欠失	灰褐色	細砂
番号	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	特徴	
W40	漆碗	口径不明	高台径(6.4)	器高不明	トチノキ	内面：赤漆、外面：黒漆後赤漆・金で絵付け	
W41	曲物底板	10.95	9.5	0.5～0.7	アカマツ	柁目	
W42	加工材	9	1.2	0.8	マツ属複雑管束亜属	断面長方形状に面加工、両端とも欠失	
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	特徴	
M3	銭	2.5	2.5	0.15	2.2	銅銭 寛永通寶	
M4	キセル	6.6	0.3～0.8	0.3～0.8	4.9	銅製 円筒形	

図76 ため池状遺構出土遺物

東に向かって次第に底面は低く、深さは0.75m～1.0mと深くなっていく。西水路の断面形はU字形で、埋土は7枚に分けた。下層の6・7層は暗灰色粘土を主体とし有機質を含む。西水路は調査区外へと伸びるが、隣接する第11次調査地点では東端から1mほどで収束する。

南東水路はため池との接続部分の幅2.8m、深さ0.7m、南端で幅1.5m、深さ0.35mを測る。底面の標高は接続部で0.1m、南東水路南端で0.65mを測る。断面形はU字形を呈し、埋土は7枚に分けた。1～3層は灰褐色系の砂質土を主体とする。4・5層は灰色・青灰色の粘質土で有機質を含む。水路使用時の堆積層の可能性はある。6・7層は青灰色・灰褐色の粘質土で、側壁の崩落等による堆積層と考えられる。南東水路では5cm～30cm大の角礫30点余を検出した(図74-c)。また南端際に杭一本がうち込まれた状態で見つかった。杭や石積みによる水路の仕切りといった構造物の存在をうかがわせるが、断定は難しい。

南西水路はため池との接続部の幅2.5m、深さ0.8m、南端での幅1.2m、深さ0.45mを測る。底面の標高は接続部で0.3m、南端で0.7mである。断面形はU字形を呈し、埋土は11枚に分けた。1～3層は灰色系の砂質土である。以下4～11層は灰色～暗灰色の粘質土であり、混入物が全体に少ない。8・11層と粗砂を含む層の存在から、何度か掘り返して浚えながら使用されていたことがうかがえる。

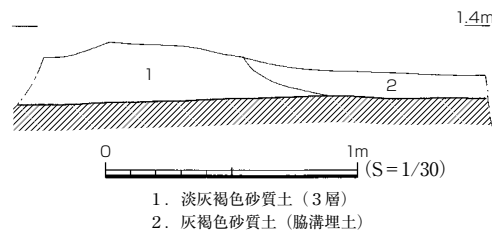
遺物は総量でコンテナ2箱が出土した。土師質土器碗332片・杯46片・皿109片・鍋252片・竈38片、備前焼90片、東播系9片、亀山焼29片、ほか須恵質土器片30余片、陶磁器片135片、瓦75点等がある。備前焼播り鉢(図76-1～3)、肥前陶器(同7)・磁器(同13)は17世紀中頃～後半のもので、本遺構の時期を示すものと考えられる。漆塗り碗(同W40)は内側を赤漆、外側を黒漆で塗り、外面にはさらに小花紋を描くものである。漆の塗膜分析結果は第4章(本書73頁)に掲載した。

本遺構の上面は、後世の削平を受けている。本来の近世段階の地表面としては残りの良い調査区北端の状況を加味すると標高1.3m以上となるものと考えられる。そうすると、本遺構の深度は、ため池部分で1.7m以上、西水路で0.9～1.2m、南東水路0.9～0.55m、南西水路1.0m以上となる。本遺構は南東・南西水路の2カ所により、南側を流れる東西水路と接続する構造であり、水量が増えた時には取水・排水するような機能が想定される。また西水路の規模は、高瀬舟一艘が通行可能なものと考えられるが、東西溝からの進入口はいずれも深度が浅く、舟の通行は困難とみられる。

d. 畦畔(図77)

3層上面で確認した。CMライン南1mにはほぼ東西方向に位置する。東端は15ラインまでを確認し、西端は土坑群(土坑7～11)の東側までを検出した。上面の標高は1.35mを測る。北側は後世の攪乱により破壊されているが、東西方向の溝が位置していたことが判明しており、これに方向を合わせている。南側には耕作土と考えられる灰褐色砂質土の堆積が認められる。本遺構は3層を加工した畦畔であり、幅0.7m、高さ0.2mが残る。遺物の出土はなく、層位から18世紀後半～19世紀と考えられる。

本畦畔の西側では150mほど離れた地点で、近世層上面の東西方向の畦畔が確認されている。この東西のラインが区画として意識されていることが窺える⁽¹⁾。



1. 淡灰褐色砂質土(3層)
2. 灰褐色砂質土(脇溝埋土)

図77 畦畔



註 (1) 岩崎志保2012「鹿田遺跡の調査研究 立会調査」『紀要2011』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

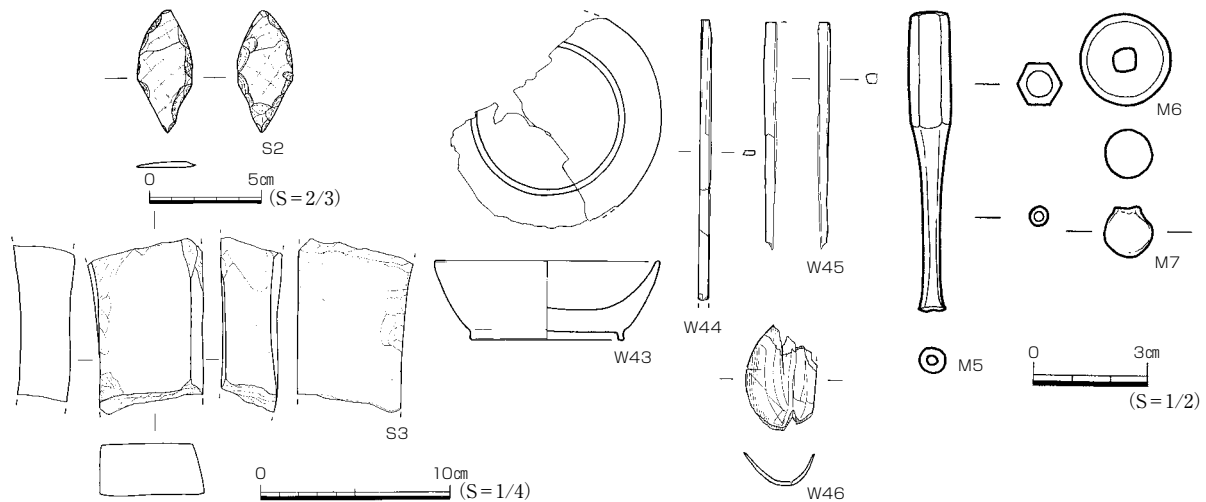
第5節 その他の遺物

遺構に伴わない遺物の中で、ここでは石器・木製品・金属器を取り上げた（図78 図版5・6）。

石器（S2・3） S2は砥石である。4面に顕著な使用面が認められる。S3はサヌカイト製の石鎌である。

木製品（W43～46） W43は郷原漆器の椀である。クリの木を輪切りにして年輪の芯を中心に挽き、内・外面に漆を施すが残存状況は良くない。蓋付きのものとみられ、浅めの椀部に径が大きく低い高台がつく。郷原漆器は江戸時代に盛んに製作され、昭和初期まで流通した普段使いの食器のひとつである。W44はスギ製、W45はヒノキ製の箸と考えられる。いずれも欠損しており、全長は不明である。断面方形を呈するように4面を丁寧に加工している。W45には一面に文字が彫られているが、判読はできなかった（図版6 拡大写真）。W46は匙である。

金属器（M5～7） M5はキセルの吸い口で、六角形をなす柱状部に木製筒が残存している。M6は寛永通宝である。残りが悪くかろうじて寛永通宝と判読できる。M7は全体に錆膨れした玉状の製品である。



番号	出土層位	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特 徴
S 2	4～5層	砥石	9.1	5.6	2.7	24.3	安山岩質粘板岩	4面使用、黒斑
S 3	7層	石鎌	(2.7)	(1.2)	0.1	2.7	サヌカイト	凸基式石鎌
番号	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹 種	特 徴		
W43	椀	口径12	高台径8.2	器高9.2	クリ	内・外・底面：赤漆 郷原漆器の蓋付き椀の椀にあたる。		
W44	箸	14.8	0.6	0.25	スギ	4面加工		
W45	箸	12	0.4～0.7	0.5	ヒノキ	4面加工、うち一面に文字、判読不能		
W46	匙	5.5	3.7	0.2	サクラ属	柁目、煤付着、柄は欠失。		
番号	出土層位	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	特 徴	
M 5	2層	キセル	7.9	0.5～1.1	0.5～1.1	22.6	吸い口。六角柱部分には木製筒が残存	
M 6	1層	銭	2.4	2.4	0.1	1.9	寛永通宝。	
M 7	3層	玉	1.25	1.2	1.25	11	全体に錆膨れ 白色化	

図78 包含層出土遺物

第4章 自然科学的分析

1. 鹿田遺跡第14次調査出土木製品の樹種

(株)吉田生物研究所

(1) 試料

試料は岡山県鹿田遺跡から出土した容器1点、服飾具1点・文房具1点の合計3点である。

(2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結果

樹種同定結果(針葉樹1種、広葉樹2種)の表と顕微鏡写真を示し、以下の各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don) (図79 No.1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) マンサク科イスノキ属イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) (図79 No.3)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(~50 μ m)がおおむね単独で、大きさ、数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は1~2列のものが多数走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物(チロース)がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1~2細胞列、高さ~1mmで多数分布している。イスノキは本州(関東以西)、四国、九州、琉球に分布する。

3) トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) (図79 No.2)

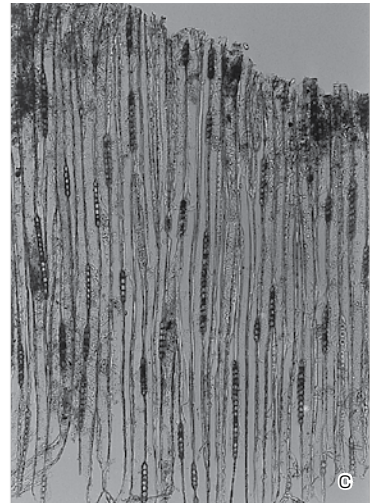
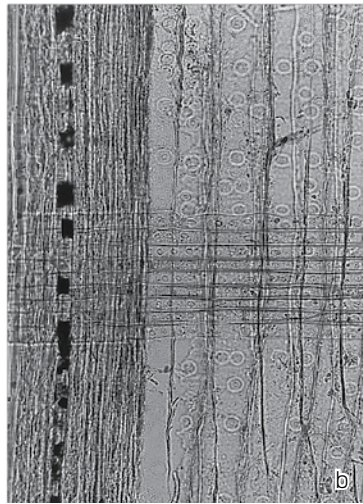
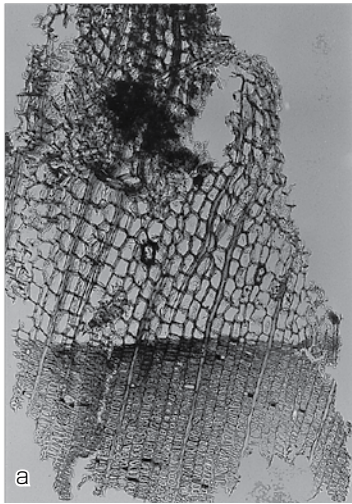
散孔材である。木口ではやや小さい道管(~80 μ m)が単独かあるいは2~4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1~3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋壁厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている(上下縁辺の1~2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は単列で大半が高さ~300 μ mとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

表3 木製品の樹種

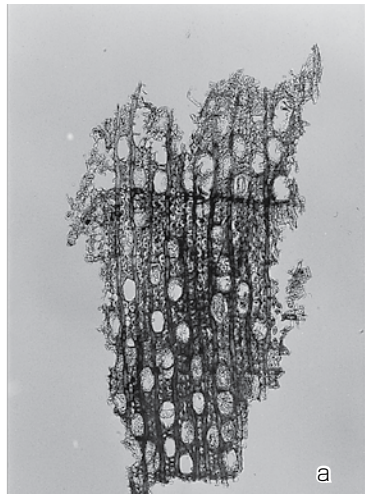
品名	樹種	掲載番号	出土遺構名
木筒	スギ科スギ属スギ	図20W6	井戸3
漆椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	図76W40	ため池状
櫛	マンサク科イスノキ属イスノキ	図20W5	井戸3

参考文献

- 島地謙・伊東隆夫1988「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版
 島地謙・伊東隆夫1982「図説木林組織」地球社
 伊東隆夫1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載I~V」京都大学木質科学研究所
 北村四郎・村田源1978「原色日本植物図鑑I・II」保育社
 深澤和三1997「樹体の解剖」海育社
 奈良国立文化財研究所1985「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」
 奈良国立文化財研究所1993「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」



No.1 スギ科スギ属スギ



No.2 トチノキ科トチノキ属トチノキ



No.3 マンサク科イスノキ属イスノキ

図79 鹿田遺跡第14次調査木製品の樹種

a. 木口×40 b. 柁目×100 c. 板目×40

2. 鹿田遺跡第14次調査出土木製品 漆塗膜分析

(株)吉田生物研究所

(1) はじめに

岡山大学鹿田遺跡から出土した漆器1点について、その製作方法を推定する目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

(2) 調査資料

調査資料は下記の近世の漆器1点(図76 W40)である。

No.1 漆椀 保存処理No.2 樹種:トチノキ 内面赤色で外面は黒色地に赤色でススキのような植物文

(3) 調査方法

前述の資料本体の表面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

(4) 塗膜断面の観察結果(図80 表4)

塗膜構造:木胎と下地、漆層と重なる様子が観察された。

下地:木胎の上に、褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地が見られた。

漆層:内面には、下地の上に赤色漆層が1層見られた。

外面には、透明漆層の上に赤色漆層が1層見られた。

顔料:赤色漆には2種類の赤色顔料が混和されていた。

内面にはベンガラが、外面には朱が混和されていた。

(5) 摘要

鹿田遺跡から出土した近世の漆椀1点の塗膜構造調査を行った。木胎の上に柿渋に木炭粉を混和した下地、漆層と重なる構造であった。全面赤色の内面にはベンガラが、外面文様部の赤色漆には朱が混和されていた。

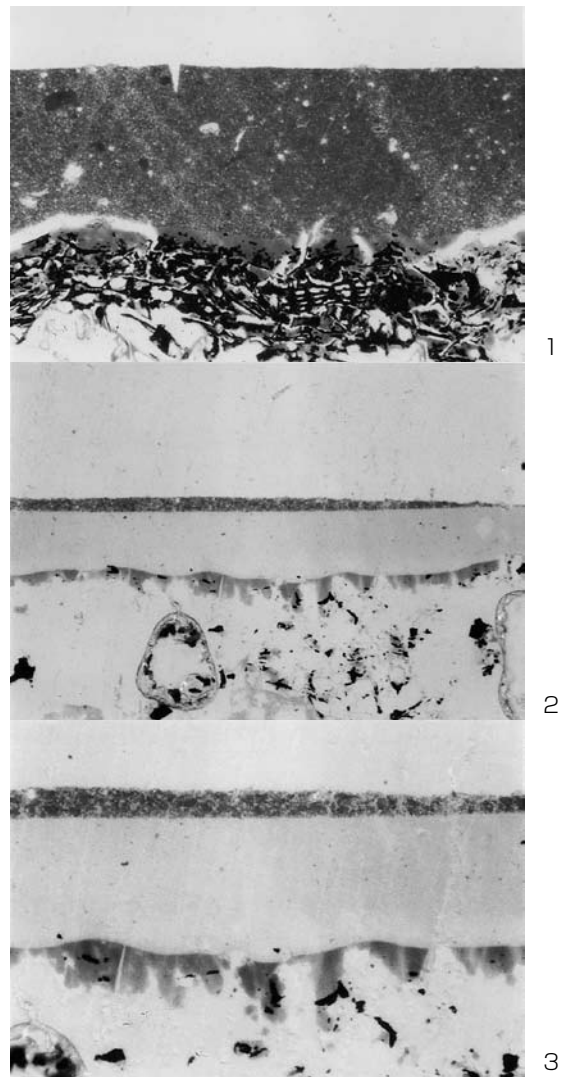


図80 第14次調査出土木製品の漆塗膜

1. 内面の断面 (×400)
2. 外面の断面 (×400)
3. 外面の断面 (×800)

表4 塗膜断面の観察結果

No.	器種	部位	写真No.	塗膜構造(下層から)			
				下地		漆層構造	顔料
				膠着材	混和剤		
1	椀	内面	1	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ
		外面(文様部)	2, 3	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱

3. 鹿田遺跡第14次調査出土動物骨遺存体

立石和也・富岡直人（岡山理科大学）

本調査では、平安時代後半～近代に属する哺乳綱が出土した。

ウシ *Bos taurus domesticus* (図81 4～6・図82)

中世後半から右下顎骨と右中足骨、近代から胸椎の各1点が出土した。

ウマ *Equus caballus* (図81 7・8)

近世から大白歯M1とM2が出土した。

イヌ *Canis familiaris* (図81 1・2)

近代から左上腕骨と右脛骨の完形が出土した。上腕骨は幼獣個体で骨幹部に解体痕がみられるため食用、あるいは餌用として利用された可能性が考えられる。イヌの頸骨全長から西中川（2008）の体高復元式で算定すると体高45.67cm程度となることから、生前は体格が中型サイズであったと推定される。

イエネコ *Felis catus* (図81 3)

中世後半の5層下より、左脛骨の完形が1点出土した。



図81 鹿田遺跡14次調査出土動物遺存体

1・2：イヌ脛骨(6)・上腕骨(5)、3：イエネコ脛骨(7)、4～6：ウシ中足骨(9)、7・8：ウマ臼歯(8)

※（ ）内は動物遺存体番号を示す。

引用文献

西中川 駿他 2008「イヌの骨計測値から骨長ならびに体高の推定法」『動物考古学25号』（動物考古学研究会）pp1-12



図82 ウシ下顎骨出土状況

表5 動物遺存体一覧

番号	地区・遺構	層位	時代	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度	破損	色調
1	SD17		室町時代	哺乳綱	ウシ	下顎骨	R	下顎体+筋突起 P3P4M1M2M3	F	?	N
2	SD17		室町時代	哺乳綱	目不明	不明	?	dia	?	?	N
3	SD16		鎌倉時代	哺乳綱	ウシ	中足骨	R	dia	?	?	N
4	井戸1		平安時代後半	脊索動物門	綱不明	不明	?	Dia	?	?	N
5	SD26		近代	哺乳綱	イヌ	上腕骨	L	完形	p:uf,df	cm D1aタイプ (dia)	N
6	SD26		近代	哺乳綱	イヌ	頸骨	R	完形	f	?	N
7	2①区	5層下	平安時代後半	哺乳綱	イエネコ	頸骨	L	完形	f	?	N
8	ため池状	下層	近世	哺乳綱	ウマ	臼歯	?	M1M2	f	?	N
9	不明		不明	哺乳綱	ウシ	臼歯	?	歯冠部破片	未萌出	?	N
10	SD26		近代	哺乳綱	ウシ	胸椎	M	棘突起	f	?	N

4. 鹿田遺跡第14次調査における植物珪酸体分析

古環境研究所株式会社

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

(2) 試料

分析試料は、1区西壁および3区南壁の2地点から採取された計11点である（図83）。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図（図85・86）に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し、直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ属は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(4) 分析結果

① 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表6および図85・86に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す（図84）。

〔イネ科〕イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ジュズダ

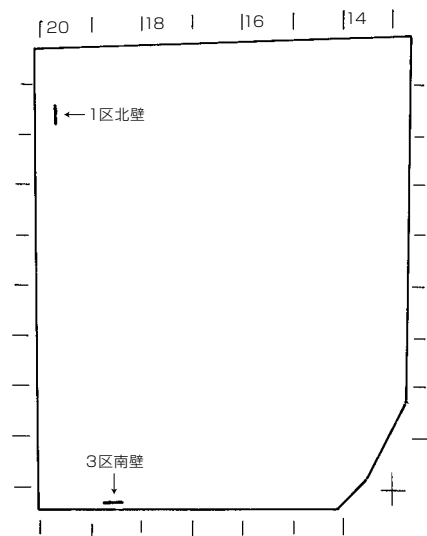


図83 採取地点の位置

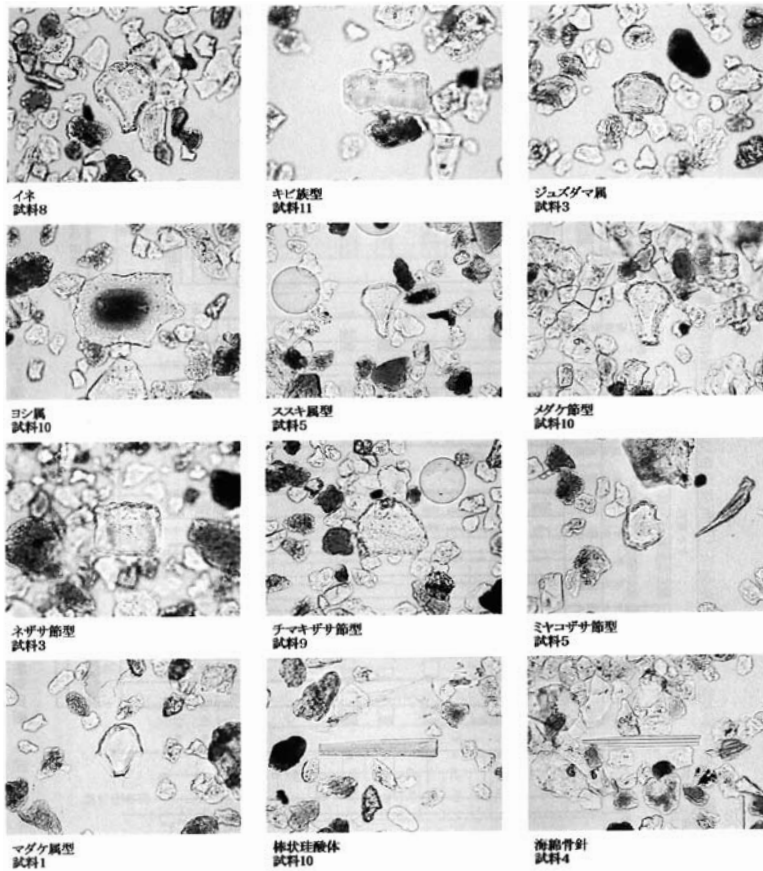


図84 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真 — 50µm

表6 岡山大学鹿田遺跡第14次調査における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	1区西壁								3区南壁			
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
イネ科	Gramineae (Grasses)													
イネ	<i>Oryza sativa</i>		50	35	24	14	26	7	14	13	6	7	12	
キビ族型	Panicaceae type												6	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		7	7	12		6	7			6	13	18	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>			14			6	7						
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		7	7	12	7		13	7	13	13	7	6	
ジュズダマ属	<i>Coix</i>				12									
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)													
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		14	7	12	7				27		20	12	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		7		12	21	6	13	36	7	6	27	6	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		7	28	54	42	39	26	14	40	91	74	42	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		29	21	30	21	52	40	29	40	52	60	36	
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>		7											
未分類等	Others		64	35	18	21	58	33	29	13	39	13	18	
その他のイネ科	Others													
表皮毛起源	Husk hair origin		100	21	6	7		13	14		6	7		
棒状珪酸体	Rod-shaped		121	78	72	71	71	73	100	33	26	80	18	
茎節起源	Stem origin					7						13		
未分類等	Others		86	50	42	56	13	106	57	20	26	40	36	
樹木起源	Arboreal													
その他	Others											13		
(海綿骨針)	Sponge		14	7	6	14	19	7	43	27	6	27	12	
植物珪酸体総数	Total		500	305	305	275	279	337	301	207	273	375	209	
主な分類群の推定生産量（単位：kg/m ² ・cm）：資料の仮比重を1.0と仮定して算出														
イネ	<i>Oryza sativa</i>		1.47	1.04	0.70	0.42	0.76	0.19	0.42	0.39	0.19	0.20	0.35	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		0.45	0.45	0.75		0.41	0.42			0.41	0.84	1.13	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>			0.18			0.08	0.08						
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		0.17	0.08	0.14	0.08				0.31		0.23	0.14	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		0.03	0.06	0.10	0.03	0.06	0.17	0.03	0.03	0.03	0.13	0.03	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		0.05	0.21	0.40	0.32	0.29	0.20	0.11	0.30	0.68	0.55	0.31	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		0.09	0.06	0.09	0.06	0.16	0.12	0.09	0.12	0.16	0.18	0.11	
タケ亜科の比率 (%)														
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		49	23	20	15				41		21	24	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		10		8	18	7	17	47	4	4	12	5	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		16	59	59	56	61	52	29	39	78	50	53	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		25	18	13	11	33	31	24	16	18	17	18	

マ属

〔イネ科-タケ亜科〕メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科-その他〕表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等
〔樹木〕その他

(5) 考 察

① 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料 1 g あたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、密度が 3,000 個/g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個/g として検討を行った。

1) 1 区西壁地点（図85）

4 a 層（試料 1）～ 9 層（試料 8）について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、4 a 層（試料 1）では密度が 5,000 個/g と高い値であり、4 b 層（試料 2）でも 3,500 個/g と比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

5 b 層（試料 3）～ 9 層（試料 8）では、密度が 700～2,600 個/g と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および土層や他所からの混入などが考えられる。

2) 3 区南壁地点（図86）

7 層（試料 9）～ 9 層（試料 11）について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出されたが、密度は 600～1,200 個/g と低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

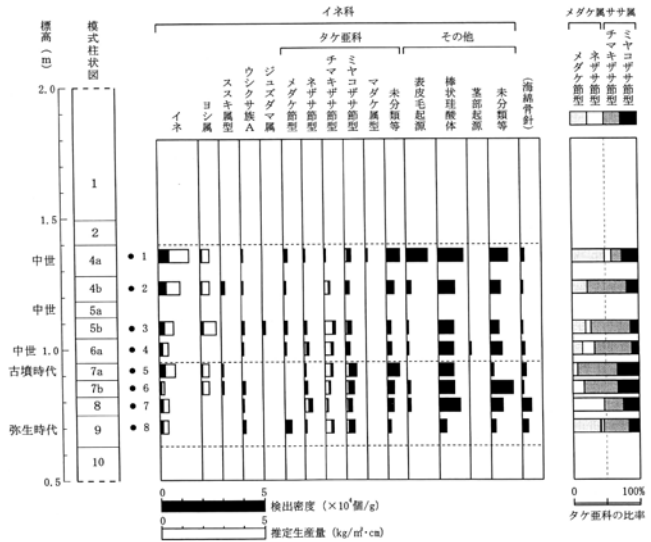


図85 岡山大学鹿田遺跡第14次調査、1区西壁地点における植物珪酸体分析結果

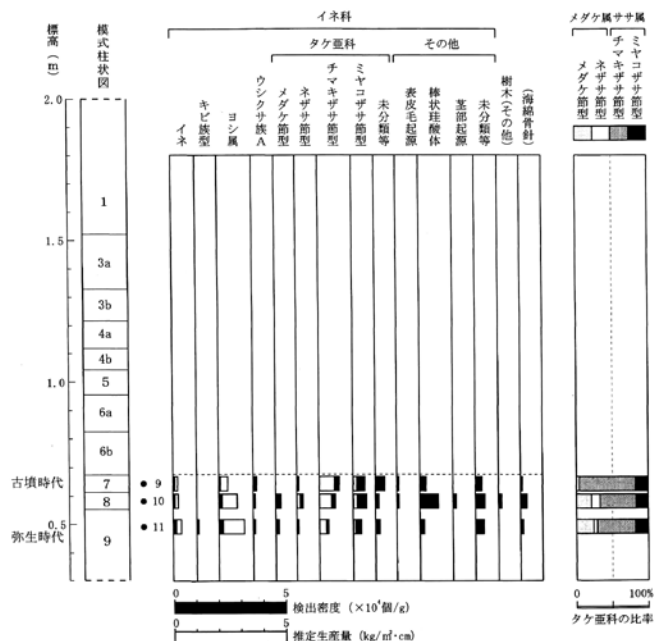


図86 鹿田遺跡第14次調査、3区南壁地点における植物珪酸体分析結果

② イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からは、ジュズダマ属が検出された。

ジュズダマ属は、1区西壁地点の5b層（試料3）から検出された。ジュズダマ属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態から栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も1,200個/gと低い値であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性が低いと考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

③ 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。9層から7層にかけては、ヨシ属、ウシクサ族A、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。また、海面動物に由来する海綿骨針（宇津川ほか、1979）も検出された。6a層から4a層にかけては、タケ亜科が減少しており、その他の分類群もあまり検出されなかった。

以上の結果から、弥生～古墳時代とされる9層～7層の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿地的環境であったと考えられ、周辺には竹笹類やウシクサ族などのイネ科草本類が分布していたと推定される。中世とされる4a層にかけては、イネ科草本類があまり見られないことから、管理の行き届いた集約的な稲作が行われていた可能性が考えられる。

(6) まとめ

植物珪酸体分析の結果、中世とされる4a層と4b層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断される。弥生～古墳時代とされる7～9層、中世とされる6a層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

弥生～古墳時代とされる9層～7層の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと推定される。中世とされる4a層にかけては、イネ科草本類があまり見られないことから、管理の行き届いた集約的な稲作が行われていた可能性が考えられる。

文献

- 宇津川徹・細野衛・杉原重夫 1979 「テフラ中の動物珪酸体“Opal Sponge Spicules”について」『ペドロジスト』第23巻第2号、p.134-144
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社、p.189-213
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9、p.15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17、p.73-85

5. 鹿田遺跡第14次調査における花粉分析

古環境研究所株式会社

(1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下では分解されて残存していない場合もある。

(2) 試料

分析試料は1区西壁および3区南壁の2地点から採取された計11点である(図83)。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図(図87・88)に示す。

(3) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1973)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・定量

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1,000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。イネ属については、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

(4) 結果

① 分類群

出現した分類群は、樹木花粉20、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉12、シダ植物胞子2形態の計36である。なお寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。分析結果を表7に示し、花粉数が100個以上係数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ・シキミ属、カエデ属、トチノキ、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕クワ科-イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕ガマ属-ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕単条溝胞子、三条溝胞子

表7 鹿田遺跡第14次調査における花粉分析結果

学名	分類群	和名	1区西壁								3区南壁			
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
Arboreal pollen		樹木花粉												
<i>Abies</i>		モミ属								2	1			
<i>Tsuga</i>		ツガ属								1			2	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複維管束亜属	4	2		1	1	5	15	7	3	7	3	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ							5	4	3	8	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科							1	1	1	1	1	
<i>Alnus</i>		ハンノキ属								1	2	1	5	
<i>Betula</i>		カバノキ属						1			1	1	2	
<i>Corylus</i>		ハシバミ属							1				1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ				1		4	1	2	2	3	3	
<i>Castanea crenata</i>		クリ									1			
<i>Castanopsis</i>		シイ属									2	4	3	
<i>Fagus</i>		ブナ属							2		1	2	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属						8	5	2	10	6	4	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	5					43	45	40	26	40	64	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ						1	1	1		1	4	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	2	1								2	1	
<i>Illicium</i>		シキミ属											1	
<i>Acer</i>		カエデ属											1	
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ		1									1	
Oleaceae		モクセイ科	2											
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科							1		1	2	1	3
Leguminosae		マメ科											1	
Nonarboreal pollen		草本花粉												
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属					1	17	4	1	19	15		
Gramineae		イネ科	6	1			1	15	61	85	22	84	92	
<i>Oryza type</i>		イネ属型										5	5	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	1					2	13	6	5	7	5	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節						1				2	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科										1	1	
Caryophyllaceae		ナデシコ科		1										
Cruciferae		アブラナ科	1	1		1		2					2	
Apioidae		セリ亜科								3		1	3	
Lactuoidae		タンポポ亜科								1		1		
Asteroidae		キク亜科						1	5	3	2	1		
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	1			1	5	61	122	71	30	153	32	
Fern spore		シダ植物胞子												
Monolate type spore		単条溝胞子	6	4	1	6	2	19	17	26	10	11	22	
Trilate type spore		三條溝胞子	1	1				4	29	13	2	16	10	
Arboreal Pollen		樹木花粉	13	4	0	2	1	63	75	61	53	77	96	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	1	0	1	2	2	3	
Nonarboreal pollen		草本花粉	9	3	0	2	7	99	206	169	78	270	141	
Total pollen		花粉総数	22	7	0	4	8	163	281	231	133	349	240	
Pollen frequencies of 1cm ²		試料1cm ² 中の花粉密度	1.5	6.3	0	4.2	6.4	5.7	2.6	2.5	6.9	4.5	1.2	
			×10 ²	×10		×10	×10	×10 ²	×10 ²	×10 ²	×10 ²	×10 ³	×10 ³	
Unknown pollen		未同定花粉	0	0	0	2	0	9	8	4	4	8	11	
Fern spore		シダ植物胞子	7	5	1	6	2	23	46	39	12	27	32	
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	

② 花粉群集の特徴

1) 1区西壁 (図87)

9層(試料8)と8層(試料7)では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優勢であり、カヤツリグサ科、キク亜科、ガマ属-ミクリ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優勢であり、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。

7b層(試料6)では、花粉密度が低い。草本花粉ではガマ属-ミクリ属が増加し、イネ科は減少している。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が増加している。7a層(試料5)から4a層(試料1)にかけては、花粉がほとんど検出されなかった。

2) 3区南壁 (図88)

9層(試料11)と8層(試料10)では樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ属型を

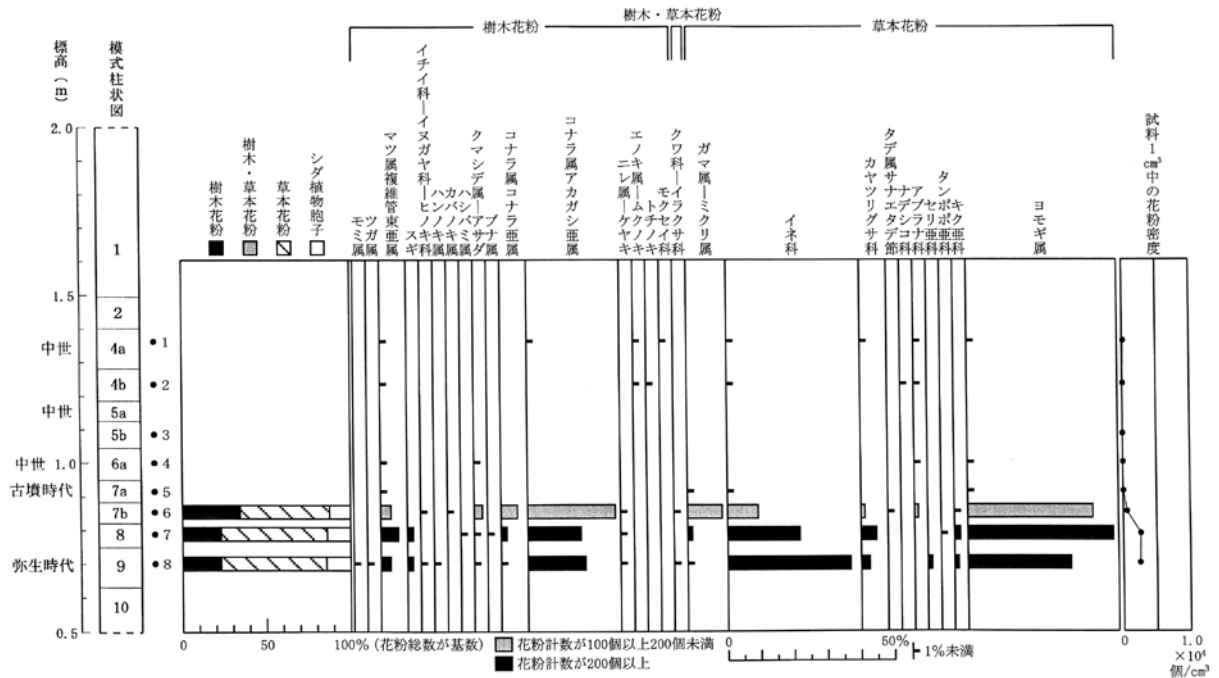


図87 鹿田遺跡第14次調査、1区西壁における花粉ダイアグラム

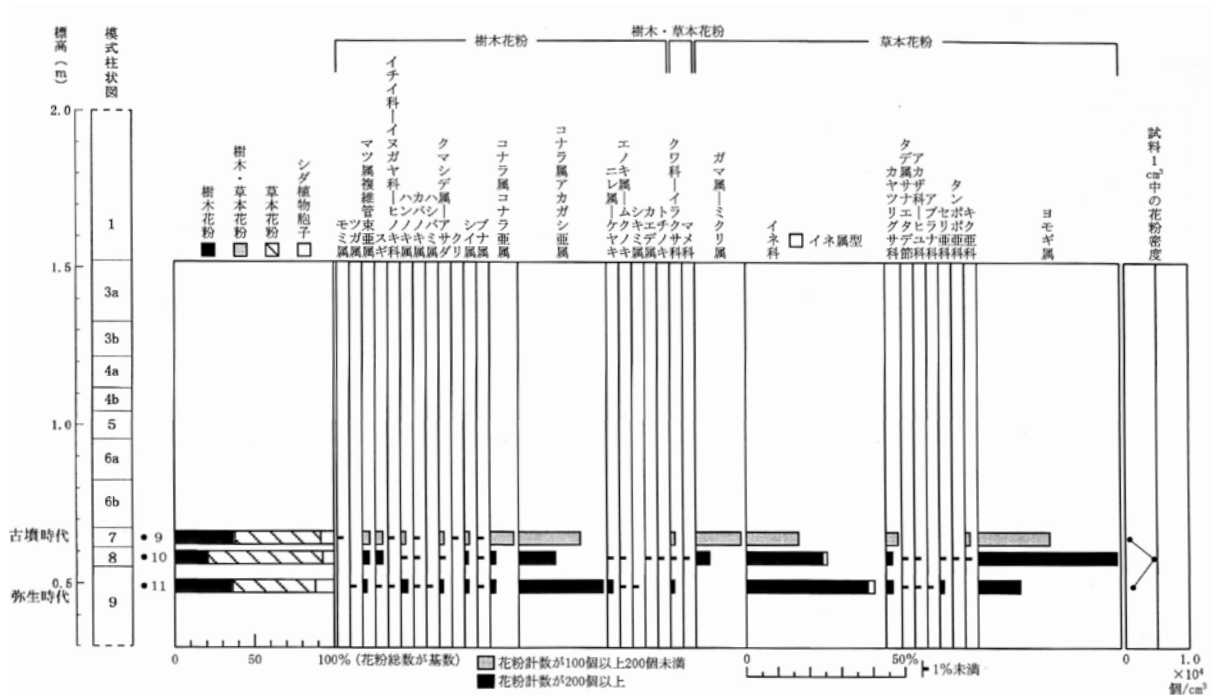


図88 鹿田遺跡第14次調査、3区南壁における花粉ダイアグラム

むイネ科、ヨモギ属が優勢であり、カヤツリグサ科、セリ亜科、ガマ属-ミクリ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優勢であり、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属、クマシデ属-アサダ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、スギなどが伴われる。7層（試料9）では花粉密度が低い。草本花粉ではガマ属-ミクリ属が増加し、イネ科は減少している。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が増加している。

(5) 花粉分析から推定される植生と環境

弥生~古墳時代とされる9層~7層（7b層）の堆積当時は、イネ科やヨモギ属などの草本類が生育する日当たりの良い人里の環境であったと考えられ、周辺にはガマ属-ミクリ属などが生育する湿地も分布していたと推定される。また、少量ながらイネ属型の花粉が認められることから、周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。森林植生としては、周辺地域にカシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主として、マツ類（マツ属複維管束）、スギ、ハンノキ、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）なども生育する森林が分布していたと推定される。

7a層から中世とされる4a層にかけては、花粉がほとんど検出されないことから、植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられ、水田であれば湿田から乾田への環境変化が想定される。

文献

金原正明1993「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の貝本第10巻 古代資料研究の方法』p.248-262
 島倉巳三郎1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集』p.60
 中村純1973「花粉分析」p.82-110
 中村純1974「イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として」『第四紀研究 13』p.187-193
 中村純1977「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号、p.21-30
 中村純1980「日本産花粉の標徴」『大阪市立自然史博物館収蔵目録 第13集』p.90

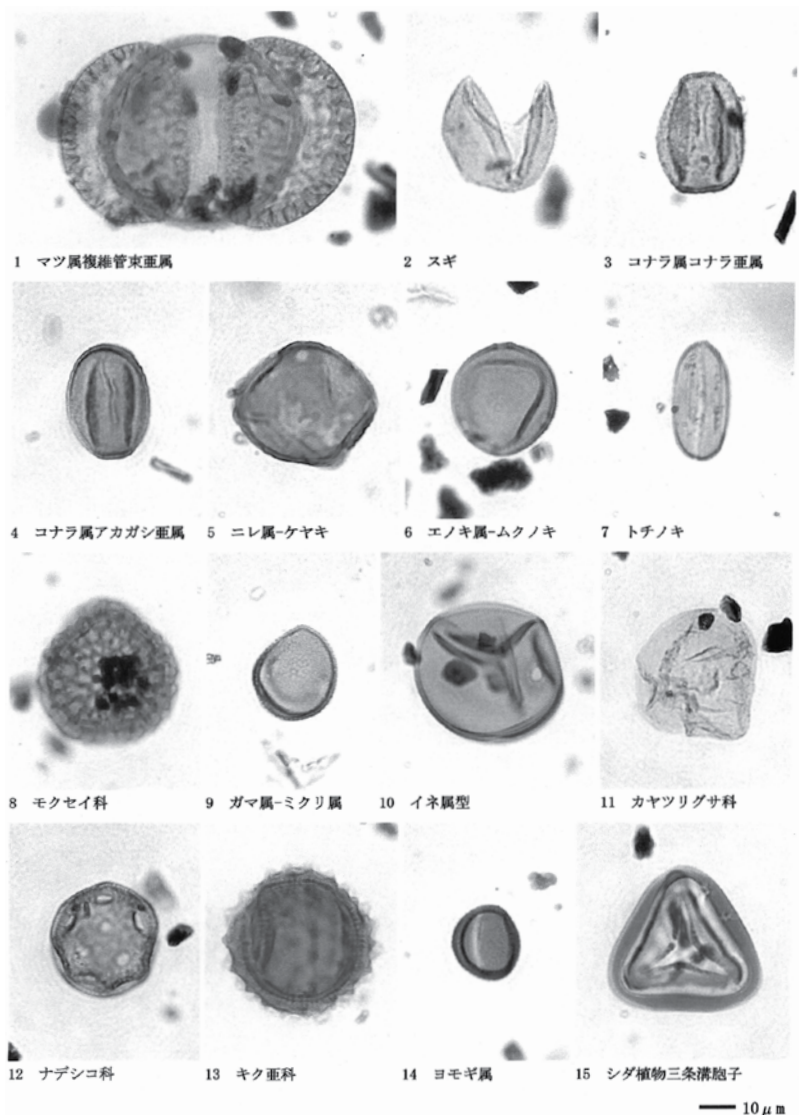


図89 花粉・胞子の顕微鏡写真

第5章 結 語

第14次調査の成果を時期毎にまとめて結語とする。

弥生時代後期～古墳時代初頭

本時期の溝を伴う水田域を確認した点が特筆される。同時期の集落は、鹿田キャンパス北側の第1次調査地点を中心に2次・5次調査地点等に広がっている。水田域はその集落の南側に広がっていたことになる。この点は旭川下流域の最南端に位置する本遺跡の立地からも、当時の海岸線の位置を考えるうえで重要な情報となろう。

平安時代後半～戦国時代

11世紀後半～15世紀後半にかけての井戸・溝・柱穴群等が検出され、集落の様相をつかむことができた。鹿田遺跡における中世の集落構造については詳細な検討がなされており¹⁾、大きく12世紀と13世紀とで、屋敷地や区画溝のあり方に大きく変化があることがわかっている。本調査地点においても13世紀後葉以降に集落が大形区画溝により再編される状況が認められる。また本調査地点では12世紀前半～13世紀中葉に明確な井戸が確認できない。このことから屋敷地の移動が起きていることが明瞭に窺われる地点であると判明した。

江戸時代

江戸時代には本調査地点は耕作域へと姿を変える。調査区南端CLライン付近には東西方向の溝と畦畔が検出された。東西溝は、前代の13世紀末～14世紀初頭に埋没する溝（溝16）を踏襲する位置である。また東西14m、南北7.5m、深さ1.5mを測る「ため池状遺構」もこの東西溝にとりついており、そうした点からもCLラインの位置が地割りにとって重要なラインであったことが明らかとなった。

方形土坑の3方に水路がとりつく特異な形態の「ため池状遺構」の機能については、類例の増加を俟って今後検討することとしたい。

遺物

注目される遺物は、12世紀初頭の井戸3から出土した呪符木簡1点である。木簡の残り状況は比較的良好で「天崗星」・「王王王王」・「木火金水」といった文言や、鬼面や星座を表した文様が読み取れる。平安時代の疫病除けに使用された可能性が高いものであり、当時の習俗をうかがい知る資料として重要である。

また11世紀後半の井戸1出土土器群は、在地の土師質土器碗・杯・皿のほかに楠葉型瓦器碗・須恵質土器碗など各地の土器が含まれる豊富な器種構成であり、鹿田遺跡の屋敷地出現期の一括資料として評価される。

現在、鹿田遺跡では第24次調査までの発掘を完了し、新資料が蓄積されている。また本調査地点周辺での既調査についても整理が進みつつある。今回考察に及ばなかった問題も含め、今後検討を進めていきたい。

註 (1) 山本悦世2007「中世の集落構造と推移—鹿田遺跡の場合—」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘報告第23冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

図版1 平安時代後半の土器（井戸1）



図版2 平安～鎌倉時代の土器（土師質土器碗・杯・皿）



図52-1



図22-1

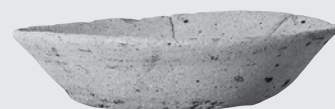


図24-1



図39-3

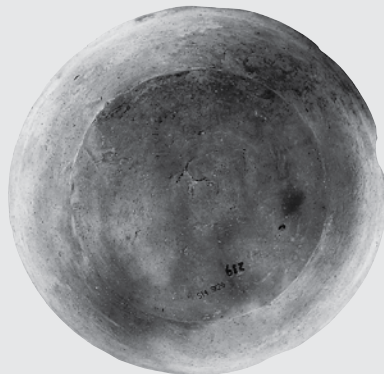


図20-3



図47-5



図20-8



図52-2

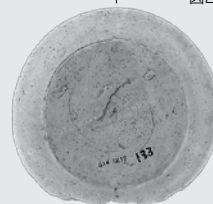
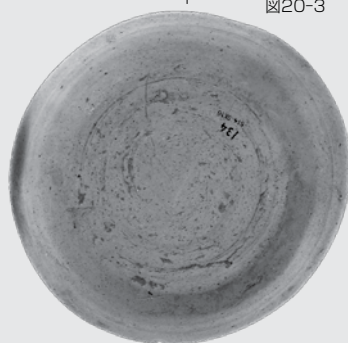


図19-1



図52-4



図52-5



図47-18

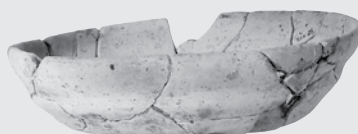


図39-12



図47-19



図52-6



図47-20



図52-7



図47-21



図52-9



図47-22



図47-23

井戸2：図19-1
井戸3：図20-3・7
井戸4：図22-1
井戸5：図24-1
溝10：図39-3・12
溝15：図47-5・18～23
溝16：図52-2・4～7・9

図版3 平安～鎌倉時代の土器（瓦器・白磁・土師質鍋・須恵質甕）



図20-6



図20-5

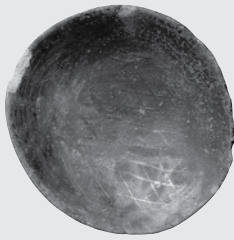


図39-14

〔瓦器〕

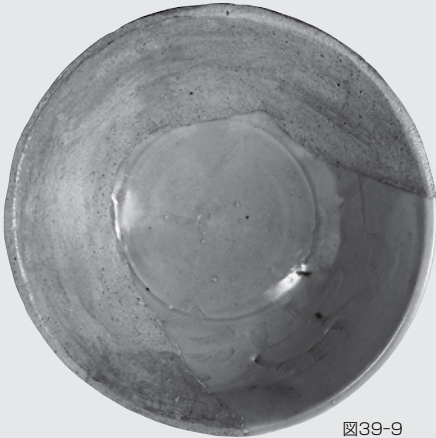


図39-9

〔白磁〕



図52-20

〔土師質土器鍋〕



図22-2

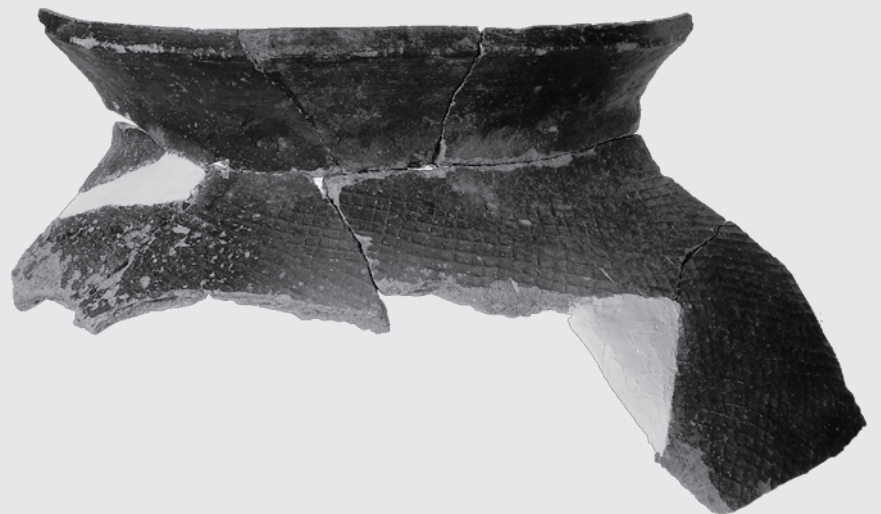


図52-22

〔須恵質土器甕〕

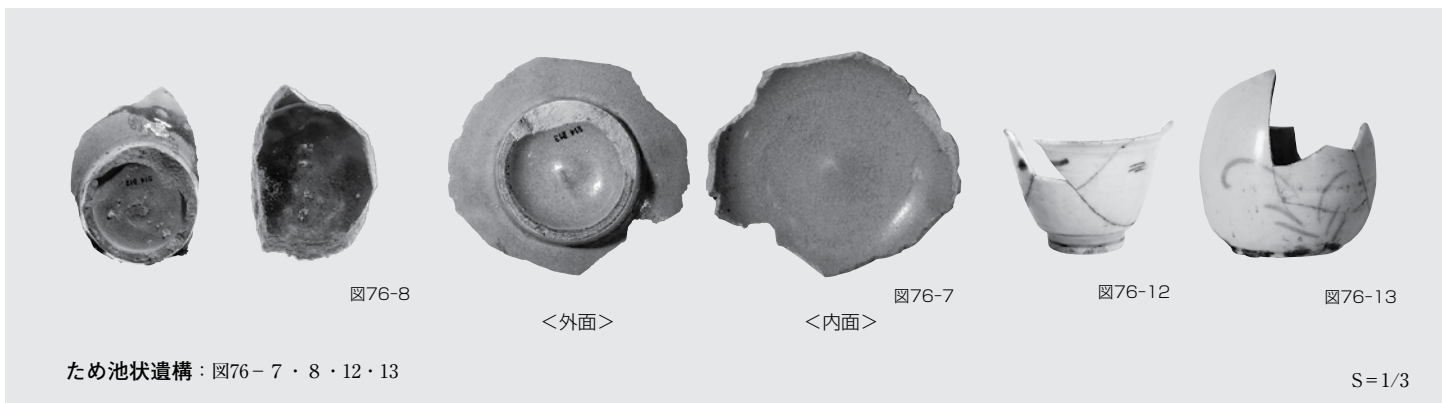
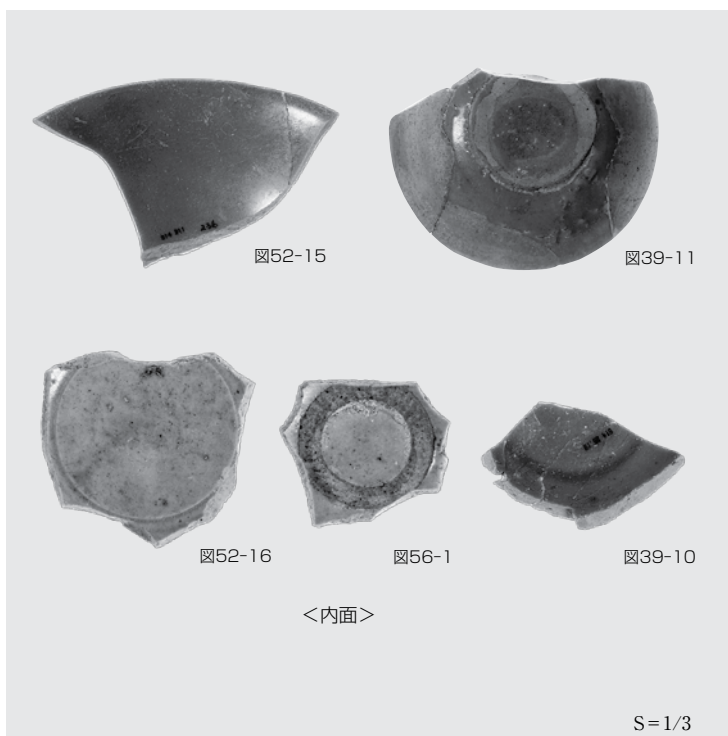
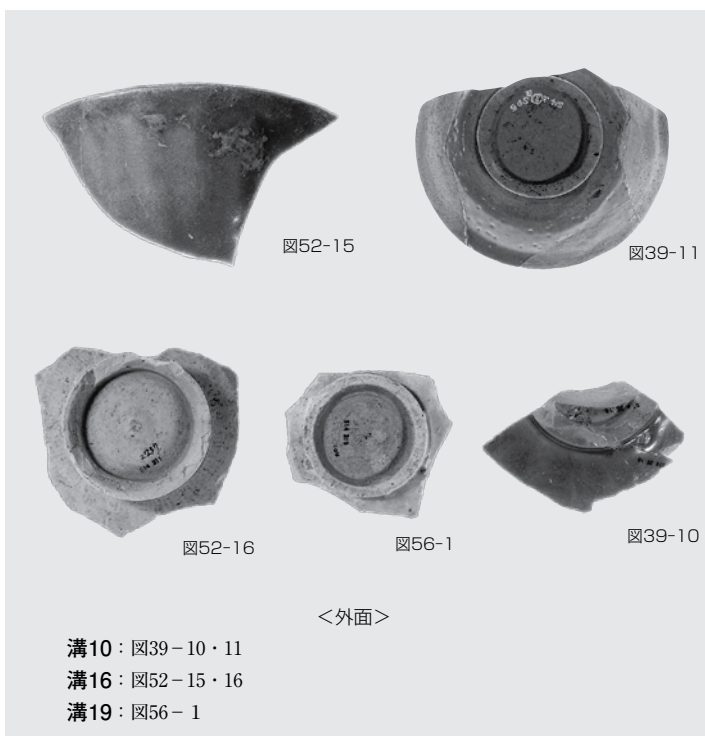
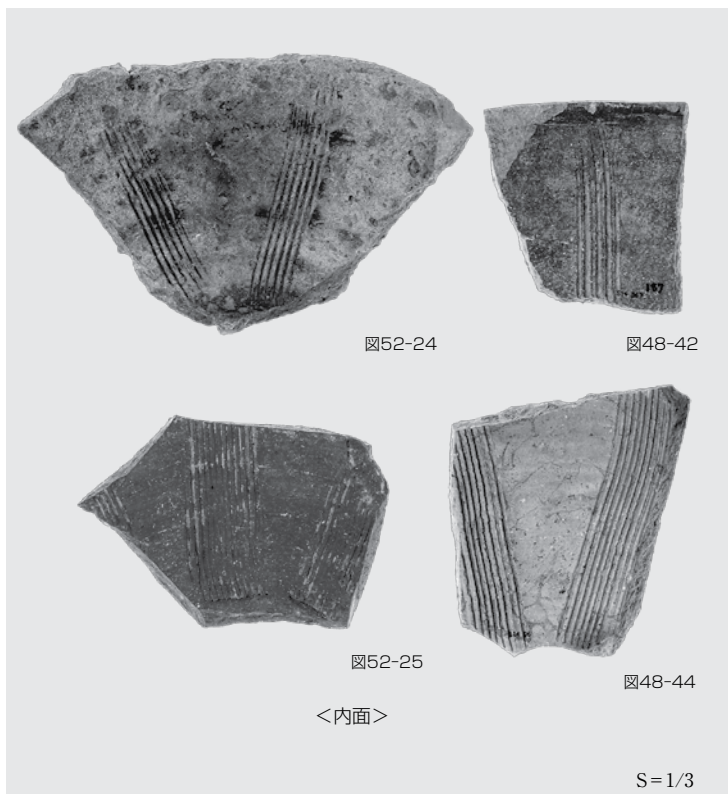
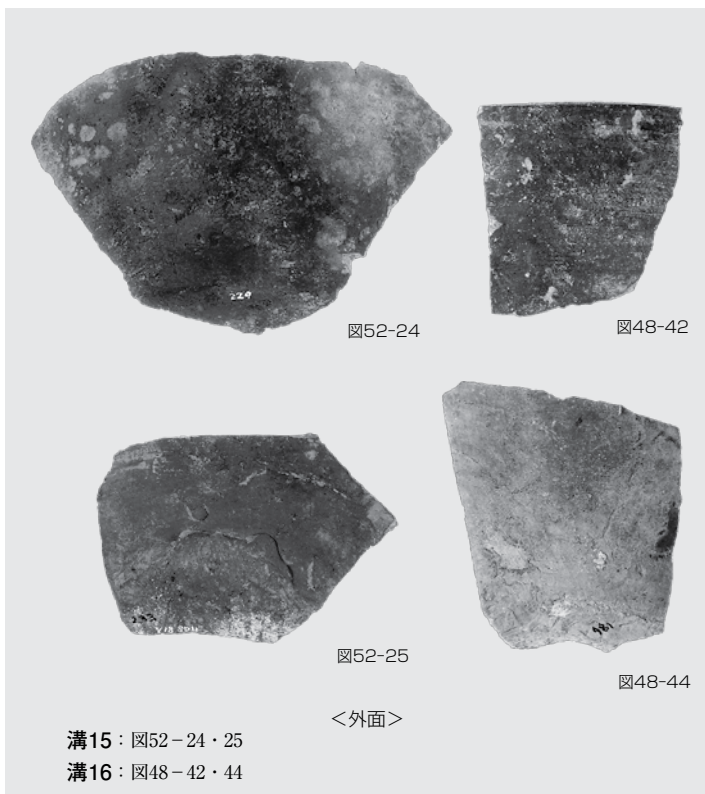
井戸3 図20-5・6

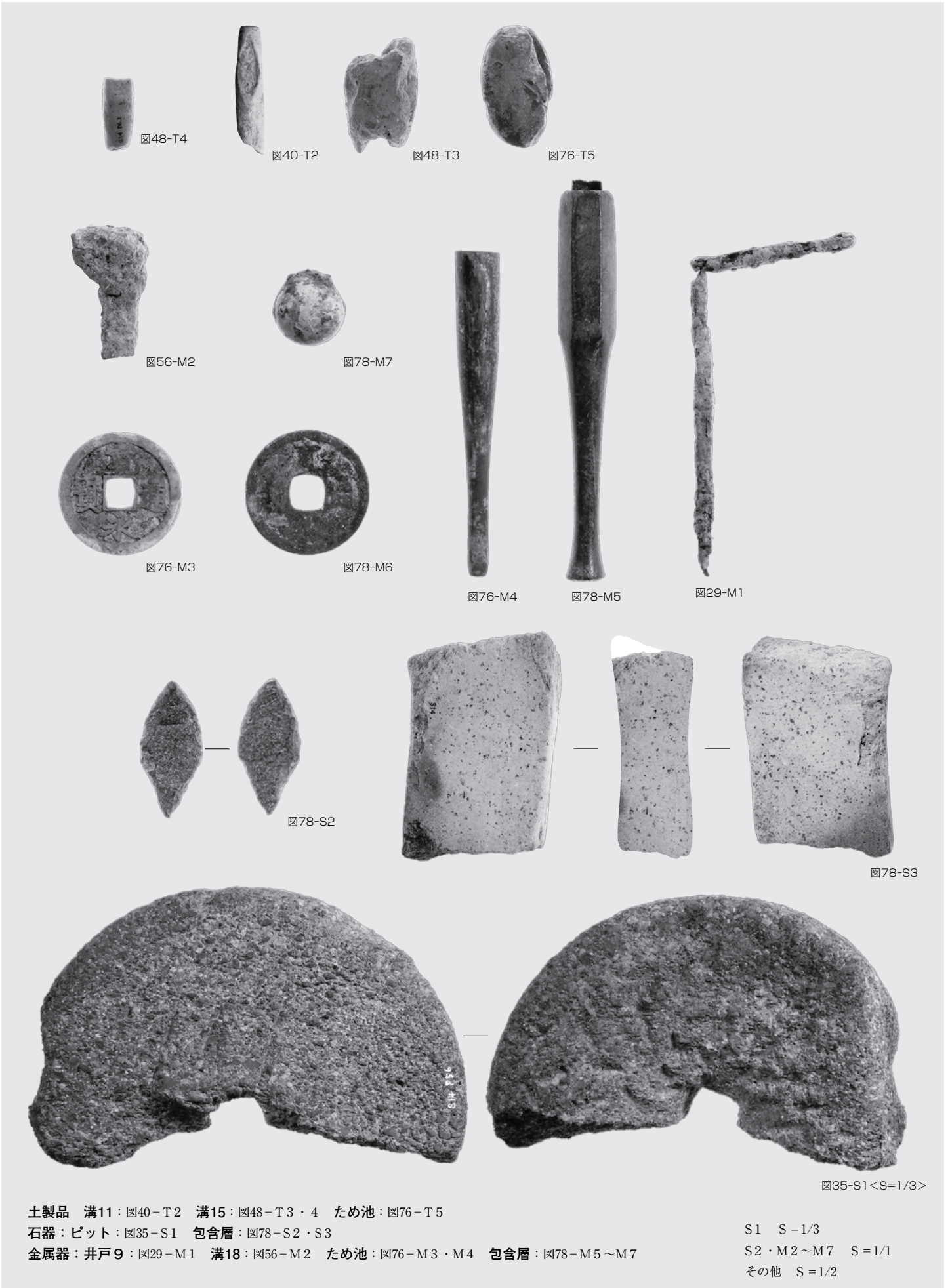
井戸4 図22-2

溝10 図39-9・14

溝16 図52-20・21

図版4 平安～江戸時代の陶磁器





図版6 木製品 (平安～江戸時代)



報告書抄録

ふりがな	おかやまだいがくこうないいせきはつつちょうさほうこく だい29さつ しかたいせき8							
書名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第29冊 鹿田遺跡8							
編著者名	岩崎志保(編著)・富岡直人							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1番1号							
発行年月日	2014(平成26)年3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	世界測地系	世界測地系			
しかたいせきだい 鹿田遺跡第14 じちょうさ 次調査	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 きたくしかたちょう 北区鹿田町2 ちょうめほんごう 丁目5番1号	33201	県2208	34°38'59	133°55'16	20030713) 20031217	1331m ²	病棟建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺溝		主な遺物		特記事項
鹿田遺跡第14 次調査	田畑	弥生時代		溝		弥生土器		
	田畑	古墳時代		溝		土師器		
	集落	平安時代～戦国時代		井戸 土坑 溝 柱穴		土師質土器・須恵器・瓦器・白磁・青磁・瓦・土錘・木簡・櫛・曲げ物・箸		
	田畑	江戸時代		土坑 溝 ため池状遺構		陶磁器・瓦・漆塗り 椀・箸		

2014年3月24日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第29冊

鹿田遺跡8

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市北区津島中三丁目1番1号
(086) 251-7290

印刷 西尾総合印刷